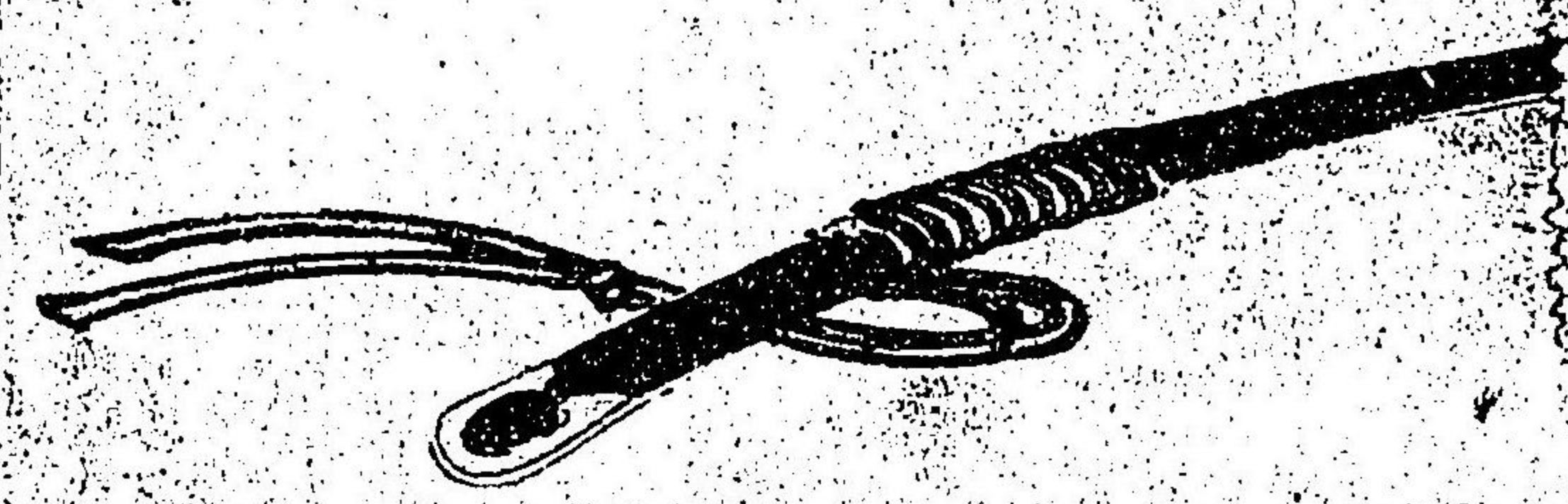
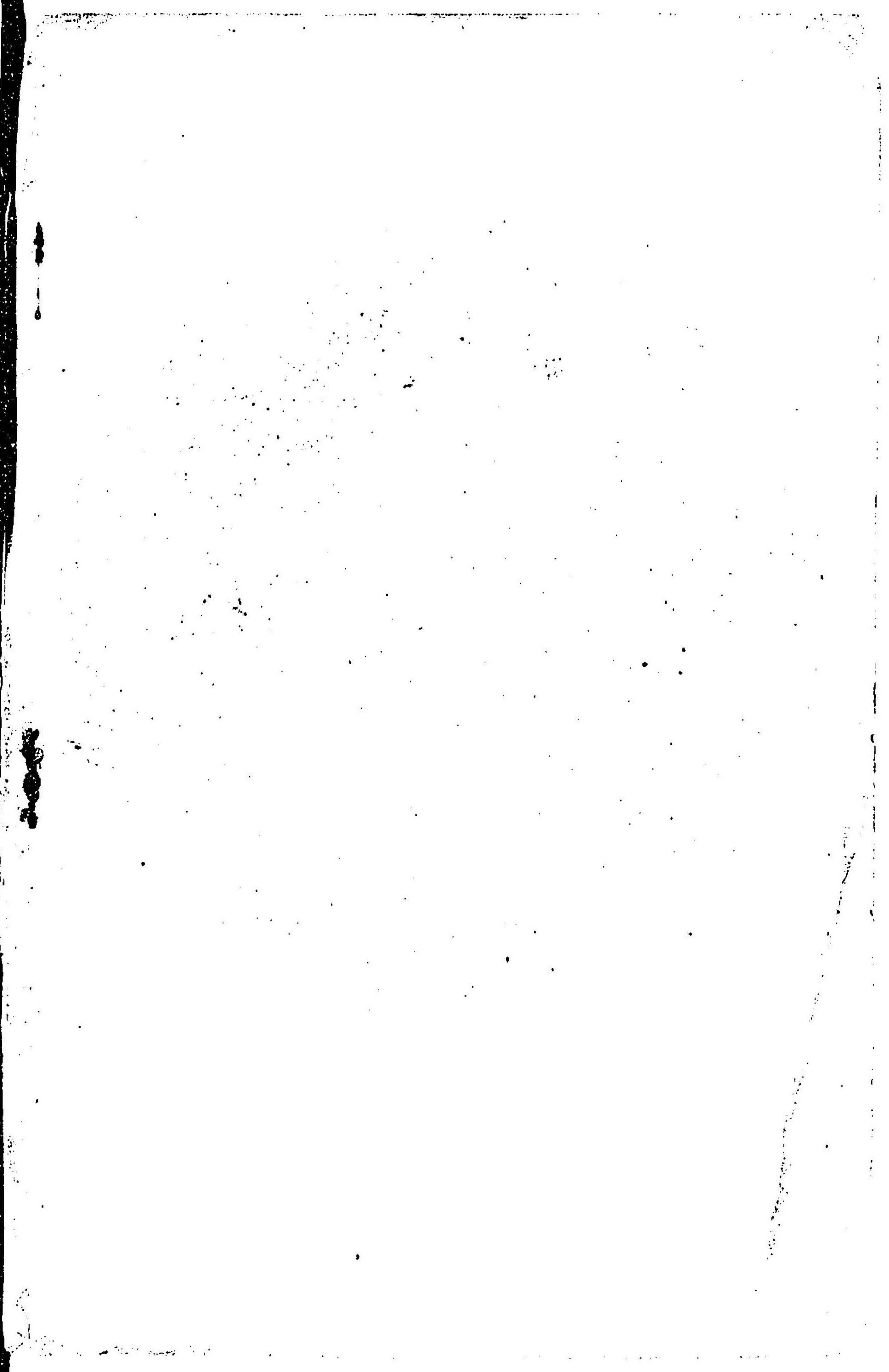
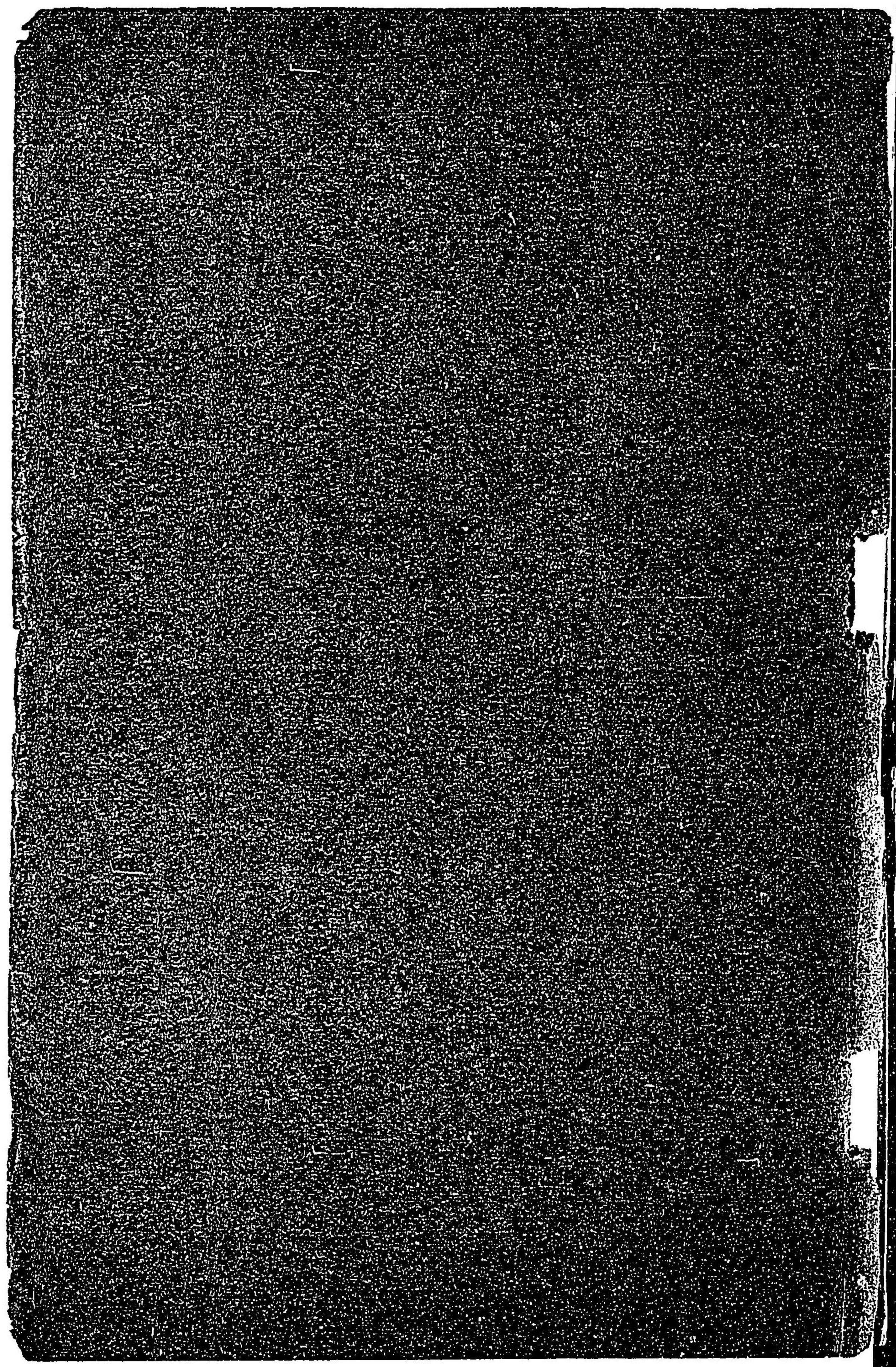


山田唯夫選記

一休和尚地獄太夫

三者社一瓢演







やみれ 夜小唄かぬのうまの

こころさけむ

生まぬえ乃父母と

恋しき

辛亥卯月
小佐野
信

709
709

地獄太夫

一休和尚地獄太夫

第一席

三省社一瓢講
山田唯夫速記

44.6.8

あり古たし出はは可
 ます昔もたさはは愛
 すからのたされ種々い
 彼歌とれれた名々子
 の人が見れたの主とと子
 の難わごの太湖面も借
 西題まも、此流石肖十二有も
 行法を暫支も支ば秋
 師出さの時支を天一首の旅
 が諸れて間のは考へて居られ
 國を難義考へて居られ
 巡錫したと居られ
 つて居云ふお話した、尤
 り云ふお話した、尤
 ます話した、尤
 時に、幾何も
 美濃

地獄太夫 二

國洲侯と云ふ處に参りました、すると或る家の軒端の梅の木に
鶯が止まつて啼いて居ります、元より有名なる歌人のことで
すから、大いに喜び其の梅の木の下に立留つて啼音を聞いて居
りますると、其處へ梅の木の主が出て参りまして、西行法師の
姿を眺め、主「オイ、其方は其處で何にをして居るのだ、定め
し梅の枝でも偷みに來たのだな」と云ふて頻りに責められる。
西「イヤ、愚僧は決して左様な者ではありません、今此處で
鶯の初音を聞いて楽しんで居たのだ、愚僧は歌人西行法師と云ふ
者……」と理由を申しましたら、主「ア、然うか、夫れでは茲に
題を出すから詠んで下さい、此處は美濃の國洲侯で河一つ隔て
ると尾張の國、就いては美濃、尾張、洲侯、梅、鶯と此の五つ
を詠み込んで下さい、西「ウム委細承知いたしました」と云ひながら
容易く一首を短冊に認めました、
「春來ればうぐひすのまた梅に來て

地獄太夫 三

之れを見て主人は大いに感心し、厚く西行を款待して尊とんだ
と云ふこととございます、然し夫れは僅か五つ位ですけれど
も、宵柏のは十二と云ふのですから、ナカ、に困難い、難
の事に宵柏は庄屋勘太夫に向ひ、宵時に庄屋殿、是れは頗る難
題でござるから、テニテハも合はぬか知れませんが、唯十二支
の文字を詠み込むと云ふだけで勘辨して下さい、勘夫れは宜し
うございます、宵然らば一つ……」と云ひながら頸に掛けたる
袋の中から取り出した一葉の短冊、矢立ての筆を取つてサラサ
ラと認めて差し出しました、勘太夫は其の短冊を取りあげて見
ると、
「いゝいゝぬらぬら、牛をどりしとて
うまれぬひつじうき名たつみは」
大勢の者は此の様子を眺めて、甲「何うでい兄弟、驚いたな、

地獄太夫

四

ア斯んな難題を此のお方があんなに早やくお書きなすつた、シ
 テ見ると全く諸國通歴をする人で牛なんか盗む人ぢやねエな、
 乙「然うだ兄弟の云ふ通り、あの人は餘程悪い人に違ひねエ」
 とヒソソ／＼話しをして居る、勘太夫はツク／＼眺めて感心いた
 し、勘「なる程、何うも恐れ入りました、貴所が全く牡丹花宵柏
 先生でござりましたか……」
 勘「ア、然うだ、何うだこれ勘辨
 して呉れるか、勘「イエ、何ういたしまして……勘辨ごころち
 やアございませぬ、承はれば貴所は久我大納言様の御次男ださ
 うで……」
 禮ではございませぬ、私しから差し上げます、何うかお
 持ち下さりませぬ……」
 持「オ、元談を云つちや不可ない、持つて
 いつて呉れツと云つても、此の牛は懐らへ還入らん、丑紅の時
 の泥牛とは違ふ、まさか殺らしてロースも食へない……」
 其んな事は仰在りませんでしたらうが……」
 勘「恐れ入りまするが、此

地獄太夫

五

れから旅をなさるにお乗りなすつては如何でございます、宵左
 様さ、夫れも宜いなア、夫れでは兎も角も此の牛は私しが申し
 受けやう、大きに何うも迷惑を掛けて氣の毒であつたな、勘「何
 うぞ私しの宅までお出でを願ひ度うございます、宵「ア、夫れは
 有難いが、又御厄介になるとしやう」と庄屋勘太夫始め多勢の
 者に別れを告げ、件の牛の背に乗つてノソ／＼と出掛けた、國
 々を牛へ乗つて修行をして歩いたのは宵柏先生計りで、變つた
 事が大層お好きと見わた牛の角へ金箔を置きまして様々の花を
 拵らへて、兩方の角へ是れを縛り付け、牛に飾りを付けて夫れ
 へ乗つて歩きます、往來の者が見て驚かない者ははない位、未だ
 宵柏先生年は三十五、泉州堺の町續きの處に家を構へ、茲に居
 て只だ友と入するの例の牛計り、宵柏先生の所へ歌詠み其の他
 詩人杯が出入りをいたし、是れ等の者を友として樂んで居りま
 した、然る所此の頃聞けば、眞珠庵の休禪師、住吉の社内

地獄太夫 六

庵を結んでお在でになると云ふ事を聞き、大層喜んだる宵柏先生、高名は雷の如く響き渡る一休禪師、過日一寸住吉社内に出逢つた事はあるが、未だ親しく言葉を交した事がないから、折があらば一休と云ふ人の志を試して見やうと思つて居りました、此方一休禪師は小茶庵に旅よりお歸りになつて、二三日前から如何門、呑空を相手になされて居られました、二三日前から如何いたした事か、顔の色が勝れませんが、一休新左衛門か、呑禪師の云はる通り、先生には何處ぞ御具合でも悪いのでございませるか、新ハイ禪師様や呑空にも心配かけて濟みませぬが、別に大した事もございませぬけれど、兩三日前より胸に痛みを覺へまして、甚だ難澁をいたします、然し御供をして参りました、拙者が禪師より先きに倒れては濟まん、心得實は今まで堪へに堪へて居りました、一休イヤ病は押して居ては却つて往かん、道中では思ふ様に手當も出来まいから、拙僧も暫ら

地獄太夫

くは此庵に居るつもり、一先づ京都へ歸つては如何だ、新ではございませぬが、是れまでお供をして参りましたのに、何分禪師様や呑空を殘し申して、京都へは……一休イヤ拙僧は今も云ふ通り、少しの間此庵に居やうと思ふから、又全快したら直ぐに來るがよい、新「恐れ入りました、ございませぬが、左様なら甚だ勝手がましけれども、お先きに京都へ立ち戻り、薬用の手當をいたし、又直ぐに参ります、一休「然うか、夫れでは歸京の上は大切にいたせよ、之ればかりは自分の力にも不可んけれど、然し今度對面するまでは、何分にも死なういやうにして呉れ、新「ハイ拙者も死なん積りでございませぬが、無常の風は時を嫌はずとやら申しまして……一休「然うさ、其の様な事もあつたけな、然し未だ十日や十五日位いは差支へなからう、氣樂なお方もあるもので、新左衛門も學識はあり、深く禪學を修めて居りまするか、其の場に立ち至つて驚ろく様な事はいたしません、新「夫れ

地獄太夫

では禪師御縁がございますれば生前に御面會いたします、然し
 次第によると是れがお別れになるかも知れませんが、然し
 か、然し目出度いな新左衛門、新「へエ……目出度うござい
 るか、一休が目出度いなではないか、亦遇ふ時もあると思ふては往か
 ん、是れが別れになつた所で、一休も何日までも生きるもので
 なし、一度は冥土の道で對面をする、門松は冥土の旅の一里塚
 と拙僧が正月に於いて詠んだ事があつたな、新左様でございま
 す、一休目出度もあり目出度くもなし、ア、本來空無一物、然し
 夫れは夫れとして、何うか今暫らく死なうい様にいたして呉れ
 然うでもない若し冥土から迎いが來たら、まだ一月ばかり待て
 といつて日延をして置いたが宜い、新「ハイ拙者も日延をいたし
 て置きます心算り、一休然うするが宜い、新「ハイ拙者も日延を
 で通し駕籠を履ふて來なさい、して其方は新左衛門を送つて參
 れ、吞「ハッ」と答へて吞空は飛び出した、新「禪師吞空は禪師様

地獄太夫

の御用を……一休「イヤ、拙僧は獨りで宜い、吞空を連れて參
 れ、新「ハッ有難うございます」と云つて居る内に二挺の駕籠が
 來た、新「然らば禪師……」と夫れへ乗りました新左衛門、何ん
 となく名残り惜しき様子でございます、禪師も同じ思ひにて夫
 れへお出でになり、一休「新左何うも顔色が悪いな、成る丈け氣を
 つけて往きなさいよ、新「ハイ有難う存じます、一休「ア、待て、
 新左、是れを持つて行きなさい」と禪師は持つてお出で遊ばし
 た珠數を取り出し、一休「是れは拙僧が秘藏にして居る珠數ぢや、
 之れを其方に進せ、是れを持つて行くこと、謂はゞ一休と一緒
 に行くやうなものぢや、又始終一緒に居るやうなもの……新
 ハッ禪師様折角の思召し、有難く頂戴いたします」と新左
 衛門は七珍萬寶を貰ひましたるよりも、禪師のお持ち遊ばした
 珠數の方を有難く思ひ、押し藏いて居ります様子、禪師は
 つく、御覽なされて、一休「新左どうも助かるまい」と思はず知

地獄太夫

らす仰しやつた。新命なくばいたし方がございませぬ……四、相を悟ると云ふ位いでございまして、禪師も同道をして京都へ歸らないのは大變情のない様でございするが、決して然うでありません、モウ定命限りありますので、死ぬなど仰しやつて若し冥土から迎ひが来たら断はれと云ふのは、何うか道中で死なしたくない、早く都へ参つて往生得脱をする様にと云ふ思召しして、一休「呑空、能く氣を附けて遣らつしやい、呑「ハイ、畏まりました」と兩人は駕籠に揺られて参りました、後に禪師は只だ獨りで煮炊をあそばされ、時としては泥鰌汁などを拵らへ召し上つて居る、近傍の人々も大いに不審して禪師に向ひます、近人「御出家でありながら、魚鳥などを召し上つても宜しいものでございするか、一休「オ、食ふとも、世間の腥坊主は魚肉を食はぬか知らぬが、拙僧は身軀の爲めぢ

地獄太夫

やから、樂に食ふぢやア」と仰せられました、平氣で濁酒を飲んで楽しんで居らつしやる、處へ丁度或る日の事、此の庵へ訪ねて来たつた行脚僧が一人、是れ餘人にあらず、牡丹花肖柏でございす、例の牛に今日は取り別け大層飾り付け、五色の絹を以つて轡を拵らへて、是れを自身で持ち、金箔の置いて在りまする牛の角へは、四季折々の造り花を結び付け、自身に牛を追ひながら住吉社内小茶庵の門へ歩つて参りました、時に一休禪師は机に憑れて何にか書見をなされてお在になる、すると突然窓の外にて、肖「什麼作」禪師はヒヨイと見て、ニツコリ笑みを含まれながら、一休「説破、肖「達磨舌頭誰れか附與せん、一休「角をためて牛を殺す、枝を切りて樹を枯らす、汝知らずや」と仰しやつた、恐れ入つて肖柏は、肖「ハッ」と首を下げる、鐵の如意を以つて丸窓から半身を出された禪師は、肖柏の顔頭をコッンとお撲ちになりました、何んだか局外から聞いて居ては少し

地獄太天

も解らぬ様でございませぬが、抑も禪家は達磨宗で、肖柏のお
 問ひ申したのには、貴僧は京都大徳寺を流浪して此の難波の住吉に
 来て在らつしやつては、後で誰れが達磨宗を廣めますか、何故
 斯う云ふ處に來てお在でなさいませぬかと云ふ意味で、禪師のお
 答は、杖を拄ぐるも時節が悪ければ木を枯らし、牛の角も其
 の節季でなければ、牛を殺して仕舞うではないか、今京洛の地
 は今にも戦争でも始まらうと云ふ様な有様、大切な達磨宗を擴
 めやうとしても、迎ても人の氣が寄るものでは無い、時節を待
 たなければならぬから、諸國行脚を思ひ立ち、先づ此の難波の
 住吉に世を捨て詫び住居をして居るのぢやどの意味でございま
 す、詳しく解釋いたしますから、概略いたして置きます。肖手前
 なものでございませぬから、ナカク其の意味は廣大無邊
 肖柏と申す者で……」と云ひながら這入つて参りましたのを見
 ますると、當今ならば一目朝鮮人と見違ひませうか、一寸異な

地獄太夫

つた所が、あります、其の前に明服と云ふので、所謂支那服を着
 て居ります、近來は洋服を着て歩いて、誰れも不思議だと思
 ひませぬ、ハイカラだとか何んとか申して……然し昔し大小を
 腰に帶挾さんで居つた時分に、そんな風をして歩いて居つたの
 は此の人獨り、一休禪師も妙な奴が來たなと思つて居られまし
 たが、牡丹花肖柏と云ふ名は豫て承知をいたして居る一休ア、
 左様か、一度對面をしたと思ふて居た所、能く尋ねて呉れた
 マア此方へ……然し二人連れで來なすつたな肖イエ別に友と
 するものもございませぬ、手前一人で……一休オ、肖柏は牛と
 二人で住居すると聞いたが牛はお前の女房か、夫れとも弟かな
 肖ヘエ……一休男なら舎弟であらう、女ならば女房にしたの
 であらうな肖誰れを……一休あの牛を……肖冗談仰しやつ
 ては不可ませぬ、アツハ、一休
 「涼しさを月に吹き寄す住吉や、兩社の秋の沖津汐風」

「休」イヤ、宵柏やり居るな……ア、此方へ通んなさい。宵夫れては通つて宜しうございますか。休「宜いともく、然し手挾だから牛だけは門へ繫いで置きなさい。宵「成る程御尤ども、然らばさう云ふ事にいたしましたせう。と牛を樹木に繫いで這入つて来た。休「お前は却々面白い男だな、何うぞ是れから時々遊びに来て貰ひたひ。宵「エ、恐れ入りました、手前も禪師をお尋ね申し、又禪師も時として茅屋ではございますがお出でに預りたい。と是れから二人は問答をしたり、歌を詠んだり、牛を貰つた話しました。をいたして、禪師も大いに喜んで終日相手になつて居りやうかな。宵「然うでございますな。馳走になりませうが、然し草庵の事なれば、碌なものもございますまい。休「然うさな、ア、碌なものない、先づ一番深山あるのは水だ、水でも呑むかな。宵「餅ちやあるまいし、水ばかりも呑んでは居られませぬ。其

の中に禪師手拵らへで粥をお炊きになり、梅干を添へて「休」ア、抽僧も食べるから、お前も此の粥を啜つて行きなさい。モウ其の中に月も出る、月を履んで戻るのが宜しい。宵「大きに左様で……然らば頂戴いたす。と初対面の馳走が梅干に粥、遂々盡の中より夜に至るまで、互ひに物語りも盡さず、漸々月を見て禪師に別れを告げ宵柏は、戸外に立ち出で様とする時、夏夜の影踏む道の忘れ具、月に寄せ来る住吉の濱。宵「柏が認めめた。宵「禪師、如何でございます。休「フム……成る程、月に寄せ来るは面白いな、親しく交る互ひの志しは茲に在りか……又何日来るな。宵「命あらば又明日出ます。休「死んだら抽僧が引導を渡して遣らう。宵「禪師のお言葉でござるが、死んでから導いて下さつても役に立ちませんな、引導は息ある中かと思ひます。休「宵柏、其方は中々理屈を云ふが、死ぬのが知れるかな。宵「ヘエ……休「其方は眠るのか分るか。宵「ヘエ」

を聞いて、一体可笑しな奴だな、大根を賣るのに是れぞ眞實の大
 違ひと申して居る……… 肖「左様でございます、誠に何うも妙な
 大根屋「参りました、一つ呼び込んで尋ねて見ませう……… コレ
 います、肖「ア、然うか、大根「一把若干だ、商「一把が二文のと三文の
 とでございます、是れぞ眞實の大違ひぢや、肖「ソレぢやな、大
 大根「は別に愁しうないが、其の方の端々に此れぞ眞實の大
 違ひと申して居るが、夫れは一体何んの事ぢや、其の方は氣で
 も違つて居るのか、商「其様な事はありませぬ、私しは此様の詰
 まらない大根賣ですが、今度公卿さん達が御集まりで歌會があ
 来になつて居ります、今度公卿さん達が御集まりで歌會があ
 るそうで「これぞまことの巧く上りの句が出来た者に褒美を出さつ
 んと出来て居りました、巧く上りの句が出来た者に褒美を出さつ
 しやるそうで、早やく云ふと歌の附合ひでございませぬ、合弟が

と肖「柏も驚いた、何んな人でも死ぬ時と寝る時は分るものでは
 ない、昨夜遅くなつて二時打つてから寝た、成る程二時打つてか
 ら枕に就いたが、寝た時は何時も十分だか分らない、幾ら何ん
 な人でもそれは分らない、死ぬのもそうです、傍に介抱して居
 る人が何うか注射して下さいとか何んとか種々云ふ、醫者も注
 射をしたり、又宜い薬を服して一旦息を引き取つた病人が、再
 び蘇生して又眠るが如くに死ぬのもあれば、往生際には苦しむ
 のもありますが、當人は自分で死ぬのもあれば、往生際には苦しむ
 同じでございます、肖「柏「息ある内に引導を渡して呉れと云つ
 たのは、餘程何うも面白い言葉で、禪師も非常に感心なされ、
 此の後は肖「柏先生「毎日此の小茶庵に禪師を尋ねて参ります
 或る日は肖「柏「禪師「お話しをして在らつしやると、戸外の方に
 商人「参りました、商「今日は大根を買つて呉れませんか、大根
 肖「これぞ眞實の大違ひ大根、大根「大根を買つて呉れませんか、大根
 禪師と肖「柏は之れ

云ふには、兄貴は大根を賣りながら諸國を歩き廻はるから、何んぞ佳い句を考へて呉れと云ふ依頼、私しも舍弟の爲め、又出世の端緒にもなるだろうと思ひまして、毎日考へて遂々口癖の様にやつて仕舞つたのでございます。是れを聞いて禪師が「柏のお兩人はお笑ひになり、一体「フム、然うか、其れは誠に面白、い事ぢや、宵「私しが上の句を一つ考へ出しました、一体「アツハ、ラツと認め、禪師の前に出した、宵「新様で」と筆紙取り上げ「アツハ、一体「ふたり行き一人はぬる、時雨かな、これぞまことの大違なり、御簾となる竹の産衣や上草履、これぞまことの大違ひなり」とは何うちやな、宵「是れは御名吟でございませう、サア大根屋之れを持つて行つて弟に遣れ、商「へい、此れは何うも有難うございませう」と喜んで、早速之れを携へて京に参り、弟に遣は

しますると、此の弟が自分が詠んだ様な顔をして、歌の會へ持つて参りました、種々ある中で此の一体禪師のお詠みなすつた歌が歴々の出来で、第一等の賞を戴いたと申す事でございます、然うでございませう、此の位い違つて居るものはありませぬ、恐れ多くも畏こき邊りの玉體を隠し奉る御簾と、穢多非人に履かれる草履ともなると云ふのですから、大根買も非常に喜んで早速禪師の庵室へ歩つて参り、大根を二夕車お禮に持参いたしました、此方一体禪師は殆んど朝から晩まで宵柏を相手にいたして、楽しんで居られますと、或る日の事、○「ハイ御免下さいまし」と這入つて参りましたのは、年齢四十前後の町人風の男、寒い時分だと云ふに汗を拭きながら夫れへ参り、町「エ、少々御願ひがございませうか、宵「一体お前は何處から参つたのぢや、町「へい、庵は禪師様御寓居と承知して参りましたが、禪師様は御在庵でございませうか、宵「一体お前は何處から参つたのぢや、町「へい

私しは此の堺の町の薬種屋小西屋利兵衛の手代宗吉と申しま
す、エ、少々禪師様に御目にかゝり、お願ひ申したい事がござ
いまして参りました。肯ア、然うか少々待ちなさい、エ、禪師
今お聞き及びの通り、堺の薬種問屋の手代が参り、お目にか
つてお願ひいたしたい事があるを申して居りますが……一休何
に薬種問屋から……ア、此處へ通して呉れ。肯「ハイ畏まりました
た」と出て来て。肯「丁度幸ひ禪師御在座だから、此方へ上がつ
て御願ひ申せ」と云はれて小西屋の手代宗吉は禪師の前へ遣つ
て参る、サア是れから宗吉が如何なる事を一休禪師にお願ひい
かしまするや、一寸一ト息、次席に委しく口演じます。

第二席

小西屋利兵衛の手代宗吉は肯柏に案内せられて禪師の前へ来た
り、兩手を支へ。宗「ハッコレハ」禪師様でございしまするか、

私しは只今申しあげましたる通り小西屋の手代宗吉と申しま
す。者でございしますか……一休「フ、ム拙僧が一休ぢやが、見受け
る所大層急いで居る様ぢやな、何にか間違ひでも出来たのかな
宗「イエ左様なことではございませぬ、禪師様にお願ひ申した
いと云ふのは、餘の儀ではございませぬ、手前共に竹次郎と申
します若旦那が一人ございます、一人子息で、跡嗣をいたしま
す大切なお方で……一休「ウム……成る程。宗「其のお方が丁度三
四年前から、此の乳守の廓に鍵屋長兵衛と申します、遊女屋が
ございます、其の鍵屋の抱へて地獄太夫と云ふ遊女の許へ通ひ
始めまして、丁度足掛け四年計りの内に四千兩からの金子を失
ないましてございます。一休「ハ、ア成る程、その竹次郎と云ふ者
が地獄太夫の所へ通つて、足掛け四年に四千兩餘も遣つたと
申すのか。宗「はい左様でございます。一休「ヤレ、誠に少し計り
遣つたナ。宗「へエ……禪師様の御身分から見ましたら、聊かで

もございませうが、エ、ナニ、手前共主人も三千兩や五千兩の
お金子は、左程心配はいたしませぬが、ところが其の遊女を女
房にしたいと云ふのが竹次郎の望みでございます 一休「フム……
宗「何うか落籍を仕やうと斯う存じまして、竹次郎が落籍の相
談に手前と他の手代と同道で参りまして、鍵屋長兵衛に話しをい
たしますると、長兵衛の申しまするには、太夫さへ承知いたし
ますればと申しました、太夫が承知いたしませぬ、永らく子
供の中から當家の世話になつて居る親方に對し、唯自分一人の
身が軽くなることのみ思つては、薄情に當りますから、年季だけ
は無事に済ましたいと、それで段々と話しをいたしますると、
實意があるなら十年通へと太夫が申します、それで竹次郎は今
申す通り丁度四年通ひましたから、跡六年ばかり通はなければ
なりませんが、それを苦に病み氣が狂ひ、唯最う此の頃では誰れ
が参つても地獄太夫の事はかり申して居りません、ナカ

三二
杯には掛りもせず、薬も飲みませず、只だ一間へ退入つて其の
事ばかりを申して居ります、家内の者や親類共も集まつて、種
々相談いたしました、何うも良き思ひ付きがなく、幸ひ禪師様
が此の頃小茶庵にお出でになつて居るから、禪師様にお願ひ申
して竹次郎の發狂を癒して戴きたいと斯う申します、手前
がお願ひに出ましたのでございます、一休「ウムヨシ、然うか、
行つて遣らう、宗「有難う存じます、夫れでは何卒直ちにお
出でを願ひます、とこれから彼の宗吉が案内して、一休禪師は
宵柏を連れて小西屋の本宅へ歩つて来て見ますと、成程程堺
屈指の資産家で、間口が十間以上もございませぬ、店から通るの
ではなく別に家内の通りまする格子付きの處がございませぬ、宗
吉は先きへ駆け出して委細の事を主人利兵衛に話しをすると、
利兵衛始め一同の者も大いに喜び、早速にお出迎へ申しあげ
所へ粗末なる衣裳に法衣を纏ひ、附いて参りました坊さんを見

ると、腰に笛を差して居る、何んだか妙な者を連れて来たなど
 思ひながら、〇エ、禪師様には能くお出で下されまして、有難
 ふ存じます、サア何うぞお上り下されまする様」と案内せられ
 座敷へ通る、主人利兵衛は、利禪師様には斯様な所へお出で下
 し置かれまして有難う存じます、お聞き及びでもございませう
 が、梓竹次郎儀に就きまして大そう心配いたしました居ります、何
 うか癒ることならば、お癒しの程を御願ひ申します、一休「イヤ
 話には聞いたが、嘘かし面白いだらう、色々氣の狂ふのもある
 が、地獄太夫の許へ通ひ、十年通へば夫婦になる」と云はれて發
 狂したと云ふのは餘程面白い、宜しい心配をするな、一つ癒し
 て遣らう、して當人は何處に居るかな、利「エ、奥の間に……一
 ト間離れた所がございます、一休「フム……然らば亂暴でもするの
 か、利「イエトンと亂暴などはいたしません、唯人を見ますと
 太夫が来たなど、申しまして、小僧や下女が參つても太夫来た

かなど、申します、一休「ヨシ、狂ふて居ればそんなものぢや、
 誰れも来てはならぬぞ、次の間で聽いて居るのは構はぬが、座
 敷へ這入つて来ては不可、利「ハイ承知いたしました」と禪師は
 只だ一人教へられたる通り、竹次郎の居る座敷へ參りますと
 京間八疊にいたしまして、床には立派なる軸がかより、色々珍
 器が陳列して在ります、禪師は着座を遊ばしましたが、發狂人
 も種々ございまして、桑れ廻はるのもあり、又溫和しいのもご
 ざいます、此の竹次郎などは至つて温和な方で、見た所二十四
 五歳の立派な若者、禪師が「一休「コリヤ竹次郎……竹「オヤ太夫
 さん來なすつたなア、一休「竹次郎拙僧は一休ぢや、圓顔を見
 よ、竹「オヤ、太夫さんは居になつたと見ゆる」と最早や男女
 の鑑別もなくなつたと見ゆる、一休「乃公ちやよ、一休「ちやよ」と
 云はれて竹次郎もホッと氣が付いて見ると、元より學問も幾分
 がさしてあるし、一休と御名前を聞いて驚きて一歩後へ退がつ

て、盛に兩手を支へ 竹「ハ、ア禪師様でございますか、御無禮をいたしました、何うして私共の様な町家へお出で下さいましたか」と丁寧な御辭儀をする、此の邊を見ると左して氣が狂ふて居るとも思へない、一休禪師は容姿を更ため一休時に竹次郎、其の方は近頃乳守の廓へ参り、地獄太夫の許へ通ふそうちやナ 竹「ハイ私しが足かけ四年通ふて居り、金子を出して落籍して遣らうと申しますが、更らに應じませぬ、あなたが眞實を盡して呉れよば應せぬ譯でもないが、十年通へと申しまするによつて、私しは十年通うと思つて居ります、一休「ウム左様か、通ふのも宜しいが、

年でも通ふが宜い、第一此の財産は大き過ぎる、早やく此の位の財産は潰ぶして仕舞はにやいかぬ、次の間に聞いて居た兩親や親類共は驚いたの驚かないのぢやございませぬ、發狂人に及物と云ふ事があるが發狂人を捕へて彼様な亂暴な事を仰しやつて居る 竹「左様ならば禪師様、此の身代を潰しても宜しうございますか 一休「ア、宜いともく、それは早やく潰すが宜い、横令財産は潰しても太夫の心が解る様になれば、又其の金子の返らんものでもないから、出來るだけ太夫の側にクツ付いて居て太夫の心が解ける様にしなさい」と云ふのを聞いて家内一統の者は一同是れはく大變な事になつて來た、たゞでさへ彼の様に太夫に夢中になつて發狂までして居るものを、彼様な事を云へば發狂は益々盛んになるばかりだ」と、驚いて居る 竹「夫れでは是れから六年が十年でも太夫の心が解けるまで……一休「然うく通はにやいかぬ、永く通はなければ人の心は知れるもの

ではないぞ、併し竹次郎、通ふからとて目的がなければいかん
 を宜いか、今まで何年かか通ふて居ると申したな、竹「ハイ、
 是れまで四年間殆んどかゝさすに通ふて居りまするが、まだ一
 夜も男女の交はりはいたしませぬ、一休「フム……ヨシ」
 しやりながら腰に差して居た扇をお出しに相なりました、是れ
 は小菜庵にお居でになるときに、お書き遊ばしたもので、一休「マ
 ア竹次郎、此の扇を能く見さつしやい」と竹次郎の前へ置いた
 竹次郎は戴いて開いて見ると、表に何うも無難作な墨繪の鴉が
 一羽描いてあつて、其の脇に
 「やみの夜に鳴かぬ鳥の聲きけば、生れぬ先の父母を戀しき」
 と一種の道歌が識してございます、一休「何うだ竹次郎、其の歌が
 解るか、竹「ハイ解りません」是れは解らぬ筈です、聞の晩に暗
 かぬ鳥の聲が聞へるものでもなければ、生れぬ先の父母が戀
 しいなと云ふは、逆も解る筈がございませぬ、一休「何うちや解

らぬかな、竹「何うも解りかねます、一休「然うか其れでは之れは其
 方に遣はす故、此の歌の意味を考へて見さつしやい、是れが解
 るやうになれば、地獄太夫は喜んで直ぐ當家に来るだらうし、
 又お前の心にも従ふだらう、竹「へエ……此の歌が解れば太夫の
 心も解け、當家へ来ると仰しやいますか、一休「ア、来るとも、
 此の道歌が解らぬ様では地獄太夫は決して来ないぞ、聞けば地
 獄は固より能く道歌を心得て居る由、其方が是れしきの事を知
 らぬ様ではいかぬ、さうあつても考へが付かぬときは、其の扇
 を持つて乳守の遊廓へ参り、地獄太夫に遇ふて、此の扇を一休
 が呉れたが、何う云ふ譯だと尋ねて見よ、竹「ハッ畏まりました
 一休「然し竹次郎、今日より三日の間は考へて居れ、今解らぬか
 らと云ふて参つては成らぬ、遊廓に行く時は一人で行く、家
 内は大勢の様であるから、多くの者を連れ金は車に積んで持
 出せ、タツタ一ト晩にドシ、散財へ」と、之れを聞いて居た

地獄太夫

兩親始め大勢の者が一同ナンダ大變な事を禪師様は教へなさる金子を車に積んで行けなんて、是れは危ない、此の鹽梅では、
シナ事が出来るかも知れない、と皆々心配をして居る。一休「宜い
かな」竹「ハイ一休「夫れでは拙僧は歸るぞ、宜く考へて見さつし
やい」と禪師は漸々次の間へ出てお居て遊ばす、宵柏は側に居
りまして宵禪師何うも巧い事を仰るに、竹次郎が三日考へて分ら
で大抵癒る、ア、コリヤ、皆の衆、竹次郎が三日考へて分ら
ぬ時に、若し地獄の所へ開きに行くに申したら、立派にして遣
れよ、何に不足ない財産であるから、三千や四千兩の金子を
使ふても何んでもない、子供の命は大事だぞよ、兩親「誠に有難う
存じます」左右する内に料理などが出ましたが、禪師は堅く辭
して「一休「ア、歸らう」と宵柏を連れて左視右視考へて
居ります、竹「間の夜に啼かぬ鳥の聲、間の夜に、鳥の聲、生れ

地獄太夫

ぬ先の父母が戀しい、慈母さんが戀しい、啼かない鳥、間の晩
サア兩親は驚いた、利「婆さん困つたナ、折角一休様が癒して遣
ると仰つたのに、又彼の上にも鳥を付けて仕舞つた」此方竹次
郎は、鳥々々と云つて考へて見ても、啼かぬ鳥の聲が解りませ
其處で一日二日、いよ／＼三日目と相なりましたが、何うして
も解りませんから、四日目の朝、竹「エ、御父ッさん……利「何
うした竹次郎、竹「只今から乳守の遊廓へ参り、利「ホーラ始まつ
た、竹「小菜庵の一休様、仰しやつた通り、充分支度をして下さ
い、此の財産はとて長い事はございませぬ、と云はれて利兵衛
衛も驚いたが、禪師様のお言葉もある事だし、又大事な一人息
子の命には替へられない、云ふが儘に利「夫れは何うでもする
がよい」と直ぐに是れから、宗吉の外四五名が附いて乳守の遊
廓へ参り、と健屋の地獄太夫に面會をして、竹「さて太夫、斯様
様云々で一休禪師様が私しの宅へお出でになつて、此の扇を下

い、御兩親様に苦勞をかけては甚だ濟まない事だ』と云ふのは
 常人の如くでございませぬ。地獄太夫は、御覽なさい竹次郎様、あ
 なた様は此處へお出でなされた時、お歸りなされる時とは、大
 變に様子が變つて在らつしやいます。御兩親様と云ふ事がお解
 りになれば、御氣分が慎まつたに相違ございませぬ。竹次郎、太
 夫、お前に云はれて私しも氣が附いた、今まで此の道歌の意味
 を考へ出したいと、夫れ計り考へて居たので氣が慎まつたもの
 と見ねる、夫れでは太夫、夫れを考へて置いて下され』と眞實
 氣が慎つた物と見ねて、モウ遊ぶ處か直ぐに手代を連れて歸つ
 て仕舞つた、此方地獄太夫は竹次郎を歸して後、暇さへあると
 地獄太夫の夜に啼かぬ鳥の聲聞けば、闇の夜の鳥、啼かぬ鳥の聲
 と夢中になつて考へて居るから、主人は大いに驚いた、主何う
 も一休様は飛んだ事をして下すつた、小西屋の息子の狂氣を宅
 の太夫にまで傳染して仕舞はれた』など、氣を揉んで居ります

されて、三日の間考へて見て、もし解らなければ太夫の許へ行
 つて聞いて見る、あの地獄太夫はナカノの學者だそうだから
 了解ると仰しやつた、何に分にも一つ考へて下さい』と云はれ
 地獄太夫は其の扇を取りあげて、お歌を拜見すると一休様の御
 筆に相違ございませぬから暫らく推戴して居りましたが、地獄
 、何うも有難いこと、一休禪師様をお尋ね申し上げ様と思つて
 居ても不淨の身の上ゆゑ、御遠慮を申しあげて居りましたが、
 此の扇のお歌、忝けなく拜見いたしました、けれども何うも妾
 しには此の意味が解りかねます、兎も角も此れは置いて往つて
 下さい。竹次郎、夫れでは何うか考へて下さい。地獄太夫は宜しうござい
 ます、あなた様は是れから直ぐにお歸り遊ばします様、遊里
 に一夜でもお居でになりましたしては禪師様にも、又御兩親様にも
 濟まぬ事とございませぬから、竹次郎、然う、私しも氣が附いた、有
 り餘る財産とは云ひながら、溢りに之れを使ふのは子の役でな

地獄太夫

サア是れからいよく、一休大禪師と彼の有名な地獄太夫と
問答の一條より、例の禰禰に一休禪師が筆をお染めになると云
ふ講談、次席に於いて申しあげます。

第三席

借て此方小菜庵に於きまして一休禪師は、相も變はらず牡丹花
背柏を相手に談話をして居られます。一休背柏、指折り數ふる
と小西屋利兵衛方へ參つてから、最う十四五日経つが、アレで
竹次郎に解つたのだらうかナ。背イヤナカ、竹次郎には解り
ますまい。一休夫れでは太夫の許へ持つて參つたらうが、太夫な
ら解るだらうかナ。背サア如何でございませうか……」など
お話しをして居らつしやると、表の方が俄かに騒がしくワアワ
アと云ふ人聲がいたします。背柏は、背ハテ何事だらう」と
云ひながら圓窓を明けて見ると、傾城の地獄太夫が竹輿へ乗つ

地獄太夫

て參りました。先づ江戸では搦婆、新造、上方では仲居、萬太
なご、申しまして、これは遊廓の通言でございませう、新造に禿
手代を一名供に連れ、懸て竹輿から出ますと、高い黒塗の下駄
を穿いて、仕掛と申しまして、御殿奥女中が着ると禰禰、遊女
の方では打掛又は仕掛と申します。背中には地獄の圖を十分に
縫ひ現はした大したものを着て居ります。一休ヤア大層な人だナ
と云ふのは地獄太夫に附いて来た者ばかりではありませぬ、是
れを見に大勢の人がゾロゾロ附いて来て居るのでございませぬ、
すると手代が歩つて參つて、手へ御願ひでございませぬ、背何
んぢや、手籠屋長兵衛の抱へ地獄太夫さんが、禰禰様にお目通
りを願ひに參りました。背少、控へて居れ」と背柏は此の由を
禰師に申し上げると、此方へ通せと仰しやるので、背柏は此の由を
愛ましたは漸う一人は十一歳位、今獨りは九歳位の禿で、いとま
愛らしき顔容にて、禿御禰師様、太夫さんが御願ひがございま

す」と、驚の初音を嘲る様な聲をいたして、両手を支へます。一休「お前達の名は何ん
 背柏、まことに綺麗な兒ぢやな、コリヤ、
 と申す。○「ハイ、妾しは松山、△「妾しは花車、一休「オ、劍の山に火
 の車か」と仰しやつた、所へ太夫が参つて御挨拶を申しあげ
 其の挨拶よりから、見識の氣高き品格と云ひ、御兩人は暫時太
 夫の顔を凝視して在つしやる、抑も此の太夫の美しさと云ふもの
 は俗に云ふ、沈魚落鴈、閉花羞月、雪か氷か白鷺か、普賢菩薩
 の再来か、観音薩埵が衆生濟度の其の爲めに、今下界に降つた
 かと疑はれるばかり、男子一ト度見るときは、即死に及ぶと云ふ様な
 絶世の佳人でございませぬ、一休「禪師は眼鏡を取り出し、一休「何ん
 と背柏、美しくしい顔ぢやナ、之れなら拙僧も迷ふなア、背御意
 にございませぬ」と二人で熱視して在つしやる、地獄太夫は餘りに
 体裁が惡いから、俯向いて居りました。背禪師太夫の美しい顔

を見て一句浮みました。氣樂なもので、女の顔を題にして歌を
 詠まうと云ふのですから……一休「ハ、ア何んとやつたカナ、背
 斯様でございませぬ、
 「眼で見ても心も動く柳かな」
 とは何うでございませぬか、一休「アム……成る程、其奴は面白いナ
 然らば拙僧が下の句を附けやう
 「眼で見ても心も動く柳かな、紅粉鐵漿つけた調體なり」
 とは、背「アハハハ、成る程」と打ち興じて在つしやる、此の時
 太夫はニッソリ笑つて、懐中より扇を取り出し、地「不浄の身で
 禪師様の御側へ参りますのは、甚だ恐れ入りましたが、此の
 度竹次郎様に下し置かれました扇の歌、其の意味を伺ひに参り
 ましてございませぬ、一休「ア、左様か、實は拙僧にも解らぬのぢや
 其處に居合す一同の者は笑ひ出した、詠んだ人に分らないと云
 ふのですから、側の人に分らう様がありませぬ、一休「太夫其の歌

は、一休が然う詠んで置いて、マア何う云ふ譯になるか拙僧も考へて居るのぢや」と申すのは是れは禪家悟道より出て居るのだから、禪師には勿論御解りになつて居るのでございませう。一休「折角來何にか譯あつて斯う仰せられたものでございませう。一休「折角來たものぢやが、今日は此の誨示は出來ぬ、何れ正月にでもなつ置かう、其方もそれまで考へて、尙ほ了得らねば其の時に教示て遣らう、今日は態々是れまで來て呉れたものだから、酒でも一杯馳走しやう、肖柏烟を附けよ。肖「ハッ畏まりました」と是れから濁酒の烟を始め、やがて烟が出來たので、肖柏は濁酒を持つて参りました、一休禪師も自らそれを御酌みなされて、一休「肖柏、是れを太夫に遣れ。肖「畏まりました」と盃を取つて太夫に向ひ、肖「太夫、是れは禪師自ら酌んで下し置かれた濁酒だ、折角だから有難く頂戴いたせ。」地獄太夫は濁酒などは呑み

たうもありませんが、然し折角禪師から下された盃でございませうから、地「ハイ有難く頂戴いたします」と呑み干した、肖柏は太夫に向ひ、肖「太夫お前は闇の夜の歌の御教示を願ひに來たがお前も女と生まれて定まる夫もなく、俗に申す泥水稼業、浮川竹の勤めと申して、然う云ふ濁つた水で育つ者には、禪家の悟道の歌は了解らない、遊廓を離れ、山住居してもして煩惱の塵を拂ひ、眼には清淨のものを見て心を清くするがよい」と云はれてニッコリ打ち笑つた地獄太夫は、ソク「肖柏の顔を覗て居たが、」山居して心清しと言ひつるに、濁酒さへなごか飲むらむ」と一首の歌で肖柏を取つて押へた、流石の肖柏も一本遣られてウンと息詰まり、少し体裁が悪かつた時に一休禪師は之れを眺めて一休「アハッハ、ハ、やつたな地獄太夫、肖柏もいかぬぞ、詰まらぬ時に意見をするから……サア、是れだ」と有合はせ

し紙にサラ〜と何にか認めて地獄太夫に渡した、太夫はハツと推戴して見ると、

「山居して飲べきものは濁酒、とても浮世に住む身ではなし」

地ハッ恐れ入りました、一休何れ年が明け、來春にならば、竹次郎の所へも又其方の許へも行く、それまで待つて居れ、地左様でございますか、禪師様お出で下し置かれますれば、有難う存じます、左様なら年明けて何日頃……一休命があれば元日に

も参る、其の時は馳走して呉れ、地ハイヤ長まりました、如何様な物が御意に叶ひまするか、一休イヤ拙僧は變な性質で、他人の喰はぬ物が好きぢやナ、地左様でございますか、左様なれば他人の喰らぬ様な物で、禪師様のお好みなさる様な物を考へて置きます、一休左様して呉れ〜」

牡丹花肖柏はモッ濁酒でヤリ損なつて居りますから、何うか一つ仇討をして遣らうと思つて、背エ、地獄太夫は大分歌道に堪能だそうな、是れなり別れ

るも何んどやら……何うぞ此の紙へなんぞ書いて貰ひたい、地左様でございますか、承知いたしました、まだ御近にもなりませぬが……一休ア、夫れはナ、牡丹花肖柏と云ふ面白い坊主ぢや、地ア、左様でいらつしやいますか、貴方が牡丹花肖柏先生で……背ウム……然うだ、私しが肖柏だ、地何卒以後は宜しう願ひます、と肖柏が差し出したる紙へ、サラ〜と認めて其の前へ出した、肖柏は夫れを取りあげて見ると、

「傾城は弘誓の船の渡し守、しに來る客を乗せざるはなし」

と筆跡も見事に書いてあります、一休至極面白い、背イヤ、ナカ

御遊びにお出でを願ひます、一休ウム夫れまでには拙僧も考へて往くよ、然らば氣を附けて往けッ、地ハイヤ有難うございます、其の儘地獄太夫は乳守の遊廓へ立ち歸りました、間もなく其の年も過ぎ、一夜明ければ新玉の、年立ちかへる賑ひは、翠の

音色や笛鼓、唯やす太鼓や手鞠歌、一イニウ三イの羽子の數、千も二千も三千も治まる御代の芽出たけれ、正月の元日二日三日目と相なりますると、一休「肖柏、一ツ年始に出掛けやうかな、肖宜しうございませう、参りませう、一休「ウム行かう然し肖柏竹を一本切つて呉れ、肖「ハイ承知いたしました、一休「太いのはなにか、篠竹で宜しい、肖「何にをなさる、一休「何んでも宜いから持つて来なさい、と禪師は豫て浴中を持ち廻はつた獨體、其れを平常床間へ据へてお置き遊ばされたが、夫れを竹の先きへ附けて一休「サア、往かう、之れを眺めた肖柏は驚いた、肖「へエ……是れを持つて往らつしやるのですか、一休「ウム是れは年玉だ、肖「へエ……然うですか、と牡丹花肖柏お供をいたす、禪師は草鞋を穿き、鼠の綿服に麻の法衣、裝飾には一切お構ひなさらず、後から肖柏が尾いて、愈々モウ堺の町へ出ると、ゾロゾロと見物人が見に来る、一休禪師は、小西屋利兵衛の門口に来て、一休

オイ家に居るかい、と聲掛けられた、家内の者は一休禪師でございませうから、驚ろいた、甲「オイ、お前出て往け、乙「出て往け、何んだあれ、獨體ぢやないか、困つたな、と丁稚共は口々に呟いて居ります、小西屋利兵衛は其處へ立ち出で、利「コレは何うも禪師様、昨年中は種々有難うございました、何んとも御禮の申し様もございませぬ、疾ふから出なければならぬのですか……、一休「イヤ、去年の事を云ふと大きに昔しに返つた様でいかぬ、今年になつたら今年らしい事を云ひなさい、利「へエ……、一休「時に竹次郎は居るかな、利「へエ、まだ一ト間の内で學問をして居ります、一休「ア、左様か、呼んではいかぬぞ、呼ぶと出て来る、すると身軀を動かすによつていかぬ、其の儘にして置きなさい、そのうすれば最う一ヶ月も経つたら大抵は全快するであらう、拙僧はこれから乳守の廊内へ参る、利「左様でもございませうが、一

寸……一休「イヤ上らぬ、上るとツイ長くなるから……是れはお年玉の印だ、是れを置いて往くとお前の家で困るであらう。利御へイ全く困ります一休「たゞ是れで家内中の頭を撫て遣れ。利御元談を仰しやつちや不可ません、其様なもので皆の頭を撫てられては、大變でございます」此の事を聞いて家内の者は「オ、イ一休禪師は氣が違つた、竹次郎の病氣を癒して、自分が氣が狂へば世話はない」と驚いて居る、其のうちに禪師は「一休是れで目出度い」と家中獨體を振り廻はして歩きながら、外へと飛び出した、宵柏は後から尾いて往く、固より禪師の徳を慕つて居ります、牡丹花宵柏、別に驚きはしないけれども、是れより何處へ行くのだらうと思つたから、宵禪師此れから何處へお出でになりまするか、一休「ウム是れから乳守の遊廊へ参り、地獄太夫に面會するのぢや、宵へエ……其んなものをお持ちなすつては……一休「其れでは此様なものを持つては、乳守の遊廊へ行か

れんど申すのか、宵「イヤ然うではございませんけれども一休「ナニ介意んくッ」と仰せられて其の儘乳守の廊をさしてお出でになる、すると跡より大勢の足物人が、ゾロゾロ尾いて来る、一休禪師は竹の先に獨體を結び附けたのを振り廻しながら、ドン／＼廊内へお還入りになる、宵柏は詮方なく後ろより尾いて参りますと言ふ、サアこれからいよ、一休禪師、乳守の鍵屋長兵衛方に乗り込み、其の頃の全盛地獄太夫と問答に及ぶ一條、开は次席のお娯樂といたします……。

第四席

總て何國の遊廊でも白晝は静なもので、されば「晴の夜に吉原ばかり月夜かな」と言ふ狂句がございます、江戸の吉原、大阪の新町、京都の島原、これを三都の三廓と申します、方今でこそ堺の乳守は衰微いたして居りますが、其の頃は却々立派な

廊でございまして、倍でも一休禪師は竹の先きへ鬨を付けて粗末な服装をして一休目出度いな〜と云ひながら廊内へ這入つてお出でになる、するとゾロ〜見物人が尾いて来る、西側には揚屋又はお茶屋が並んで居ります、衝き當りが第一等鍵屋長兵衛の家、玄關構への大層立派なもので、門口には松飾りをいたしてございませう、鍵屋長兵衛は若い者の知らせによつて其處へ出て来て見ると、禪師は竹の先きへ鬨を付けて、「悪氣なき此の鬨穴賢、これより他に目出度きはなし」と仰せられて長兵衛の頭の上に鬨を載せた長エ、ツ何うぞ禪師様御勘辨を願ひます、今日は正月三日でございませう、漸々年越が済みましたばかりで、私しも一つの年を拾ひまして喜んで居ります、ところが何うも此の鬨を頭の上へ載るては……一休「アハ、ハ、ハ、年を越したばかりだから、此の目出度い物を載せて遣るのちや、長目出度いものだと仰在いますが、何うぞ一

つ其れだけは御勘辨を……一休「ハ、ハ、ハ、年越しは冥途の旅の間屋場か、月日の飛脚足をどゞめず」長「へ、恐れ入りました、誠に有難う存じます、併し何うか其の鬨だけは御勘辨を願ひ度う存じます、一休「何故ぢや、長「へ、エ……此の通り門松を飾つて祝つて居りますので……一休「アム……門松を飾つて祝つて居るからと申すのか、」長「門松は冥途の旅の一里塚、目出度もあり目出度くもなし」長「へ、エ……」と長兵衛も呆れ返つて仕舞つた、然うでございませう、最も縁喜を祝ふ所でございませう、正月三日だと思ふ處へ、鬨を持込まれたのですから、家内の中のものも驚き呆れて居ります、其のうち禿の報知に由つて、地獄太夫は我が部屋より夫れへ出て参りました、玄關へ両手を突き、禪師のお姿を見上げ「我が宿の梅の立つ枝や見わたらん、思の外に君が見ませる」

地獄太夫

や、何うぞお勝手になされませ、禪師には何うも……」其處
 で地獄太夫は禪師を我が部屋へ御案内申し上げる、後に續いて
 據なく宵柏も其席へ参りますと、太夫は恭々しく御體を床の
 上に飾り付けける、地獄太夫が骸骨を床の間に飾り附けたのを見
 て、鍵屋の若衆が蒼皇て、二階から飛び下り、若旦那さま
 長「なんだ、長「なんだ、其んな事をしては困るな、太夫まで氣が狂
 いました、長「なんだ、其んな事をしては困るな、太夫まで氣が狂
 ふたと見えな、なご云つて居る、二階では禪師が「休、今日
 は目出度いによつて、屠蘇を持つて來い、士葬を持つて來い」
 言ふ事が皆異つて居る、宵時に太夫、今日禪師が此家へ成らせ
 られると云ふのは、何んと忝じけな事ではないか、地獄太夫
 ございます、能ふこそお尋ね下し置かれました、宵「其處で太夫
 妙な事を尋ねるが、主人長兵衛は此の獨體を大變に忌嫌つて、縁
 喜が悪い、縁が悪いと申しした、然るに其の許は結構なお品を有難

地獄太夫

とお迎への歌を詠んだ、禪師は感心をなされ、一休「オ、地獄太夫
 か、今日は土産に獨體を持つて参つた、地獄太夫「是れは有難きお品を
 御持参下さりませ、其の上は獨體を乗せ、さも有難きお品を
 舞扇を取り寄せ、其の上は獨體を乗せ、さも有難きお品を
 戴き、地獄太夫「お好みの御肴を拵らへて御待ち申して居りました、一休
 ア「左様か、夫れは何によりである、然らば直ぐに其處へ通ら
 うか、地獄太夫「直ぐに直ぐさま、お通り下されませ、様「休、然らば宵
 柏、直ぐに通らう、宵「アッモシ、禪師、正月の三日から斯か
 る不浄なる場所へ……一休「何を云ふ宵柏、お前は兎角そんな
 事を云ふから、太夫に遣られるのぢや、不浄の場所と云ふのが
 あるか、世の中に不浄の場所はない、己れの心一つだ、如何な
 る清浄なる場所も心穢なければ、是れが不浄な場所ぢや、口に
 は諸々の不浄と云ふも、心さへ不浄でなければ、其れでよい、拙
 僧は斯う云ふ所が好きぢや、第一女の側に居るのは何によりぢ

地獄太夫

いと云ふて扇で受けた、サア其の扇で受けると云ふ心意は如何
 ちや地「左様でございませうか、牡丹花様、貴下も當時有名な歌
 詠みでありながら、其れを御存じございませんか、先づ扇程目
 出度いものはないとしてあります、扇は之れを五明と申します
 五明とは五ッ明かなり、此の扇と申しますものは仁義禮智信
 を備へて居るもの、肖「ナニ扇が仁義禮智信を備へ居るとは……
 地「左様備へて居ります、肖「夫れは面白い、婦人の身として苦
 だ高慢なことを云ふ……サア、夫れを尋ねる」是れは小菜庵
 に太夫が参つた時に、濁酒の一首で肖「柏が一本凹まされたに
 つて、其の返報をする量見、スルと太夫は平氣なもので、地「申
 し上げませう、肖「オ、云ふて見よ、地「風を出して暑氣を冷却す
 るは是れ仁、開いたり閉ぢたり親骨子骨の揃ひまするは、親子
 互ひに相持ち合ふゆゑ、是れ義なり、挨拶などに用ゆる時は是
 れ禮なり、空中に風を寄するは是れ智、要を以つて保たしむる

地獄太夫

は是れ信なり、即ち五明を守つて居ります品と申しましたも
 差支へはございませう、肖「柏様、肖「ハ、ハ、ハ、熱いたナ、一休
 イヤ復た肖「柏違られたな、お前は物を云ひなさるな、何うも此
 の太夫には逆ても敵はない、時に太夫お前は歌人だ、歌道にか
 けたら優れて居るが、まだ、禪家悟道の點に至つては熱くさ
 ぬ所ろがある、太夫只今聞けば扇に仁義禮智信が保つと云ふが
 此の一體の眼から見る時は、是れは五戒を破るものぢやナ、地「
 左様でございませうか、破戒すると仰せられますのは何う云
 ふ事でございませうか、皆扇は五明と申し又末廣扇面と申して、
 みなお目出度いものとしてございませうか……一休「オ、然うか
 知らざれば云ふて聴かせる、第一竹を伐るが殺生戒、空中の風
 を盗むは偷盗戒、繪空事などの書いてあるは妄語戒、酒でも飲
 んで居る時に舞なごに用ゆるは飲酒戒、要に比翼の容を離れぬ
 から邪淫戒ではあるまいか」是れを聞いて地獄太夫は頭を下げ

地「へエ恐れ入りましてございます、只今禪師様のお説しによつて、漸々其の道を悟りました」巧く理屈の附くものでござい
ます、兎角して居る處へ健屋長兵衛、衣服を改ため袴を着け、
其處へ出て参り、長「エ、さて禪師様、今日は能ふこそ御入來下
し置かれしました、先刻はまた不淨の物だ、汚ない物だなど、申
して失禮をいたしました、何卒今日御悠然と御遊び下し置かれ
まする様……」と是れから屠蘇が出て御祝ひ申しあげる、續い
て精進料理とお酒が出ました、一休禪師は之れを眺めて「一休
れ、若い者、魚類をドン、持つて來い、斯様な精進物は何
うも人間の肺の肥料にはならん様ぢや、若「是れはしたり、御禪
師様には御魚類を……」一休「食ふとも、兎角世間の腥坊主は
魚肉を食はぬと云ふが、拙僧は平氣ぢや、持つて來い、」昔
の者も驚き入りました、夫れから魚類を持つて参りますると、
夫れを召し上る、尤とも斯くまで悟つてお仕舞ひなされば平

氣なもの、心さへ清淨にして居れば何んでもない、只今では坊
さん、が牛屋へでも上つて、茹魚同様、眞ッ赤な顔をなされて
お陽氣にコリア、なんかと遣つて居られる方も見受けます、
往古は宗門によつては随分八釜しうございます、只今でも然う
一樣には申されませんが……往古はお寺方で魚類を賞翫なされ
様とするには、皆符牒を以つていたしたもので、お仲間と云つ
ては章魚を食ふ、是れは頭が圓いからでございませう、伏鱈
云つては鮑を食ひ、折釘と云つては蝦姑を食ひ、拳骨と云ふて
は螺鰍を食ふ、鯉節のことを巻紙と云ふ、是れは一寸解りかね
まするが、カイて出すと云ふ洒落で、書けば書く程減る所から
巻紙または半切れとも云ひますそうで、此の外に未だ數多ござ
いまするが、近頃は平氣の平左で、魚類どころではない、牛肉
馬肉は申すに及ばず、或る時は猫妓を食ひ、鼠などを殺して食
ふ、四足で食はないものは炬燵櫓ばかり、何故かと申しまする

ど、齒にアタルから……是れでは落語になります、これは寺方の符牒のお話してございます、一休禪師は地獄太夫を相手に御酒を召し上ります、其の中にモウ日が暮れて仕舞つた一休チアア、今日はモウ太甚ふ酔ふたから、チアア寝やう、太夫を敵娼に寝やうかな、若これにはしたり禪師様……一休イヤ、拙僧は遊女を買ふ積りで来たのぢや、皆の者決して心配するな、然し禪師がまさか遊女と同衾は遊ばしませんか、心懸みと云ふので此の遊廓にお出でなされたのでございます、扱て明けますると四日、此の地獄太夫は、一年に僅か五人か六人しか御客を取らぬと云ふ、何うも珍らしい太夫もあつたものでございます、借ても牡丹花宵柏は、地獄太夫に向ひ、宵時に太夫、今日は一つお前と問答を遣らう、地ハイ何になりと御問ひを願ひます、宵「其れでは禪師、其席に在つて何卒御行司を願ひます、一休ハア問答の行司かな、ヨシ」其れは興味があらう、遣れ

此の時宵柏は、宵「禪師、禪師の時より嘘を吐くは什麼」禪師側で聞いてお在になりました、一休「宵柏妙な問答ぢやナ」太夫は此の時「禪師よりうその二葉の香ばしき、遊里の慣ひの稼業にこそ」と答へました、此の歌の意味は、遊里に居れば嘘を吐くのも營業上で仕方がない、幼稚い時から遊廓の事物を見習ひ、例へば醜男が来て、あなたは大層美しくいお方で在つしやるのか、虚言を吐くのも商賈の道で據ろないと云ふ意味だそうでござい、ます、宵柏は宵「ほも、宵「禪師、多くの客の身上を耗らせ、果ては生命をも落さすは什麼」すると太夫は、

「懸すればなにか賣の借しからん
果てはいのちもおしまざりけり」

と答へた、モウ惚れた以上は家も蔵も果ては生命までも差し出して仕舞うので、是れは情状に搦んで仕舞ないと云ふ辯解、牡丹花宵柏先生は少し真ッ赤になり出して、宵「然らば禪師、多くの

客を振り留まするは何に「太夫は
 「定まらぬ人の心のむら雨は、空さへ晴ればなにかふるべき」
 此の歌の意味は、詰まり客が来て生意氣な事を云ふから遊女が
 嫌ふのです、素願くさへして居れば、營業上お客様ですから不
 取扱にしたり、振るの嫌ふのと云ふ事はないと云ふ答へ、宵柏
 は尚ほも續いて「宵請書紙に偽言を書くは何に……」
 「心には果てしあらじと思へども、人目の関はいかに通はむ」
 と答へました、イヤ最う幾ら問ひましても、水の流るゝが如く
 スラ／＼と答へるので仕方がないから今度は「宵然らば禪師や
 吾等の如き老人も、坊主も出家の輩もツイ浮々と遊びに来たう
 なるは之れ何に……」太夫はニッコリと笑みを含み「是は
 したり宵柏様、斯うでございませうか
 「夜なかなりみりの道はながく、思ひしるへや花の色里」
 此の遊廓にお出でになれば、武家なればお武家のやうに、御出

家は御出家、商人は商人と、士農工商の差別をして御待遇をす
 るから、皆面白ふ可笑く遊べますと云ふ歌の意味、又都々逸
 にも
 「愚の闇路は誰れしも同じ、愚者も學者も踏み迷ふ」
 とありまするが、これはナカ／＼疑つた小唄でございます、さ
 れば古昔から英雄豪傑が色に溺れた例も澤山ございます、唐の
 玄宗皇帝は楊貴妃の色香に迷ひ、安録山楊國忠の爲めに世を取
 られ、遂に馬鬼の原に於いて楊貴妃を斬り、蜀の國へ往つて食
 客をしたと云ふこともあります、日本では平清盛の常盤御前に
 於ける、新田義貞が勾當の内侍に、其の他婦人の爲めに國家を
 亡ぼし、家を潰した實例は枚擧するに邊がございませぬ、宵柏
 も幾ら問ひを仕かけても、地獄太夫の爲めにはサン／＼に云ひ
 捲くられて仕舞つた、一休禪師は側から「休最う止せ」に云ひ
 やつても宵柏は逆も勝てないから、夫れよりも酒にしる／＼、

地獄太夫

ナア是れから最う少し華美に飲んで如何ぢや、女共を呼べ
 と是れより皆々呼び寄せ、三味線を弾かして酒を飲み始めた、
 暫しすると禪師は少く酔が廻はつて立ち上り、扇を持つて踊り
 始めました、これぞ眼無し踊と申します、一休釋迦殿が眼無し殿
 になられて、天地萬法を進めらる、皆悉く眼無しなりと説きた
 まふ、草木さへも佛になれば、釋迦殿も彌陀殿も、皆佛ぢやと
 謂うたも道理、嘘つきよ眼無しを人々に知らさん爲めの
 彼れ此れに、義理ばかりにして一言も、眼無し殿に云ひ當てず、
 大嘘よ赤嘘よ、嘘を吐かねば佛にせまい、そりや又何故に、方
 便嘘は皆嘘、嘘せや飲めや一寸先きは暗の世、歌ふも舞うも法
 の聲、水の面に眼無しをうつせば、來世も過去もあればこそ、
 三世不可得人心、起らぬ先きが極樂で、起す心が現世なり、サ
 ラリとないが過去と云ふ、橋はなうても天へは昇る、愚鈍な經
 は頼みやせぬ、善さも悪しきも答むれば、皆悪口こそなるべけ

地獄太夫

れ、徒者が世に出で、多くの人を迷はせる、心とは如何なる
 ものを云ふやらん、サラ／＼サツと一筆に、書いたは何んぞ松
 風の音、ニツないもの一ツなし、墨繪の風のさつても涼しきに
 器からう不動殿、悪魔降伏置きたまへ、必らずしやうと思ふな
 よ、氣差す所が悪魔なり、紀念の五輪茶臼せい、誰らかされな
 悟られよ、悟れよ悟れ何れの事の悟りぞや、悟らぬ先きが悟り
 なり」と歌ひながら禪師は踊つて居られ、女共も同じやうに
 踊つて居ります、此の圖が往古の醉善提と云ふ本に出て居ます
 が、禪師が踊つて居られますのは坊様の姿が寫つて、他の女
 共は骸骨に寫つて居ます畫が描いてございます、所謂畫空言
 で、禪師の身体は自由の身体、娼妓は身賣と云ふて身を賣り
 ますから、身を賣りました奴は骨ばかりと云ふ意味で書いたも
 のでございませう、やがて地獄太夫は禪師に向はれまして、地
 禪師様、一つのお願ひがございます、一休何んぢや、其の願ひと

地獄太夫

云ふのは……地獄の事でもございませぬが、妾の桂衣の裏は白地の絹でございませぬが、何卒之れに御筆を給はりたく存じます。一休、オ、左様か、ヨシ、書いて遣らう。地獄の御承知、有難うございませぬ。其處で太夫は若衆に桂衣を此處へ持つて来るやうに命じた、サア諸君、これから一休禪師が地獄へ持つて来衣に、如何なる事をお書きに相成りまするか、そは次席のお楽しみといたします。

第五席

凡そ遊女の桂衣は價千金と申しまして、總て昔しは價値の知れないものを千金と申しましたもので……地獄太夫は此の事を主人長兵衛に話しをいたしました、主人長兵衛も長夫れは丁度幸ひだから、禪師様にか一つ書いて戴いたが宜からうと云ふ事になり、何う云ふ事を禪師様がお書き下さるだらうと、樓内

地獄太夫

の者が大勢夫れへ参つて拜見をして居る、ところへ若者が四五人で其所へ太夫の桂衣を持参いたしました、一枚の桂衣を四五人とは異様に思はれますが、座敷の真ん中へ廣げたのを見る、イヤ何うも宏大なものでございませぬ、長、是れは金糸銀糸の鏡、鏡でございませぬ、背中に闇魔大王、牛頭馬頭の鬼から淨瑠璃の鏡、血の池、針の山等も残らず其の一枚の桂衣の中に縫せてございませぬ、闇魔大王の眼は玉眼と見へまして光つて居ります、一休、ア、是れは太夫の好みなかな、地獄様でございませぬ、斯う云ふ賤業をいたして居りますから、何うせ來世は地獄へ往く事と思ひまして、此の通り支度をいたしました、一休、ア、成る程、是れを拙僧に書いて呉れと云ふのか、地獄様でございませぬ、此の裏が此の通り白綾子でございませぬ、是れへ何うか禪師様へ何にかお筆を願ひ度う存じます、一休、ヨシ、と宵柏が墨を磨つて居ると、纏て禪師は筆を取り上げ、桂衣の裏を返して襟か

ら一寸ほど下つた所に、スツと丸い物をお書きなされ、下に横
 棒を二本引いた、鍵屋長兵衛、地獄太夫始め大勢の者も之れを
 見て驚ろきました、何にしる千兩投じて作り上げた袷衣の裏へ
 落書きされては堪るものではない、頓だ悪戯をなさると思つて居
 ります、○「何んですあれは、△「ア何んでせう、○「左様サ、丸
 い物に棒が二本、禪師様がお書きなされたのだから、まさか落
 書きでもあるまい、△「して見ると月に霞でも……鍋蓋でもなし
 左様さな……私しの考へちや吃度ナシだナ、鍋の蓋を六尺棒二
 本で押へたかナ、○「そんなものを書く奴があるものか」と種々
 評をして居ると、一休禪師は「一休何うちや長兵衛、之れで宜い
 かな、長へエー一寸伺ひますが、それは一体何んでございます
 一休「是れが解らぬか、長へイ、一休「是れは角盟の形ちぢや、長へ
 エ……此れは何んの事でございます、一休「是れは女子の悟道の誠
 め、悟道の繪ぢや、長へエ……」此の角盟と云ふのは、彼の誠

兼など附けますときに用ひます、誠道具でございます、耳盟の
 兩方に角が出て居りますもの、此の頃は餘り見掛けませぬ、地
 獄太夫は固より禪家悟道を心得て居ると申してもよい位の女
 でございますから、袷衣の裏へ角盟が書いて在るのを見て、須
 りに喜悅んで居る様子を見て、一休禪師は再び筆を執つて、其
 の角盟を書いた脇へ
 「一ツづゝ年をへるほどよいこし
 た、經つものは月日なりけり」
 と記された、地獄太夫は大きに喜悅び、地獄に有難き御意見の
 お歌、身に沁みましてございます、長太夫お前には此お歌の意
 味が判つて居るか知らんが、私しには判らぬが、これは何んと
 言ふ事ぢや、地獄ハイ此のよわいこととは壽命の事、年をとつて
 壽命が短くなる、只だ立つものは月日なりけりと、光陰は矢の
 如く何日までも遊女などをして居つてはいかぬ、女は一代に夫

地獄太夫

を一人持たねばならぬもの、三十歳を越さぬうちに早やく遊女
を罷めて正業に就けと云ふ、御意見のお歌でございませう、長
む……左様か、イヤ何うも恐れ入りましてございませう、と感
心して居るとお側に居た牡丹花宵柏に於いても、禪師の當意即
妙、人を説す事が何うして斯う御上手であらうかと思ひます位
い、健屋長兵衛も、長誠にも何うも有難う存じます、手前も全體
此の稼業をいたして居ります、固より斯う云ふ稼業は一日
も早く止めたたいと思ひます、禪師様の御言葉に従ひ手前も只今
から心を清めます、誠に有難う存じます、地獄太夫も涙を流し
喜んで居りましたが、一休禪師に向ひ「地獄太夫も涙を流し
も貴僧の様な尋といお方から、未だ地獄の話しを聞いた事がご
ざりませんが、何うぞお聞かせ下さいませう、一休アハツハ、
地獄が地獄の話しを尋ねるとは……ヨシ、知らねば話して聞
かそう、地獄は八大地獄、夫れに各々十六地獄があつて、一百

地獄太夫

三十六地獄となる、既に汝の室にも、火車と云ふものがある、
是れ炎熱の苦しみ、又妓夫と云へば牛、即ち畜生道、晝寝て夜
寝ぬを暗黒の苦しみ、呵責の責、飽きて飲み飢れて食はざるは
則ち餓鬼道、冥途の鳥杜鵑の血を吐く、紅粉の唇は人を殺すに
似たり、劍の山の指切りに、消ゆるも知らぬ雪の肌、其の腕は
千人の枕、昨夜の夢の移り香を、嗅ぐ鼻あれば眼無しの席に見
る眼あり、戀の重荷をかけて度る權衡もあり、形を扮装る姿見
は、淨瑠璃の鏡呪ひの胸の火鉢には、銅壺の水も沸返り、月の
さはりの血の池あり、小刀針の劍の山、衣桁は則ち三途の柳、
負目を催促る衣脱婆あり、午王の鳥は鐵の嘴を鳴して色を合む
る眼を啄む、鬚の蛇は火焰を吐いて、炎熱深き膽を喰ひ、偽り
を積む死手の山、絶へぬ流れの三途川、更らに浮む瀬あるべか
らす、地有難うございませう、シテ禪師、極樂は十萬億土西方に
ある由承はりましたが、確かな事でございませう、一休イヤ、

地獄太夫

極樂は釋迦も知らず、達磨も知らず、女郎は五尺の体を賣つて、一切衆生が煩惱を安んず、法を説いて衆生を迷はす賊僧よりは遙かに勝れり

「池水に夜々月影は映れども、水も濁らす月も曇らす」

地獄太夫、アレは未だ一体には分らない地獄はしたる禪師様

彼歌は貴僧の詠歌、正月には教へて遣るとの仰せ……

一休心が迷ふてな、然し太夫は何故此の世に生れて来た地獄

エ……一休解つたか、何故此の世に生れて来た地獄

女もナカク、衆いものぢや、婦女ながらも學問も出来、歌や俳句と云ひ、又筆跡の見事なるに感心した、其方にはまだ是れで

も解らぬか、地獄太夫、一休イヤナ何故此の世に生れて来た地獄

地獄太夫

度まで仰せられた、此の時地獄太夫はボンと小膝を打つて

悉皆了解しました、一休了解つたらうな侍座に居た宵柏にさへ

解らぬ位いだから、鍵屋長兵衛を始め末社間も側に伺つて居

たが、少しも解りません、地獄太夫だけが成る程と云つてボン

と膝を叩いた、是れが即ち道歌の極意の極意たる所以でござい

ませう、一休禪師の一言に地獄太夫が感服をいたしたと云ふは

抑も何う云ふ點に味がありませんか、此の解釋はナカク

しうございます、概略申し上げますと、此の解釋はナカク

でたるために此の苦しみを云ふのも、小西屋利兵衛の竹次郎が

地獄太夫に迷ふて發狂したと云ふのも、太夫が竹次郎を呼び

又は數多の客に接して機嫌を取ると云ふのも、皆此の世に生れ

出でたればこそ斯くまで苦勞するもので、又人間は生れば死ぬ

死ねば又生れると云ふ理合、其處で竹次郎が太夫に迷ふて發狂

をししました、それを癒すと云ふに極く好いお歌で、此の位い

つた歌はありませぬ、彼の日蓮上人の歌に
「長閑なる石にいはれはなきものを、風の姿や浪と見るらむ」
と是れは名高きお歌でございますが、是れ等も矢張り道歌の一
つであります、其處で禪師が只だ竹次郎の心意を本元に還して
遣らう、眞實の心にして遣らう、無明の醉を醒して遣らうと云
ふが爲めに、此の扇をお渡しになりました、其れ故何故此の世
に生れたと仰しやります、他の者には何にが什麼だか一向に解
りませぬが、心の高い人には高い所で教わるもの、之れにお問
ひなされたのが、一休大禪師、膝を叩いて成る程と感心したの
が地獄太夫唯一人、俗人には頓と解りません、其處で鍵屋長兵
衛は「長如何にも禪師様の仰せ、我れ共無學の者には解り
ませぬが、太夫一人で喜んで居りますから此の上もなきこと
でございます、就いては禪師様へ私しより更めて御願ひがござ
います、一休ハ、ア何に事ぢやナ、長外の事でもございませぬが

昨年此の樓が出来上りまして誰方にか棟札をと存じて居りまし
たが、今以つて掲げずにごさいます、何うか一つ禪師様の御筆
を願ひたいもので……一休ヨシ、書いて遣らう、此の鍵屋長
兵衛と云ふ者は當年六十五歳になります、此の者は元と一文無
しから稼ぎ出し敵き上げ、斯くまで立派な身代にいたしましたもの
で……此の樓の普請は三年前に取かよつて、漸く去る月の八月
出来いたし、乳守遊廓中第一の建物でございます、昔日は農商
の家に在つては、自分が一つの家を建てますと皆棟札と云ふ
ものを建てました、只今では商人の商標或ひは標燈など申し
まして、軒へ釣しますが、棟札には色々の故事來歴の在つたも
のでございませぬ、されば鞍府の時分並山御代官にして江州太
左衛門と云ふお方の棟札は、日蓮上人がお書きなされたと云ふ
ので、今の世までも残つてございませぬ、大抵斯う云ふものは明
僧智識に書いて戴きまするのが習慣、長兵衛は一休禪師様が御

地獄太夫

承引下されたによつて、大いに喜びまして、棟札を取り出し
 したが、サア親族や其の他遊廓中の者が大層集まつて 甲大變
 な事だ、此度健屋さんの家の棟札は一休様がお書きなさるそう
 な、一つ拜見に出かけ様 乙然うですか、夫れでは私しも拜見
 と云つた様な譯で、私しも小哥も大勢集まつて参りました、
 廣い座敷に櫻の如輪李、縦が六尺、幅が三尺五寸もあらうと云
 ふ大札、側では牡丹花宵柏先生が精を出して墨を磨つて居りま
 す一休時に長兵衛、一休棟札へは何う云ふことを書くのぢやな
 長私しは一代にして、斯れだけの身代にいたしましたが、爾
 來此の健屋の家が繁昌いたし、子々孫々の代まで永續いたしま
 する様な、極くお目出度いことを一つ願ひたいもので……一休
 ハ、ア左様か、ヨシ、夫れでは何にか目出度い事を……お前
 には子はあるかな 長ハイございませす、此の席に居りますのが
 是れが私しの惣領で……一休孫はあるかな 長左様でございま

地獄太夫

す、當年五歳に相なります一休ヨシ、と云ひながら、筆の
 先きを真直にいたし、一つ腹へウンと力を入れて、上が四行、
 下は一行に達筆にお書きなすつた 一休長兵衛是れで宜からう、
 長「ハイ何うかお読みなすつて……一休ウム是れはな、斯う讀
 むのぢや、親死んで子死んで、孫死んで玄孫死ぬ、此の家より
 葬式千口出ると云ふのぢや」長兵衛は之れを聞いて呆れ返つて
 仕舞ひました 長「飛んでもない縁喜の悪い事をお書きなされて
 ……一休何にが縁喜が悪いのぢや、目出度いではないか、親死
 んで子死んで……長何にが親死んで子死んでなんではな、親死
 出度い事がありますか 一休「マア、聽け、其の方も段々高年に
 及べば何うしても死ぬるであらう 長「ヘエ一休息子が死んで、
 孫が死んで、玄孫が死ぬのは順だ、形あるものは滅し、生ある
 者は死す、花も咲く時はあれば散る時もあり、天に風雨の憂ひあ
 れば地に水火の患害あり、世の中は何んでも順でなければなら

ぬ、物を数へるにも一から十まで讀むは順、十から一へ讀み返すは逆だから六ヶ敷い、逆さま事が一番縁喜が悪い、其の方が生きて居つて可愛い孫が死んでも、悲嘆をかくるは是れが逆と云ふもの、惣領の息子が死んで其の方が後に残つても詰まるまい、長へニ……一休「されば子として親を葬り、孫として祖父を葬ふのは順ぢや、生まるゝ先は最う死ぬるより外はない、皆死ぬと云ふ愛いを目前に控へて居る、死ぬと書いて置けば、直ぐに生まれると云ふ事が出て来る、よつて親死んで子死んで、孫死んで玄孫死ぬ、是れは物の順を書いたのぢや、長へニ……成る程一休「解つたか、長其れは解りましたが、此の家より葬式千口出るとは、何んでございます一休「然れば其の方は一文無しから叩き上げた此の身代、悴が放蕩をするか、或ひは賭博でもして鍵屋の家を買つて仕舞うたら何うする、然うすりア鍵屋は一代ちや、夫れに引き變へ、悴も辛抱人なれば孫も辛抱人、玄孫

曾孫と辛抱人が續けば此の鍵屋の家は繁昌する、千年萬年十萬年と永續すれば、遊女も澤山抱へる様になり、従つて家來管族奉公人も澤山使はねばなるまい、然うなれば此の家から葬つてやる者が千口でも出るではないか、是れはながく葬むると云ふ極く目出度いことぢや、何んと長兵衛、合點が參つたかな、長成る程、如何にも能く解りました、總て一休禪師のお歌を一寸聞くに、門松は冥途の旅の一里塚、だの何んのと縁喜の悪いことの様、聞へます、御説明を伺つて見ますと、極く目出度い事になります、是れが名高き一休禪師の棟札と申しまして、寛永の年間まで、此の長兵衛の子孫が荒物屋をいたして居りました時、まで残つて在りましたが、寛永の大火の節、此の棟札も透いた、焼失せました、さうでございます、借て一休禪師は丁度斯様なことをいたして、五日間程流連をなさいました、今日はいよいよお歸庵になると云ふので、鍵屋長兵衛、地獄太夫始め多くの

人々も大いに禪師を欵待いたします。一休禪師は地獄太夫に
向はれまして一休太夫、極樂も地獄も知らぬ思ひ出に、生まれ
ぬ先の人となれかし、達磨は九年以下になる、汝苦界十年の花
衣、是れは揚代ぢや、其方に遣はす』と拂子をお渡しになりま
した。地ハイ有難く頂戴仕ります』と地獄太夫は非常に喜んで
居ります。すると最う其日も暮れ果て、乳守の遊廓兩側に
は軒提灯を點しまして、誠に不夜城と申しまして、其の全盛は
比なき賑ひでございませう、一休禪師は少し御酒を飲み過ぎて御
寝みになつて居られます。やがての事に表の方に當つてワア
干に出で見ますと、俠客の大喧嘩、俗に之れを稍當と申しま
す。何にしろ一人は其の當時賣出しの彼の浪華の俠客野晒悟助
が、鬼と呼ばれた難波の鬼右衛門を相手にいたし、白刃を振つ
ての大立廻はり、血の雨を降らさうと云ふ一條、如何に相なり

まするか、例によつて、次席に於いて委細辯じあげる事にいた
します。

第六席

時は正月八日の晩、乳守遊廓の真ん中に於いて、俠客同志の大
喧嘩、一人は前席に述べましたる如く、浪華で賣出しの俠客、
尤も此の悟助のお話しに就いては名高き草双紙の作者、山菜
庵京傳と云ふ人の作で、本朝醉菩提と云ふ表題の双紙、之れに
地獄太夫と悟助の傳を面白く記してございませう、強きを挫き弱
きを助け、真に男の中の男一疋、商賣は早桶葬具の類を商ひま
するが、禪家悟道に凝つて悟助と名乗つたものと見へ、常に紫
地へ白く卒塔婆石塔、又は骨即ち野晒しを染め出した衣類
を着し、乳守の遊廓に出入りをいたして居りましたが、何にし
ろ男前はよし、年は若い何うも染いものだと大層廓内の人々

が尊敬いたし、悟助の評判が益々高く餘り宜しいものですから
 之れを羨み嫉妬しましたのが難波の鬼右衛門と云ふ、最早六十歳
 を越へて居りまする豪者の者、此の鬼右衛門は悟助とは反對で、
 此の遊廓は乃公の繩張り内だと申して、金銭が無くなる遊女
 屋から貪り取り、或ひは内密の事でもあると、其れを聞き出し
 て強迫ると云ふ様な譯、眞の俠客と云ふ舉動は少しもございま
 せぬ、ですから廓内の者も毛虫の様に嫌つて居ります、すると
 鬼右衛門は悟助の爲めに、此の繩張りを取られたと云ふので、
 口惜しくて堪ら無い、悟助の様な青二才に幅を利せられては、
 此の鬼右衛門の男がたふない、今夜も多分悟助が退入つて来る
 から打殺して仕舞へど云ふので、乾兒其の他惡漢五六百人程を
 集めまして、竹槍棍棒各自に獲物を携さへて待ち伏せをして居
 る、神ならぬ身のそんな事とは露知らざる野晒悟助、日が暮れ
 ますると相も變らさず、派手な衣類を着し、高き駒下駄を穿いて

道入つて参り、今しも健屋の前まで来ると、横町からソッソ
 出て来た鬼右衛門、鬼悟助待てッ、オイ悟助一寸待つて呉んね
 エ」と云はれて悟助は振り返り、悟オ、誰れかと思つたら鬼右
 衛門の老爺か、して乃公を呼んだのは何にか用でもあるのか、
 鬼オ、サ、用があればこそ待てと云つたのだ、悟然うして其
 の用と云ふのは……鬼オ、其の用と云ふのは外でもねエ、此
 の乳守の遊廓と云ふのは乃公の繩張り、其れを手前エに取られ
 たと云つちやア、チツと此の鬼右衛門の顔が立たねエ、全体手
 前エは未だ尻の先きに卵の殻がクツ付いて居る鰻魚同然の野郎
 が生意氣にも、近頃は大きな顔をしやアがつて、攝河泉の三國
 に男を賣つた此の鬼右衛門様の對ふを張るのは未だ早やエ、以
 後は野郎のみせしめに、今日手前エの命を貰つて遣るから、
 覺悟さらしやアがれ、悟オ、老爺、何んだか分らねエ、癡言を吐
 かしやアがるが、幾ら乃公の様に安い命でも、オ、然うかと云

つて手前エには道りかねる、乃公は如何にも青二才、だが老爺
 手前エも最ういゝ年をして、早桶へ片足踏み込んで居る老爺老
 爺、成らば手柄に殺せる者なら殺して見らう、鬼何にを小癪な
 事を云やアがる、悟サア問答なんて無益だ、一度にかゝつて來
 やアがれ、と大手を擴げて突立つた、鬼サア省の者出會へ、
 と相圖した、すると彼方の隅から十五人、此方の隅から十七八
 人と、各自に獲物を携さへて四方から、バラ／＼と出て參り
 大勢「ヤア／＼青二才、よくも手前エは親分の繩張地を盗みやア
 がつたな、サア男の意氣地だ、殺らして遣るから覺悟をしらう
 ツ」と一時にドツと悟助を目掛けて切つて掛かつた、野晒悟助
 は怯ともせず、腰なる一刀ズラリと鞘拂ひ、悟サア來い來たれ
 ツ」と身構へた、此時大勢の見物人は見物「ソリヤア喧嘩が始ま
 った、喧嘩だ／＼」と右往左往に立ち騒ぐ、女郎屋は喧嘩
 と聞いてバタ／＼戸を閉める、何しろ野晒悟助は人望のある傑

客だから鬼右衛門の爲めに殺されては氣の毒だ、とは云ふもの
 多勢に無勢、暗がりでは若しや悟助さんに怪我が在つてはなら
 ぬと、恐ろしいものは人情で、鍵屋始め雨側の女郎屋は、一同
 申し合はせた様に、ズラリと二階の欄干へ大燧燭を立て、恰か
 も白晝を救くばかり、悟助は之れに力を得て鬼右衛門始め五六
 十人を相手といたし、鎧を削つて斬り合つて居ります、此の時
 地獄太夫は二階の欄干から悟助の所爲を見て居りましたが、名
 にし負ふ、敵は大勢味方は一人、雨と降り來る亂入群棒を、右
 に左に躰を躲はして斬り合つて居るもの、如何にも着物の袖が
 長くて邪魔になる様子、之れを眺めたる地獄太夫は、何んと思
 つたか禿に吩咐けまして、自分の便帶を取り寄せ、好い頭合に
 結んで悟助の肩へ投げて遣つた、悟助は如何にも袖が邪魔にな
 つて困つて居る所、肩の上にはポーンと何にか落ちて來たものが

あるから、見ると地獄太夫が投げた適宜の禱、手早やく
取つて十字に掛け、悟最う斯うなれば大丈夫だ、サア来い鬼右
衛門、今日は生命を取るか取らるか、二つに一つの晴れの喧
嘩、餘の蛇蛆漢は避いたく、と勇氣日頃に十倍いたし、死を
決して斬り込みます、然し相手はナカ、の大勢、見物人の
一同も皆片唾を飲んで、悟助さんが勝つ様にと心配をして居り
ます、此方一休禪師は酒を少々飲み過ぎてウトウトと寝入つて
居られました、此の騒ぎにフト御眼を醒され、一休「ヨリヤ、
彼の騒ぎは何に事ぢや、女「へイ、今、是れ、斯う云ふ次第でござ
います、と申しあげると、一休「ウム、夫れは何方が負けても氣の
毒な事ぢや、四海皆兄弟ぢや、兄弟同志喧嘩をして生命を取る
の、取らるゝのと云ふ馬鹿な話しはない、拙僧が行つて一つ止
めて遣らう」と二階をお降りあそばしました、健屋長兵衛も飛
殿め遊ばせと申し入れたがお聞き入れがない、

んで参り、長禪師様お危ふございます、若しもお怪我でもあつ
ては……一休「イヤ、すて、置け、と如意を持つて見物人
を左右に押し分け、前へ出やうとなさる、知らない見物人は、
甲「ヤア、乞食坊主が出やアがつた、乙「オイ、乞食坊主と
ころか、アレは一休様だ、一休和尚様だ、一休「退いた、と云
ひながら、今鬼右衛門が竹槍を突き出そうとする、悟助が一刀
を振り廻し打ち下さんとする、其の一刹那、一休「兩人共待つた、待
たぬか」と大喝一聲お叱りになる、鬼坊さん危ない怪我でもす
ると不可ねエから、其處退いた、悟御出家、お留め下さる
のは有難いが、是りア依客の意氣地、何うか遠くへ退いて見て
居て下さい、一休「イヤ、危ない事はない、引け、鬼右衛門
穿くなら拙僧を突け、悟助とやら斬るなら拙僧を斬れ」と仁王
立ちに真ん中に立ち、一休禪師は「負けて退く人を弱しと思ふなよ、心の底の強きゆるなり」

と仰しやつた、是れは忍耐力のお歌で……又或る人が
 「賣る喧嘩買はぬは資本が高いゆへ」
 と洒落た狂句を詠れましたが、負けると云ふのは心が強いから
 負けて置くのだそうで……「休何うちや解つたか」と云ふより
 早やく、鐵の如意を以つて、鬼右衛門の竹槍をボーンと横に拂
 ひ、悟助が振りあげた腕をグイッと押し遣り、「休京都紫野大徳
 寺真珠庵の休ちや、喧嘩は止める、四海皆兄弟ちや、止める
 寺真珠庵の休ちや、喧嘩は止める、四海皆兄弟ちや、止める
 手を支へ、悟へ……恐れ入りました、休大禪師様でござい
 ますか……」鬼右衛門も竹槍を投げすて、頭を下げ、鬼大和尚
 様でございしましたか、知らぬ事とて失禮を申しあげました、休
 ヨシ、喧嘩は止めよ、互ひの身の爲めちや、止めて呉れるか
 悟、ハイ甚だ恐れ入りました、辱めとき御身を以つて我れ、風
 情の喧嘩の御仲裁を下し置かれ、有り難き仕合に存じまする。

「休鬼右衛門は何うちやな、鬼禪師様面目次第もございませぬ
 六十の坂を越へた私しが、此の悟助を殺そうといたしたのは重
 々の過失、負けて退くの御一言恐れ入りました、ございませぬ、休
 ア、ヨシ、流石は男の中の男ちや、拙僧も満足した、拙僧の
 様な乞食坊主に仲裁を委して呉れて忝じけない、以後は兩人と
 も兄弟の如くにして、此の遊廓の難儀を救ふて遣れ、兩人ハッ、
 有難うございます」と爰で一同は皆散つて仕舞ひました、其の
 後難波の鬼右衛門は今までの前非を深く後悔し、全く改心して
 頭髪を剃り落して禪師のお弟子となり、自分の跡は悉く悟助に
 譲り、末は極樂往生を遂げたと云ふ事でございます、偕て悟助
 は今日の喧嘩に兩の袂が邪魔になり、既に危うき所を傾城の地
 獄太夫が投げて呉れた此の禪、悟助に取つては大變な力となり
 ましたから、悟「ドレ之れを返して來やう」と結び目解いて疊ま
 うと思つて不圖見ると、丸に三つ柏の紋散らし、悟助は之れを

地獄太夫

る、妾しを貴郎の妹とはへ……悟「アイヤ其の不審は道理、我
 れはお前の兄の彦丸なり」ハッど驚ろく太夫、不思議の對面に
 喜ぶ悟助、傍に居た一休禪師、宵柏又は健屋の長兵衛も一同を
 れでは太夫は此の悟助さんの妹であつたるか、さても「く」と
 一同が不思議の遡返に驚きました悟「如何にも皆様、御話し申
 せば長い事、今は憂き川竹の勤めの身で、卑しき賈女となつて
 居りまするが、此の地獄太夫は元梅津掃部と云ふ者の娘、私し
 は兄の彦丸と申し、當今では破落戸の群類同様になつて居りま
 するが、世に在る時には一國一城の主の末孫……」と涙に暮れ
 て居るを聞いたる地獄太夫は、地「夫れでは貴郎が真どの兄さん
 でございしましたか」と人目の前も憚らず、悟助の手を取つて嬉
 し涙にくれました悟助も同じ思ひ、太夫の手を取つて悟「珍ら
 しき對面、久しぶりに振りてに兄妹の名乗をするのも御兩親様の御導き
 チエツ有難い、今まで互ひに顔は知りながら、兄妹とは知らず

地獄太夫

見ながら悟「ハテナ是れは不思議な事もあるものだ、世にも珍
 らしい我が家の定紋、モシヤ……あの地獄太夫は妹ぢやあるま
 いか、ア、妙な事もあるもの……幼年の折に兄妹別れくにな
 り、互ひに顔を知らずに暮し居るが……」と考へながら、禪師
 の御供をして、健屋長兵衛の二階に登りまして、太夫に面會いた
 したる上、厚く禮を述べて禮を返し、悟「さて太夫さん、妙な事
 を聞きますが、此の禪師は如何した譯で、お前さんの手許に……
 地「是れでございませうか、是れこそ亡き父さん母さんの遺物で
 ございませう、悟「フムさては若しやお前さんの姓は梅津とは申し
 ませんか、左「貴郎はごうして夫れを御存じ……悟「御存じごこ
 ろではない、夫れではお前は幼名をお刀根とは云はぬか、地「シ
 テ妾しの幼名まで御存じの貴郎の御本名は……悟「助は涙をハ
 ラく」と流し、悟「フム其れでは我が妹のお刀根か、ヤア懐かし
 やく」と云はれて大いに驚いたる地獄太夫、地「ナンと仰しや

に居たのも不思議……長承はれば御兄妹の顔も知らずに選
ふ不思議な御縁とは云ひながら、一國一城の主の末流と仰しや
るが、是れには何んぞ深い仔細のある事でございませうと聞
かれて悟助は涙を拂ひ、悟其れでは何うぞ、私し等兄妹の身
成り行き、お聞きなされて下さりませ」と其處で悟助は一條の
物語りをする、如何なるお物語りをいたしまするか、そは次席
に於いて講じあげまする。

第七席

倍て引き續きまして野晒悟助のお物語りでございするが、委
しは他日野晒悟助の傳を申しあげます時に譲り、此處には悟
助に代はり一瓢が手短かに申しあげること、抑も
此の悟助の親と申しまするは、攝津の國梅津の莊の領主、梅津
豊前左衛門清景の遠孫、此の人は軍學者にいたして梅津掃部と

申し、和漢の書にも精通して、大層人々に學者として尊敬いた
されて居りました、所が此の掃部と云ふ人が、天下國家の治亂
興廢の理を考へ、目下の形勢日々浮薄に流れ、利慾にのみ走
つて居りまする人情を聞くにつけ、見るに付け、誠に世の中を
味氣なく思ひ、一家族を引き連れて山奥深く塵埃の世を避け、
竹の柱に茅の軒、世を捨人となつて居られました、妻の名は此
花夫婦の間に産丸、お刀根と申す子供があり、庵は金剛山の半
腹でございまして、餘程人家とは離れて居りました、此處に足
利時代に有名な執權職細川勝元は掃部が金剛山の山奥へ閑居い
たして居ると聞き、自ら家來を引連れ金剛山へ登り、言葉も低
く禮を厚ふし、種々懇々と下山する様に勧めました、掃部も四
方八方から諸大名達が、種々招きまされど聞きませんでした、
士は己れを知る者の爲めに死するとかや、勝元公の人物に惚れ
込み、快よく承諾いたされしました、是れは全然彼の西美濃の兵

學者竹中半兵衛重治が、栗原山に閑居して居る所へ、後に至つて關白秀吉、其の頃は木下藤吉郎が、主人織田信長の内命によつて半兵衛重治の許へ参り、一二回問答の論をいたし遂に手に入れ、織田信長に仕へさせて大元帥といたしたと云ふ事が太閤記などに出て居ります。丁度其れと同じ事で、梅津掃部と細川勝元とは、互ひに胸中を明し合ひ、同氣相求め、同病相癒れむとでも申しませうか、遂に再び山を下り、京洛の地萬里小路と云ふ所に邸宅を構へた、處が間もなく細川勝元と山名宗全との間に不和を生じ、歴史上御案内の應仁の亂が始まり、京洛の地は合戦の巷と相なりました、其の後兩家表面上和睦を結びました、所が此の山名宗全と云ふ人は、勝元の正直なるに引き變へ、佞奸邪智の人物、細川勢の備へなきに乘じて不意に夜討ちを仕かけましたから、此方は散々に打ち破られ、掃部も軍師として踏留まり、殿しく戦つたるも、何分江河の決する時は赤

手を以つて支へ難しとやら、掃部は敵味方も驚ろくまで能く感ひました。遂に亂軍の中に名譽の戦死をいたしました。斯かる人物でございませうが、何れの里へなりとも身を隠し、子供を連れ立ち退き、何れの里へなりとも身を隠し、断へざる様にして呉れど、知る邊の方へ身を寄せさせ、妻の此花、兩人の子供を引連れ、夫に分かれて、岩倉山の知る邊を差して参りたる所、相憎く其の人は其處に居りませんでしたから、氣強の此花も途方に暮れて居る、すると何時の間にか山名の雜兵七八名現はれ來たつて、突然に此花を取り卷いた、此花も俄に抜いて對ひました。遂に兩人の子供は谷底深く投げ込まれた、此の体を見たら此花は今は詮なし斯かる雜兵の手にかゝらんと、自害して相果てた、此の時兄の彦九が十一歳の妹の刀根が八歳、天なる哉、不思議にも此の兩人は助かりまして、妹の刀根は獵師谷五郎と云ふ者に救はれたが、何

地獄太夫

しる未だ八歳の幼児、自身の名前も生國も分りません、其處で玉虫と云ふ名を付けて可愛がつて居りましたが、其の後間もなく谷五郎は死去、妻のお絹は稼人に別れ、獵人風情とて別に貯蓄とては無く、僅かの家財道具も賣り拂ひ、此の八歳になる玉虫を連れて都に出たが何にする事もなく、遂には乞食非人の如く相成り、廻り巡つて泉州堺の町に至り、辻堂に露を凌いで居る中にお絹は癪の爲めに難儀いたし居る、側には玉虫も唯ッロく泣いて居るばかり、丁度其處を通り合はせた龜屋長兵衛、お絹親子を自分の家へ連れて歸り、種々と介抱いたしまし、たが、其の甲斐もなく二日ばかりの後、取ねなく黄泉の客となりました、長兵衛も深切な人でございますから、此の子を引き受け育てます中に、次第に物心を覺ね成長するに従つて天の作せる麗質とでも申しませうか、其の美しさは何に譬へん様もなく、唐の楊貴妃、本朝の小野小町も三舎を避けると云

地獄太夫

ふ位い、主人長兵衛は娘同様に愛しみ居りますから、玉虫も子供ながら一旦乞食とまでなりたるものを斯くまで慈しみ下さるゆへ、何日かは其恩返しがしたいと、絶えず心に思ふて居る、或る日の事、主人に向ひ言は云々斯様、な譯で何うか遊女にして呉れと頼みましたから、主人も種々と止めましたが、一向に聞き入れません、其處で長兵衛の思ふには、彼れまで云ふもの、又一つには此の標級、遊女にしたらばと其處は商賈柄、遂に十六歳の春に店に突き出しました、何故地獄太夫と云ふ名をつけたかと申しますと、此の娘十一二歳の時分から他の娘とは異なつて、佛書を讀みならひ、或は名僧智識の御説教などを聴聞するのが、三度の食事をいたすより好きで、自然佛門に縁ある女と見えます、此の遊廓と云ふものは「歌舞の菩薩の君たち」がと云ふ語があります、ナカク、以つて左様な事はありませんが、娑婆を離れた地獄の世界、金錢の上で極樂になると云

ふ、佛法の奥を悟りましたから、地獄太夫と云ふ名を附けて呉れど主人長兵衛に頼みました。すると長兵衛もナカク佛法に熱心な人ですから、其れは好い名だと、遂に此の地獄太夫と名乗る様になり、全盛比びなき程でございます、けれども本來が然う云ふ來歴で、身を賣つたと云ふ譯でもありません、唯御恩返しと云ふだけですから、年に三度か五度しか客を迎えないと云ふ我が儘な花魁でございます、是れが地獄太夫の來歴で……此方梅津掃部の一子彦丸は、岩倉山に於いて谷底深く投げ込まれ氣丈の彦丸も一時は氣絶いたしました、フト氣が付き途方に暮れて居りましたる所を、通りかゝつた雲水の僧に助けられ四五年の間は弟子とも付かず、何んとも付かず暮らして居る、丁度彦丸十六歳の時命親の玉眞和尚も老年で此の世を去りました、彦丸は明日から雨窓を渡る事が出来ないと云ふ始末、身に覺れた職業もなく、別にする事もありませんから難波の津に参

りました、千日寺の邊りなる早桶屋勘兵衛の家に丁雅奉公に遣入る事となり、まさか梅津彦丸と名乗る譯には参りませんから彦丸と名を付けた、初めの程は主人に彦丸と可愛がられて居りました、成長するに従ひ何つしか俠客仲間に入つて、し、禪家悟道正覺の悟の字を取つて、野晒悟助と改め浪花の俠客となつたのでございます、借ても悟助は鬼右衛門と血の雨を降らそうと云ふ所を、一休大禪師の御仲裁、引き續き圖らずも兄妹の名乗合ひ、彼れ一句此れ一句、大略は先づ右の通の譯で、地獄太夫は、地獄其れではあなたは妾しの實の兄様か」と悟助の膝にすがり付き、人目も憚からず嬉し涙に暮れました、悟助も同じ思ひ、悟ア、懐かしや妹、其方の顔を見るに附け、母様の係が目の前に見ゆる様だ」と男泣に泣いて居る、禪師も育柏も鍵屋長兵衛も扱てもく、と驚くばかり、其處で禪師は兩人始め一同に因果因縁の御説法をなされ、悟助と地獄太夫は更め

て禪師の御弟子となりました、此の邊は演劇などでいたすと兄
 妹の名乗り合ひと云ふ、大變情合ひの深い所でございませうが、
 先づ略いたして置きます、其の後悟助は一たび千日前の宅へ戻
 り、時折々妹の所へ尋ねて参ります、一休禪師は計らずも悟助
 と地獄太夫との對面いたさせられたのも、喧嘩の仲裁から此に至つ
 たのぢやと、大層お喜びに相なり、餘り永いから又來ると、一
 同の者に別れを告げ、宵柏をお連れ遊ばして住吉小茶庵にお歸
 りになりました、禪師も暫らくの間は住吉社内にお在で遊ばし
 た、左右する内に牡丹花宵柏は一旦都へ歸らねばならぬ様に相
 成り、禪師にお暇乞ひを願ひ、宵夫れでは又都でお目にかゝり
 ます、一休「オ、最う行くかな、新左衛門、呑空にも宜しく傳へて
 呉れ、何れ近い内には眞珠庵へ歸る積りぢやと、傳へて下され
 宵長「まりました、夫れでは行つて参ります」と宵柏は禪師に
 別れを告げ、其處を出立いたしました、此方禪師は未だ京地へ

歸る時期では無いが、友といたしたる宵柏も歸京したる事で、
 何にかに就いて話し相手をする者がなくなつた、其處で暫く大
 和路の方へ再び参つて見物をして來やうと御考へなすつて、此
 の事を社司に話す、すると社司は「社では誰れか御供の者を」
 と云ふを禪師は「一休「イヤ、夫れには及ばぬ」と仰しやつた、
 誠に氣樂なお方で、旅の支度は疾より整へられ、只一人ブラリ
 と大和路から、紀の國の方へお出でなさる、途中の景色は又別
 段、野邊は蒼々として春の山は又一入の眺めでございませう、松
 の根方に腰を下ろし杖を側に立て掛けて、禪師は腰から大きな
 握飯を出して召し食がつてお在でなさると、向ふから來たのが
 年の頃二十五六、イヤ顔も何にも腫物だらけ、二本の青竹に絶
 り、一足歩いては息を吐き、二足歩いて休み、禪師が休んで在
 つしやる向ふの木の間へドツナリ腰をかけて、男「誠に好いお
 天氣でございませう、一休「ウ、宜い天氣だナ、お前さんは一休何う

したのぢやな 男「ハイ病人でございます 一休「それはお前さんが
 云はんでも判つて居るが、何處の者だ 男「ハイ私しは大和の郡
 山在の者で…… 佐保の庄と申します處で…… 一休「フム…… 佐
 保の庄…… 何う云ふ病ぢや 男「ハイ些と悪戯が過ぎたもので
 さいますから、夫れゆゑ身中瘡毒が廻りましたので、親類
 兩親がお前は因果者だから四國八十八ヶ所を廻つて來いと申し
 ますので、出ては参りましたが、何分にも歩けないので弱つて
 居ります 一休「何程大分歩き憎くそうぢやな、然し四國を廻は
 ると云つても笈摺などの扮装をして居れば、往來の者が惠んで
 呉れないものでもないが、お前の様なそう云ふ服装をして居て
 はいけない 男「ヘエ…… だが和尚さん、何んにも支度する事が
 出来ません、貧乏百姓の事でございますから…… 一休「名は何ん
 と云ふかな 男「ハイ私しは武助と申します 一休「武助か…… お前
 は其の服装で行くのか 武「左様でございます、大切に居り

ました二兩程の路銀、夫れを何處で落したか取られましたのか
 今調べて見ますと路銀もなくりますし、一文も外に錢が
 ないので食事をいたす事が出来ませんで、漸やく是れまで参り
 ましたのでございます 一休「左様か、然し四國廻りをするにも
 一文なしでは廻れる者ではない、修行をして歩くにも其の支度
 をして居るから、人も拳の中を呉れるが、然う云ふ服装では誰
 れも呉れる者はあるまい、サア茲に握飯が一つあるから、喰べ
 なさい 武「ハイ夫れは有難う存じます 一休「第一四國などへ参ら
 んでも斯うしたがい…… 武「何にか好い事がございますか、
 一休「薬師を信心しなさい、然うすれば乾度瘡毒は癒る 武「ヘエ
 …… 薬師、御出家さん、何んでございますか、薬師は瘡毒の薬
 になりですか 一休「馬鹿云ひなさい、薬師が瘡毒の薬になるもの
 か、然し薬師と云ふ位であるから、是れより七日の間籠つて
 断食でもするが宜い、お前は物を食は無いのであるゆへ、夫れ

で丁度斷食になるから一心不乱に一つ薬師を信心いたしたなら
ば、大方瘡毒も癒るであらう。武夫は何う云ふ譯でございま
すか。一体何う云ふ譯もなにもない、峯の薬師へ參つて七日の間
籠つて薬師に願へ、此の通り難澁をいたして、私しの身が癒
らなければ、農業する事も出来ず、従がつて兩親へ孝行する事
も出来ませんから、何うぞ癒して下さいと、願つて見なされ、
四國八十八ヶ所を廻れば二年も三年も掛る、其の中には大概
死んで仕舞う、然うすれば兩親が却つて心配するだらう、夫れ
よりも峯の薬師へ能く願つた方が宜い。武然うでございませうか
夫れでは今から然う云ふ事にいたしましたせう。一休お前に手當をし
て遣るのは承知して居るが、聊かでも金子があると、お前の心
に油断が出てならぬから、今から斷食をする氣で行きなさい。
武ハイ夫れでは然う云ふ事にいたします、が御出家さん貴僧
の御名前は何んど仰しやいますか、若しや薬師様へ願つて癒り

ましたら、御禮に是非とも參りますから教へて下さりませ。一休
イヤ、禮などに來るには及ばぬ、若し癒つたら兩親に孝行を
盡し、以來を慎しまねばなりません、拙僧も又會ふ事もある
夫れより一刻も早やく薬師へ行つて願ひなさい』と仰しやつて
禪師は行つてお仕舞ひなすつた。武成る程一文なしで四國を廻
はる事も出来ない、あの御出家さんのいふ通り薬師様へ一つ御
願ひ申して見よう』と夫れから杖を曳いて峯の薬師へ參り、一
心不乱に願を籠めて祈りました、其の間堂守りは武助に薬を與
へ介抱して遣りました、然るに七日の間飲まず食はずに願ひ籠
めました所、七日目の夜、身が疲れて武助はウトウトとして居
ると、武助と起すものがある、武助は目を開くと、薬師如
來、忽然として枕邊に現はれ給ひ、薬師「是れを汝に取らせるぞ」と
云ひながら、切りに武助の身軀を撫でる、武助は喜んでハツと
目が醒めた、見ると何にか書いた物がありますから取りあげて

見ますと
「村雨の只だ一時の物ぞかし、おのがみのかさ脱ぎ捨てゝ行け」
武「ハ、ア有難い、之れは薬師様が御利益を下すつたのに違ひ
ない」と武助は大いに喜んで、夫れから薬師堂の堂守に右の次
第を話しますると、堂「昔しから御利益は宏大なりと聞いて居た
が、お前の様に現在見る前で然う云ふお歌を戴くと云ふのは聞
いた事も見たこともない、是れは屹度お前さんの信心が深かつ
たゆゑ、此のお歌を授けて下されたに違ひない、何により結構
な事だ」と云はれて武助は愈々喜び、早速佐保の庄へ立ち歸り
村人始め両親にも右の次第を物語つた、サア其れからと云ふも
のは此の薬師へお参りする者が非常になつたと云ふ事、其の後
是れを教へて下さつたのは一休禪師だと云ふ事が知れ、武助親
子は眞珠庵へ御禮に参つたと云ふ事でございませぬ、何んだか受
け取り難い様なお話してございませぬ、未だに峯の薬師堂の

正面には此のお歌が残つて居ります、お話し變つて此方一休禪
師は、獨り旅の氣樂さにブラッ／＼と、紀州路より大和路に
道入つて参りましたが、其の日はツイ晝飯を食ふ事をお忘れに
なつて、彼れ此れ最う八ツ時分の頃ほひ、大層賑かな處へ差し
かゝつて参りました、禪師は何處かと尋ねに相成ると、是れ
は大和の郡山と云ふ所と分り、まだ宿へ着くのは早やし、それ
に晝飯も未だ済まされませぬから、其處等で腹拵らへをいたし
てモウ二三里も歩かうと思し召して、ブラ／＼お出かけに相成
ると、武藝の道場と見えてボン／＼と頻りに木太刀の音がいた
します、禪師はフト御覽なさると、有本隼人と云ふ標札が出て
居るから「休ハ、ア、劍術を遣つて居るな、一つ道入つて見物
いたし、序でに此處で晝飯をしたゝめて遣らう」と、ノソ／＼
立關へ掛つて参りました「一休頼む」と、訪れますと、門人と
見ね若い男が夫れへ出て参りまして「男是れは旅僧には何方か

ら御出でなされた一体抽僧は向ふから来たが腹が空つて仕方が
ない、何うか一飯頂戴仕り度い 門人「手前は武藝の道場であつ
て飯屋ではござらん 一体飯屋でないのは知つて居る、抽僧は旅
僧の事ゆゑ、何處に飯屋があるか、トンと不案内である、何に
いたせお前の處は大分人間が居るやうだから、澤山食物もある
と心得る、一飯の振舞に預り度く罷越せしが、縦んばお前の方
で喰はせないと言つても、抽僧はナカ／＼出はせん、何んでも
一飯食べなければ腹が空つて仕方がない」と云はれて門人は驚
いて奥へ駆け込んで行つた、サア此場の始末、如何に相成りま
するか、一寸休息、次の一席に於いて申述べます……。

第八席

有本単人の門人は驚いて奥の間へ飛んで参り 門人「先生、有、何ん
ぢや條々しく 門人「へい只今狂人坊主が御立間に参りました、

集「ナニ狂氣坊主が参つたとな 門人「へい何んだか何うも汚ない
服装をした坊主が来まして、何うか飯を喰はして呉れろと云ふ
ので、大方立場を間違たのかと思つたら、然うでない、通りか
よりの旅僧だが何分腹が空つて成らんから、一飯齊に預かりた
いと申します」之れを聞いたる有本単人は餘り無慈悲でない人
物と見て、集「ア、然うか、然らば臺所へ通して何になりと齊
を参らせたが宜い」凡そ出家と云ふものは夫れが修行だ、錢の
ない時には食も乞ふ事もあるから、其處で門人は立間へ立ち戻
り、男「アイヤ御出家、只今先生へ申しあげたる所、左様なれば
齊を参らせよとの事、一体何うも夫れは有難い、然し抽僧は不味
物は嫌いだから、前以つて斷はつて置かう 門人「贅澤な事を言つ
ては不可ない、兎に角此方へお出でなさい」と禪師を臺所へ案
内いたし、門人「御出家、飯炊きが膳の支度をすると禪師を臺所へ案
ば、早速お立ちなさい、一休「それは有難い、然し臺所は板の間で

冷たいから、拙僧は座敷で振舞つて貰ひたい」とツカ／＼奥の方へ御出でにならうとするから、門人が「コレ無暗に奥へ這入つては不可ん」一休「ナニ構はないよ」と差し止めるのもお構ひなく、サツサと筆人の居間に這入つて褥の上にはヤンと座つて、在らつしやる、飯炊きは斯様な事とは知らず、膳立てをいたして、芋や牛蒡を煮附けて大きな井へ入れて、麥飯を大盛り盛つて、臺所へ出て見ると居ない。○「ハテ坊さんは歸つたのかッ」とフト奥の方を見ると禪師は先生の褥の上に座り込んで頻りに手を叩いて在らつしやる。一休「早やく此方へ持て」飯炊きは驚いた。○「圖々しい坊主が遣つて来たな」と口の中に何にかめて一休「云ひながら膳部を其處へ持つて来た、禪師は之れを眺めて一休「文成る程……此奴は麥飯だな、是れは誠に腹の消化が宜い、所で他に何にか旨い物はないかな。○何にもございません」一休「ア、何うも吝な家だなア。○其れなら茶屋へでも往つ

たら宜からうに……」一休「ハ、ア然うか、夫れでは拙僧は此處に座つて居るから、其方が茶屋から持つて来なされ」と相變らず我が儘を言つてお出でになる、此方は有本筆人、道場で須りに稽古をいたして居りました。一休「何うした旅僧は、門人「只今下男に申し附けて飯を振舞ひました。一休「ア、然うか、喰べて居るかな。○何うでございますか。筆「何うではない、能く様子を見て疎忽のないやうにして遣れ」と云はれ門弟は行つて見ると臺所に居ない。門人「オヤ何處へ往つたか」と思ふと先生の居間へ乗り込んでバク／＼と麥飯を遣つて居る、門弟は之れを見て。○「コレ旅僧、そんな事をしては誠に困るではないか、何にも座敷へ這入つて喰べずとも臺所で喰べれば宜いではないか。一休「臺所では冷めたいから此處が宜い、して又お前達は何にしに參つた、○先生が疎忽があつてはならぬ、往つて様子を見ろと仰つた、たので參つた。一休「此家の主人と云ふのは、有本筆人として

あるが、而して主人は居るのか。○そんな大仰な事を云つては
不可ん、其の主人と云ふのは當道場の主人即ち先生ぢや。一休
古が濟んだら此方へ來なさい、茶でも振舞ふから。○何方が客
だか……一休「夫れは解らんよ、斯うなると……」門人も驚るさ
呆れ、早速道場へ取つて返し。○先生何うも變つた旅僧で、無
作法にも先生の居間へ這入つて蒲團の上へ座り込み、何うで
御座います、稽古が濟んだら有本主人に此方へ來い、茶を振舞
ふからなご、飛んでもない事を云つて居ります。一休「茶を振舞
とは、何んだ夫れは……」主人も不審に思ひましたが、丁度稽
古も一寸隙がございましたから、稽古着を着用したなりで、我
が居間へ來て見ると、禪師は最早や御飯を濟まして悠々とお茶
を召し上つて在らつしやる。一休「旅僧、拙者は當道場の主人で
ざる一休「ハ、アお前が主人か、成る程主人らしい顔だ。一休ハ、
ア狂人と見ねる、全体物には禮義と云ふ物がある、拙者は兩親

を失はひ、只此の頃では佛道を信じて居るから何宗に限らず旅
僧と見れば、相當の待遇をする心算ぢやが、然し其の許は出家
の身の上でありながら、主人の居間へ這入つて、人もなげなる
其の振舞ひ、假令旅僧でも此の儘に捨て置く譯には相成らん、
一休「ア、そんなに理屈を言ふな、拙僧は旅僧なれども佛道の修
業の傍武道も嗜んで居る、今天下泰平の如くなれども、何日か
道路に血を流し、修羅の巷とならんも知れず、然らば出家ぢや
からと云つて、劍法の心得なくては叶はん、拙僧も其の心得が
あるによつて佛道の修業、且つは武藝修行の爲めに諸國を遍歴
いたす者、貴殿は固より劍術遣ひの事なれば、幸ひ拙僧が一つ
教ねて遣はさうと心得る。一休「餘程其の方は狂ふて居るな、一休
處が狂ふて居るか、一休「武藝修行と云へば夫れ丈の支度をして參
るべき筈なるに、然る處袈裟法衣を着して居る癖に新機な事を
申すと云ふは、察する所貴様は禪家の坊主と見ねるな、一休「ア

其様なもの……拙僧は禪家ぢや、然し禪家でも別に悪い事はな
 からう、「隼」悪いと云ふ譯はないけれど……「一休」禪僧と云ひな
 がら武藝は上手だよ、禪家には悟道と云ふ事がある、其の悟道
 の妙術を心得て居るからな、其の方が如何に何んど云ふても、
 拙僧は討たれる氣遣ひはない、「隼」ウム姓名を承知いたさう、「一休」
 拙僧の名か、地水火風空、「隼」イヤ姓名を……「一休」地水火風空、
 それでなければ火木土金水、「隼」餘程變つて居るな、「一休」イヤ變つ
 ては居らぬ、スルと側に居りました二三人の弟子が、先生、
 と密かに袖引きますから、「隼」人も何事かと心得て、低聲にな
 り、「隼」何んぢや、「○」察するに此の坊主は全くの狂人で、斯う云
 ふ者と辯論などをなさるより、我れ、共へお引き渡し下され
 まする様、然すれば一本打ち替へまして、以來は左様な事を申
 さん様にいたしましたませう、「隼」然うか是れ旅僧、貴様は武藝修行と
 云ふので、弟子共が相手をしたすと云ふが何うぢや、「一休」ハアそ

れは至極宜からう、面白い事であらう、拙僧は少し喰ひ過ぎて
 腹が充滿だから、斯う云ふ時に遣つたら大きに消化るかも知れ
 ん、夫れでも貴殿の弟子が拙僧に稽古をして貰ひたいと云ふの
 は感心な事ぢや、「○」サア愚圖、云はずに早やく道場へ往け、
「一休」イヤ道場などへ行くのは面倒ぢや、此處で遣らう、サア何
 處からでも打つて見なさい、「○」そんな稽古があるものか、「一休」稽
 古ではない、教へて遣すのぢや、サア打てるものなら打つて見
 なさい、「弟」弟子共は顔見合はせ、「○」何うだい貴公先づ遣るか、
「△」何うも亂暴な坊主ぢや、其の内に一人の弟子が禪師の後方
 へ廻はつて、「△」旅僧云はして置けば様々な雑言を吐く奴、サア
「一ト」打ちにして仕舞ふから覺悟いたせ、「一休」ア、宜いとも、何
 時でも……「△」獲物は何うするのぢや、「一休」獲物などは要らんよ
「別」段獲物は要らん、手掘りにする、「△」イヤ憎くも其の一言と

門人怒つて木太刀を取り禪師の後方へ廻はつた、すると禪師は
兩眼を閉ぢてコクリと座眠を初められた。△「汝れン」と一
叫んで頭上より打ち込まんとしたが、座眠りをして居る者は
何うしても打てる者ではない。△「何うした旅僧」其の時禪師は
赫つと眼を睜き「休何うもしない、座眠をして居るが打てるか
へ、打てば死人も同様な物を打つのぢや、茲が禪家の悟道の妙
術、地水火風空先生の即ち不思議な所ぢや、サア一本打つて見
なさい。△「ウム……其の儀ならば……」と門弟が又もや太刀を
振り上げると、禪師はゴロリと横になつて、グウと野を
かいて居られる。△「オヤ」何うも先生往けません。有本軍人
も此の様子を見るよりも禪師のお側へ参り。軍卒爾ながら伺ひ
ます。一休何んぢや。軍僧は京都紫野大徳寺真珠庵の一休大禪
師では在られませぬか。一休拙僧が一休なら何うする。軍禪師に
あらずんば、斯様な事の出来るものではありませぬ。今や既に

木太刀を以つて後方に廻はつた時に、お眠り遊ばす其のお眠み
なされた時空野でない、真にお寝みなされた様子……一休「ナニ
草臥れると直ぐに寝るよ。軍其のお寝み遊ばす膽力と云ふもの
は中々尋常の僧侶に出来るものではございませぬ、手前豫て禪
師當地方へ御旅行の由を承はつて居ります。一休成る程一流の指
南をする程有つて、お前はナカク解つた男ぢや、然う事が知
れて見れば、隠すのは却つて宗門の罪人にもなる、誠其の方が
云ふ通り、拙僧は一休ぢや」聞くより軍人は飛び退いたる事に
して。軍扱ては禪師様とは心附かず、大きに失禮をいたしまし
た。一休「お前は中々心掛けがよい、佛道も餘程味はつたと見ゆる
な。軍左様でございませぬ、手前に於きましては、何うか出家を
も透げたいと云ふ所存もございませぬが、何分多くの弟子を預
ります上、殊に領主より扶持を賜はり、依つて止むを得ず武
術指南をして居りまするが、兩親又は子を失なひ、只々無情を

威して出家をいたさうと云ふ考へは、始終休む間もございませ
 ん。一休ア、夫れは宜い事だ、併し出家の志を保つて居て武藝を
 いたせば天下の名人、其の方佛道を忘れず、武道に怠りなくば
 今に名聲を揚げるに相違ない、禪家の悟道と云ふ事を其の方に
 授け遣はす、有本華人は大きに喜び、夫れから禪師を客間へ伴
 なひ町重に取り扱ひまして、華人も其の後有斐の御弟子となり
 門人一同が禪學の講義を聞いて喜んだ、此の事何時しか領主の
 耳へ這入りますると、一休禪師お在でとあらば、直ぐに領主の
 館へ御案内申し上げる様にと言ふ、お使者が参りました、する
 と禪師は御謝絶遊ばし、別段領主に面會いたす用事もないと仰
 しやつて、其の儘其處をお立ちに相成り、夫れより河内に入り
 モウ日の暮れ頃山本村の近邊に参られますと、生憎道にお迷
 ひ遊ばしたものと見なしまして、行けども、人家がございませ
 ん、物に驚いた事のない一休禪師、愈々人家がなければ野宿を

すると云ふお考へで在らつしやる、たん、歩つて参られます
 ると、向ふの方にチラ、と燈火が見えますから、禪師はお
 喜びなされ、一休「是れ幸ひ、雨露を凌ぐに何よりだ、木小家の隣
 でも宜い、何うか宿を求めたい」と思召し、猶も近付いて御覽
 なさると一軒の百姓家、一休ア、少し頼むよ、まだ寝はいたすま
 い、一寸閉き度い事があるが、〇「ハア何んだね」と云ひながら
 窓を開けて顔を出したのは、年の頃六十四五にもならうと云ふ
 老爺、爺「何んだい御出家さん、一休拙僧は都へ歸る者ぢやが、道
 を間違へ、飛んだ難澁をいたし、其の上腹は空つたり大きに草
 臥れた、此の邊に何處か宿屋はないかな、爺「そんなものは此の
 近邊にはない、一休では庄屋か代官の家は何處だ、爺「名主様の
 家は是れから半里も離れて居る、一休夫れは何うも不都合ぢやな
 何うだ、貴様の所へ泊めては呉れまいか、爺「イヤお断はりだ、
 一休「不可んかへ、爺「不可んども、一休夫リア又一休何う云ふ

譯であるか、爺何う云ふ理由と云つて、此の頃はマア坊さんに
 悪い者があつて、此の村で坊主を泊める者は一人もない、と云
 ふのは能く行き暮れて難澁するから、泊めて呉れると云ふので
 坊さんだからヨモ間違ひはあるまいと思つて泊めると、夫れが
 強盗などを働いたりするので……一休ハ、ア、爺それゆゑ先
 々月から何んな事があつても坊主を泊めてはならんと云ふ事を
 名主様より觸れが廻はつた、氣の毒だが泊める事は出来ない、
 一休夫れは不都合ぢやな、拙僧はそんな悪い者でも無い、爺ウ
 ム夫れアお前さんはそんなぢやなからうけれども、坊さんで在
 つて見ると、盗賊でもないとも云へねエから……流石の禪師
 も驚かかれ、一休是れは大變な所へ歩つて来たものぢや、此の邊に
 寺はないかな、爺「是れは大變な所へ歩つて来たものぢや、此の邊に
 と云ふのがあつたけれども、今は坊主も何んにも居ねエで化物
 が出る者だから、まるで殿れ寺になつて居る、一休化物が出る、

ハ、ア、爺何んでも毎晩夜中になると、本堂で踊りを踊るそう
 で、始めの中は氣にも掛けなかつたけれども、今の處ぢや化物
 が出ると云つて、誰れも其寺へ行く人がございません、一休夫れ
 は有難いな、爺何にが有難い、一休「アハツハ……拙僧は諸國修行
 の旅僧であるが、未だ化物と云ふものを見た事がない、行徳寺
 と云ふ所へ參つて今晚は一つ其の化物にお目にかゝつて行かう
 爺「面白坊さんだな、夫れはお前さんの勝手だが、お前は除
 程氣が狂つて居ると見えるな、一休何んでも宜い、だが是れ
 から里程は何の位いあるな、爺四五町も行けば直きに分かる、
 毀れかゝつた大門が在つて、夫れを這入ると本堂だ、一休夫れは
 大きに辱じけな、と一休禪師は其の儘其處をお立ち出でに相
 成り、これより古寺へ乗り込み、化物にお出會になると言ふ一
 奇談、一寸一服……。

地獄太夫

借ても一休禪師は件の老爺に別れを告げ、四五町ばかりも西の方へ歩つて参りますと、果して大門が見えませんでした。一休「ハ、ア此寺だな」最早や餘程朽ちて毀れかゝつて居ります、一休禪師の事ですから、固より化物など云ふ、其様な馬鹿氣た事のないのを御存じで、却つて其の正躰を見届け遣らうと云ふ思召し、参つて見ると實に足も踏み込めない様に草薙々と生茂り、本堂とは名のみにて、建具は皆失なつて仕舞ひ、正面を見ると彌陀の像もなければ、草花一本供へてもありません。一休「ハ、ア成る程、是れは酷い毀れ寺ぢやな」と心の内に思召され、本堂の正面の處へドツカミ座つて一休「化物は何時頃出るのか、早やくお目にかゝりたい、獨りでは淋しくてならぬ」と禪師は待つてお居でになる、誠に呑氣なお方でござります、化物でも相手

第九席

地獄太夫

が戀しいと仰しやるのですから……左右する内に夜は段々と更け渡り、星の様子を御覧になると、最う彼れ是れ九ツにもならうと云ふ時分、起きて居ても仕方がないと、禪師はゴロリツと横におなりなされた、旅の勞れがございますからトロ／＼とお寝みになる、すると俄かにドン／＼と云ふ足拍子「一休ハテナ何に者が参つたのか知らん」とバツと目を醒し、起き直り様子を御覧に相なると、庫裡の方は何れも年の頃十七八と覺しき妙齡の女、大層美しき振袖を着用したる三人の女、皆塗柄の京團扇を持つて踊り始め、一休成る程、是れが踊ると云ふのぢやナ」とシツと其の様子を見て居られますと、各自に歌を唄ひながら踊つて居ります、禪師は耳を敬立てお聞きなされると東は野邊の春色、樂しき中に悲しきは先祖の骨を積み上げて、何時かは死ぬものを、悟れど今は涙なり、終始は野邊の土

の中、草の葉となりけり、南は池の水に住む、魚も此の頭時を得て、其の大海を眺むれば、今まで動く尾も鱗も水に覆れて動かれず、池の蛙は情けなや、山は何れも山藪き、森の木蔭に住居する狐は不惑なものなるぞ、官も昇らず年老いて、夜なく己が火を燃す、
一休禪師は之れをお聞きなされて「一休是れは如何にも面白い事ぢや、何れ是れは狐狸の仕業ならん」と思召しつゝと起き上がられたる事にいたして「一休汝等妻を女に變じて人を惑はし、斯く寺院を大破いたす其の罪固より免すべくもなし、今より必ず此の御堂に出で踊りなごをいたす事相ならん」と仰せられ忽ちに御用意の筆を取り出して、延紙へ「南無釋迦如来」とお書きなされた時に、不思議にも今まで踊つて居りました三人の女は消え失せたるかと思ふと、禪師も夢の覺めたる心地いたされ一休「ハ、ア今のは夢であつたか、古寺などには斯様な事は往

々あるもの、然し夜が明けるまでにはまた大分間がある、アモウ一寝入りいたそう」と又もや腕を枕に其の場にお寝みなされた、其の内に夜は全く明け曉れ、此の事を聞き附けたる近所の者共「ドヤ」と入り来たり、
△何うだ昨夜の坊さんは此度化物に喰はれたに違ひないな、
△私しは意見をしたらけれども聞き入れない、其様な毀はれ寺は面白いの、化物が出るのは幸ひだとか云つて、此の寺へ出かけて来たが、大方生きて居やしめエよ」と口々に噂をいたしながら這入つて見ると、禪師はよい心持に寝て在らつしやる、此の体を眺めた大勢の百姓共、
○「ア是れは奇態だな、坊さんは寝て居る、眞逆化物でもあるめエな、何にか前へ書いてある、太助、是れア何んぞ云ふ事だ」
太助と云はれた若い男は「太助、ム……南無釋迦如来、○「オヤ夫れぢやアお釋迦様の息子が知らん……太助然うぢやアねエだらう……」
禪師は物音の騒がしさにフト眼を覺され「一休イヤ来

たかな ○オ、御出家どうしたね 一休昨夜は面白く踊りを見た
 が、アレは狐狸の仕業であらうか、或ひは夢かも知れぬな ○
 へエ……行李かね、私しは文庫だと思つた 一休馬鹿を申せ、此
 の南無釋迦如来と書いたのを、本堂の正面へ貼つて置きなさい
 然うすれば以後怪しい事はない、當寺も見受ける所ナカク、の
 大寺である、無住大破をさして置いては宜しくない、拙者は其
 の内に一人の出家を遣はして、此の寺を守らせやう、第一村に
 寺のないのは甚だ不都合であるから…… ○お前エ様そんな
 るらそうに云ふが、全体なんと云ふ人だ 一休拙僧かナ、拙僧は
 京都紫野大徳寺真珠庵の一休ぢや」と云はれたのを聞いて一同
 の者は驚き呆れ、其處へベタ／＼と平伏して仕舞つた、其の内
 一人の年若らしき者 ○「ヤアッお前エ様の事でございませうか
 アノ名高い一休様と仰しやるのは……是れはマア飛んだ失禮な
 事をいたしましたしました、お前エ様昨夜泊りもせず…… 一休ハ、ア、

貴様が昨夜窓から顔を出した汚ない面の老爺か…… 爺「へい……
 一休「イヤ餘程お前の顔は汚ないの…… 爺「へい……有難う存じ
 ます……」 鬼角して居る所へ名主と見わて其處へ参りまして、
 名「何うした村の衆 ○へエ是れは名主様でございませうか、實
 は昨夜一休様が行徳寺へお泊りなされました 名「ハア…… ○
 夫れは斯う云ふ譯でございませうと始終の話しを聞いて名主は
 大いに喜び、名「夫れは、勿體ない、豫て御高名は聞き及んで
 居りました、禪師様でございませうか、始めてお目にかゝりま
 す、何うか村の者等が失禮の段はお宥し下さりませ、して何う
 か只今のお話しの御住職を一人、是非ともお送り下さります
 やうに……」 一休「夫れは此の者に申し通り、一山一寺は尊とい
 もの、此の寺を修繕いたして置くが宜しい、拙僧が歸浴いたせば
 直ぐに一人の僧を送つて遣はすから、其の者に委任せるが宜
 からう 名「ハイ畏まりました、有難うございませう、何うか手前

地獄太夫

宅へお越しの程を願ひます」と禪師を名主の宅へ御案内を申し
 て馳走した、一休禪師は繼て其處を立ち出で其れより都路に指
 しかより、廻りくして今しも山城國綴喜郡薪村へお出でになり
 ました、すると向ふより大勢の百姓共が竹法螺を吹き、鉦太鼓
 を打ち鳴らし、錢笠を着用なし、鉦等を持ちさへ、彼れ是れ四五
 百人ワア〜ツと鉦波の聲を立て、歩つて來ると言ふ、サアこ
 れ何に事でございますませうか、餘りお永くなりまするから、一寸
 一服、次席のお楽しみといたします……。

第十席

借ても一休禪師は山城國綴喜郡薪村へお出で遊ばすと、家々
 道具を片付け、若者はワア〜ツと騒ぎ立て、手に〜鉦太鼓竹
 槍を携さへて歩つて來る、何にか事あるべき有様、禪師は此の
 様子を見て、サアは一揆でも起つた事と思ひ、一休「コレ〜」お前

地獄太夫

達は何にをしてござる。○「ア坊様ア危ねエぞ其處でマゴ〜
 して居ると、飛んだ傍杖を喫ふぞ、サア〜危ない〜、早や
 く通らつしやれ〜」一休「只だ危ないと云ふても分らない、一休
 何う云ふ事ぢやな。○「ウム夫れはな、此の處の代官様は宮口左
 近と云ふ人だが、夫れは〜年貢の取り立てが殿しく、下の者
 ばかり苦しめますから、一揆を起し、是れから代官を殺しに行
 かうといふ寄り合ひの最中なんだ。一休「ア、左様か、夫れは危な
 い事、然し拙僧も此處を通りかゝつたのも何んその縁、一切拙
 僧に任して下さるまいかな。△「坊様ア其の思召しは有難たいが
 れへ二三人出て参りました。△「坊様ア其の思召しは有難たいが
 此處の代官宮口左近と云ふ奴は、腹散々悪い事をして、少しで
 も百姓に悪い事でもあると、直ぐに捕まへて牢へ打ち込んだり
 幾らか金を出せば助けると云ふ様な事ばかりするから、此度は
 何うして捨て置くか云ふ譯には往かねエ、是れから直ぐに乗り

込んで代官始め片ッ端から打ち殺して仕舞ふんですから、貴僧も怪我しない内早やく通らつしやれ〜
 一休「コレ〜」人を殺して只だは済むものではない、皆の者が命を抛打つての事だらう
 御領分かな、左様に事を大仰にせんで宜しい、一休當處は誰方の
 ざいます、一休「フ、ム近衛のか、其れなれば願書でも作つて願ひ
 出で〜は何うちやな、△エ、何んでございます、其様な事も仕
 ない譯ではございません、今まで二三度も願書を以つて、京都
 近衛殿のお邸へ願ひ出ました處が、何んでも宮口左近と云ふ代
 官と、御館の誰れとか、腹を合はして居る様子、何日も〜持
 つて出ました願書は取り上げ放してございます、追つて取り調
 べ近々の内に沙汰をするさばかりで、二年も三年も苦んで居り
 ます、そうして見るともう願ふ所がございません、是れから直
 ぐに左近を殺して皆の者も死んで仕舞ひます覺悟で……一休「コ

レ〜然う言ふ短氣を起しては不可ぬ、近衛殿が尙お聞き入れ
 の無い時は、外に執權職細川兵部太輔にも頼んで遣るが、マア
 拙僧が近衛殿へ宛て、書面を書いて遣るから、其れを持つて京
 都へ願つて出る様にいたしましたらば宜からう……一休「何んだつて
 此の乞食坊主、過刻から聞いて居りア、大きな事ばかり吐かし
 やアがる、天下の役人様を捉まへて兵部太輔など、呼び捨てに
 して……一休「コレヤ〜」然う怒らんでも宜しい、此の村の名主は
 居らんかな、一休「何んだ名主なんて……」名主様は彼處にござるが
 ……一休「然らば一寸名主に會はせて下され」とズン〜
 一休「教わら
 れた方へ歩つて参りますと、一つの御宮があります、其處に
 一面の人群集、〇旦那様今此の坊様が會ひ度いと云ひます、名主
 ナニツ」と云ひながら出て参りましたのは、年の頃五十格好の
 名主、袴の股立を高らかに取り上げ、腰には一刀を佩み、後ろ
 鉢巻、手には杖の様な物を携へて居りましたが、禪師を見るよ

り賦禮をして、名して御坊は何處のお方でございます。一休ア、
 拙者は雲水の僧ぢやが、拙僧から近衛殿へ書面を遣れば納まる
 であらう、待つしやれ。汚ない坊様ではございませぬが、
 何んぞなく威ある御仁と見なされたので、流石は村長を勤める
 だけで、決して禪師に無禮をいたさず、早速に紙を出して墨斗
 を當てがいますと、禪師は受け取つて何にかサラ／＼ツとお
 書きなされ。一休棚を下され。名棚はございませぬが……誰れか
 辨當の飯があれば持つて来い。早速にこれを差し上げると、チ
 ヤンと封じをなすつて表書をいたし。一休ア誰れか之れを持つ
 て京都へ行かつしやれ。名ハイ畏まりましたとございませぬ、事
 納まれば強ひて代官を殺すにも及びませぬ。と使を撰んで三人
 を京都へ遣はしました。そのうち此の坊様を宮の拜殿へ置く譯
 にもいかず、名主の宅へ連れ歸る譯にもいさませぬ。若和尚様
 此の村に無縁寺と云ふお寺がございませぬが、何卒今宵は其寺

にお泊まりが願ひ度うございませぬ。一休ア、左様か然らば其の無
 縁寺へ案内をして下さる様……シテ其の寺の名が無縁寺と云
 ふのなか、名へエ全体無縁寺と申すのでございませぬ。瑞龍山妙
 勝寺と云ふのが真正の寺號でございませぬが、モウ始終住持が居
 りませぬで、無縁佛の施餽鬼をする處ろに宛ててございませぬか
 ら、皆様の者が無縁寺と申します、只今の處では何分住職が居
 りませぬで汚なくなつて居りまするが、鬼も角も其處へ御案内
 いたさせませぬ。一休ア其れは幸ひ、餘り大勢出家の居る處は騒
 々しくて不可ん、然らば其の瑞龍山妙勝寺へ案内させて下され。』
 其處で村人五六名が禪師と同道をして、彼の空寺へ案内をいた
 し。村ア坊様此處へお寝みなされまし。と辨當飯を當がひ。其
 いて立ち歸りました。禪師は軒傾き瓦落ち、月漏る汚なき本堂
 で辨當を召し上がり、チャンと座禪をして居られます。其の
 内に到頭夜も明け離れて参りました、すると禪師は彼の寺を出

で、昨日の宮へお出でになりますと、相變らず昨夜焚いた儘火がまだ燃わ残つて居ります、眠い面をして竹槍を突いた儘、
 ○オ、坊様ア今朝の辨當は今出来ると持たして遣りします、蒲團がないから寒かつたらう、一休「イヤ、そんな事は介意はぬが、然し彼の寺は妙ぢやナ、其れ見なされ、彼寺は化物寺と云つて誰れも住むものがないのです、それにお前様はるらい強いお方だ、昨夜出て来ない所を見ると、實は食はれさつしやつたのか知らんど、昔が云ふて居りました、一休「イヤ、別に拙僧は食はれもせぬが、然し妙なものを見た、氣の毒ぢやが四五人手を貸して下さらぬか、一休「イヤ、驚ろく事はない、拙僧が案内をする、夫れに最うお日様が出てござれば、夜とは違ひ怖くはあるまい、サア来やしやれ、と先きに立つて彼の寺へ歩つて参りました、成る程壘が腐敗して、處々に苦を生じ、又草が生へて居ります、其の本堂の前の板の許へ来ま

すると一休「サア此の板を一枚外して下され、一休「イヤ、と顔見合はせた若者、○如何いたしますので、一休「拙僧が考へがあるから、のけて下され、據所なく鐵を持つて板をこち上げ、下を掘り起して見ますと、三つの壘が出ました、何れも其の以前通用いたしました沙金と云ひ又は棒金と云ふ物が澤山入れてあります、一同の者はハツと計りに驚ろきました、○坊様ア是れは何んです、一休「サア拙僧は知らぬが、お前達は此處の者で、知らぬと云ふのは不思議、然しこれは先住の貯めて置いたものに違ひない、處が人に見せない様に埋めたのを、後住の者に言ひ傳へる時がなく死んで仕舞つたので、後の者は誰れも知らないのぢや、昨夜拙僧が此處で座禪をして居つて、何にか怪しき物があるやうに思ふた、所謂これは黄金の精ぢや、それゆゑ怪しき物が見ゆる、何にも變化ではない、その黄金の光のあるのを見て、或ひは幽霊ぢや、化物ぢやと思ひ違へたものであ

らう、惜しい事ぢや、天下の寶を土中に埋めて置くに云ふのは
……第一是れだけ金が世上に廻はらんければ、夫れだけ不融通
この金は地頭に納める物でもなく、又汝達が別けて使ふもので
もない、此の寺は斯く破損して居るで、其の營繕費用として使
ふのが宜からうと思ふが、何うちやな ○「へい夫れが宜しうご
ざいます 一休 夫れなれば直ぐ名主を呼んで來なさい」と早速名
主を呼び寄せ、村中協議の上、この寺の普請にかゝる事になり
たした、お話しかわつて、彼の使ひの三人は、京都近衛殿の御
館まで参りました、昔しは當今の御時世とは違ひましてその當
時の平民は、斯る御屋敷へ参りますのは、中々以つて恐れ
入つて居りましたものでございます、殊に平生交際をせぬ百姓
でございますから尙更らの事、門の入口へベタリツと平伏つて
仕舞ひまして、兩手を支へ ○「へい御門番様へ御願ひ申しあげ
ます 門番 何んぢや貴様等は、何處から参つたか ○「へい此の御

手紙を持つて辨村から参りました」と彼の禪師のお書きなされ
た手紙を差し出した 門番 夫れでは御領分の内の百姓共だな 百
へい左様で……」 門番は取りあげて見ると近衛殿と云ふ名當が
文箱にも入れず、いと粗末な紙に書いてあります、然し近衛殿
と書いて在りますものを、その儘に返されもいたされませんが
ら、早速玄關番へ差し出した、門番では分りませんが、玄關に
居りまする青侍は、手紙に宗純と記してありますのを見て、
門の處まで駈け出して参り 武「これは、大禪師の御使者、何
卒此方へ御通り下し置かれまする様、卒ざく」と丁寧に三人
を玄關へ案内をする、三人の百姓共は驚ろき呆れて仕舞ひ
ド、何卒、命ばかりはお助けを願ひます」とガタ／＼慄るへて
居る 武「イヤ左様ではござらぬ、大禪師様の御使者、卒ざ先づ
此方へ御使者の御役目御苦勞に存じまする、ソレ早やく御洗
の水を……」と吩咐ける、仲間には洗ぎの水を汲んで参り、草鞋

地獄太夫

を解かせ、足を洗はして、書院へ案内をいたし、敷物お茶菓子を持ち来たつて、丁寧に取り扱ふ、百姓共は益々慥へ上るばかりでございまして、
 ○「へエ……何卒命だけはお助けを願ひます、武
 イヤ是れは何うも……して只今禪師は何處にお在でございま
 するか、
 ○「へエ……善兵衛でございませうか、彼れは先年死にま
 したが、今では悴の善太郎は居りますか、併し私しの村に善
 次と申す者はございませぬ、武イヤ左様ではござらぬ、只今手
 紙の禪師様は……
 ○「イエ使に参りましたのは善次ではござい
 ませぬ、庄兵衛に松五郎、市松と申します、武イヤこの御手紙
 の主は……
 ○「あの池の主でございませうか、彼れは何んでも
 か、
 ○「ア、彼の坊様でございませうか、坊様はあの化物寺
 手紙をお書きなされた御坊は、
 ○「牛蒡は大變に今年は不作の機
 でお方は、
 ○「ア、彼の坊様でございませうか、坊様はあの化物寺

地獄太夫

に……武化物寺……先づ暫らくお控へ下さる様に、此の手紙
 を只今お上へ御覽に入れますから……と其の儘之れを御奥
 へ御覽に入れた、其の當時の近衛殿、職は關白で在らつしやつ
 て、御年は漸やく三十五歳、何にか書見をして御在で遊ばしま
 したが、今しも青侍が差し出したる書面を御開きに相なり御覽
 遊ばされると、天に風雨の病ひあり、地に震動の妨げあり、近
 衛殿に左近の臣あり、近フ、ム……是れは正しく一休禪師の手
 跡ちやが、して使者に参つた者は……侍士「ハイ士民のやうに
 さいます、近「ウム苦しうない、其の者を此處へ呼べ、侍士「へエ……
 御直々では……近「イヤ、苦しうない、會はねば分るまい、
 早速此處へ召し伴れて参れ、と一言葉が掛る處へ、諸太夫服
 部加賀之助が御前に出仕する、近「オ、加賀之助か、好い處へ参
 つた、只今云々斯様、
 加「ハッ長まりました、御前をすべつて、服部加賀之助は、此方

地獄太夫

御書院へ来て見ますと、椽側へ飛んで下りたる百性共、百へ
 エ御殿様、何卒命ばかりはお助け願ひ度うございます、恐れ入
 りましてございます、加これ、左様な事を申しては相成らぬ
 全体其の方等は何處の者ぢや、百性御領分内新村の百性でござい
 ます、加「ウム……」左様か、して其の百性が何に用あつて當御館
 へ参つたのぢや、百「へい、あの坊様のお使ひに参りましたので
 ございます、加イヤ其れは分つて居る、只今のは一休禪師の御
 書面ぢやが……」百「エ、ッ、一休禪師と申しますと……」加
 其方達に使者を吩咐けられた、彼の方が大徳寺一休大和尚様で
 ある、百「へい……」イヤ彼の坊様はたしか、宗純とか云ひます、
 加「コリヤ其の方達には分るまいが、一休様とは緯名で、宗純
 と仰しやるのはそりやア御法名ぢや、百「へい……」夫れぢやア、
 坊様と云ふものは、生きて居る時から、戒名と法名とがござい
 まするんですか、加「何を申すか、全体何にゆる禪師が彼云ふ

地獄太夫

御書面をお送りになつたのか、其の方共は何にも辨まへぬと見
 わるな、百「へい……」禪師様つて何處の人か知りませんが、且那
 様の前では甚だ濟みませんが……加「何に事か遠慮なく申せ、
 百「へい其れぢやア申しあげますが、實は私し等村の代官様は
 私し達を常々苦しめますので、二三度御屋敷へ御願ひに出まし
 ても、何日も、何れ取り調べてから返事すると仰しやつて、
 モウ二三年にもなりません、一寸も何んの御沙汰もなく、何日
 までも斯んなに苦しめられるより、一層の事代官を殺して仕舞
 はうと、一同が集まつて一揆を起して居ります所へ、宗純様つ
 て坊様が御出でなすつて、近衛様と乃公とは友達、若し聞いて
 呉れなかつたら、執權職細川兵部太輔にも口を利いて遣るが、
 マア近衛殿の御領分だし、拙僧が手紙を書くから之れを近衛殿
 の御屋敷へ持つて行つて願へ、そうしたら多分納まるだらうと
 言はつしやつたで、此の手紙を持つて來たのでございます、加

イヤ夫れは御苦勞、其れで様子がスツカリ相解つた、決して心配するには及ばぬ、暫らく其處に控へて居れよ」と服部加賀之助は早速此の段を殿下に申し上げました、關白殿下は之れを御聞き遊ばして、近「それは小者の百姓共等には不愆なものである、左近の不埒は我が不徳にもなり、且つは細川家などへ聞へては相ならぬ、又大禪師に御心配をかけるも御氣の毒なる次第取り敢へず汝彼の地へ参り、宜しき機處置いたして呉れ、禪師にも宜しなに……」加「ハッ長まりました」と加賀之助は仰せ承はり、至急支度を整へ彼の三名の者を伴れて、新村へ御出張、早速禪師へお目通りをした上、代官屋敷に乗り込みました、驚ろいたのは例の左近であります、百姓一揆の事は聞き知りまして豫て家來共その他を以つて、甲冑こそは身に纏ひませぬが、凡ての用意をいたして、若し一揆をして來たならば斯様く準備の最中、今服部加賀之助が京洛より來たと聞き、早速お出

第十一席

迎ひ申して黙禮をした、加賀之助は、ズツと上座に押し直つて殿かに「加」其の方儀、段々と取り調べて見ると、甚だ宜しからん事はかり、其方一人の不都合より、小者百姓共に迷惑をかける上の御威勢に係はる、よつて屹度殿前にも處すべきところ、上特別の思召しあれば切腹を申し付ける、有難く御受けをいたせ宮「ハッ恐れ入りましたとございます」と罪を謝した、其處で代官宮口左近は切腹と云ふ事に定まりました、サア是れから此の騒動を一休禪師が如何處置をなされまするか、次席にて申しあげます。

借ても一休禪師は宮口左近の切腹と云ふ事をお聞き取りに相成り、一休夫れではいよいよ左近は切腹と云ふ事に相成つたのぢやな、加「ハイ左様でござります、一休然し世に云ふ如く其の罪を借

んで其の人を憎くまず、拙僧が此の地へ参つた計りで左近も切腹する様になつては餘りに氣の毒であるから、腹を切らせることだけは許して貰ひたい、先づ妻子諸共當山城追放位いが至當であらう、夫れに付いて左近一人が私慾横領したのではない様に思はるゝ、察する所他に連類者もある様だ、何卒加賀之助然う云ふ事にして貰ひ度い、加ハッ御尤もな仰せでござります早速主人に此の旨申しあげるのでございませうと早速に近衛殿に申しあげると、近衛殿にも一ト通ならざる禪師のお言葉でございませうから、宮口左近始め家内の者山城の國を追放と云ふ事で落着が付きました、そこでも百姓共には三ヶ年間半買にして遣ると申し渡された、村長始め一同の大喜び、是れも全く一休禪師様の御庇護である、成程一休禪師と云ふ方は生佛様の様だ、有難い事だと云つて禪師がお在でになります、妙勝寺へ一休禪師をお拜みに参りますと云ふ大騒ぎ、村人は皆々町々へ

に禪師を取り扱かひ、上に御届けをして右の金子を以つて立派なる普請をしたのが、方今に残る彼の瑞龍山妙勝寺、この寺内に禪師の御隠居所を建てた、これ恩を酬ゆる爲めに作る庵でございませう故、酬恩庵と名づけまして、ドシ、晝夜を分たす普請に取りかゝりまして、禪師は暫らく此寺にお在でなされました、其の後京地に於いても大いに穩かに成りました様子が眞珠庵よりいたして、哲梅を始め、多くのお弟子達お迎ひでございまして、是非お戻りを願ふとの事、夫れに眞珠庵へお歸りと相氣重態とお聞きなされて、一先づ是れから眞珠庵へお歸りと相なりました、翌日禪師は早速京都鷹ヶ峰川新左衛門の屋敷へと参られた、此方新左衛門は身躰兎角勝れず、一休禪師に暫しのお暇を戴き、僧の呑空を連れて京都のお屋敷へ歸へられ、始めの内は左したる程でもありませんでしたが、今日此頃では餘程の重態で、新左衛門も長らく寺社奉行の職を勤め、京都では餘

随分名高き人であつて、親戚知己も澤山にございますから、日々屋敷を問ひ尋ねまする者引きもきらず、新左衛門は最早や起き上るも自由にならぬ位の、種々手當をいたしましたが、何分にも今は湯水も碌々咽へ通らず、只だ死を待つと云ふ有様、子息を始め一同の者の嘆きも大方ならず、新左衛門の枕許に打集まりて伽をいたして居りまするが、新左衛門は別段苦しむ様もなく、只だ木の枯れる様なもので、スヤ／＼と能く寝て居ります、けれどもモウ顔色などもスツかり變り果て、小鼻の肉も落ち、今にも鬼籍に入らんとする有様、新左衛門も斯かる重態に在りながら、心は未だナカ／＼確かなもので、ツト／＼して居りますると、耳を貫きまする音楽の響、笙、箏、羯鼓などの調へが聞へまするから、新左衛門はフト眼を見開き見廻はしますと紫雲、鸞、鷲、其の中に三尊の彌陀廿五菩薩、赫々と光明を放つて居ります、時に彌陀如来の御聲として、如何に新左衛門、汝

是れまで佛學を修め、一休禪師の供をいたして諸國修行をなしたる段、誠に神妙の至り、依つて今彌陀の淨土へ案内いたす様心得よと仰せらるゝと新左衛門何んと思ひけん、新左衛門の教によつて、能く佛學の悟道を知れり、壽命は己れの自由ならず、察するもの、然るに我れを彌陀の淨土へ案内せんごよは何事ぞ、我れを迷はさんとするものと覺へたり、悴ッ新左衛門は居らぬか、早やく弓矢を持ってツと夢中に叫びながら、突然床の上に起き直りましたる様子に、側に居りましたる子息新左衛門は、大いに驚ろき、新是れはしたり父上、如何なされました、物に狂はせ玉ふが、何んで此の場へ弓矢などを、如何なされました、物に狂す、我が病の疲れたるに乗じ、狐狸の類來たつて、廿五菩薩、或ひは三尊の彌陀と化して我れを惑はすものと覺へたり、早やく弓矢を三尊の彌陀と化して我れを惑はすものと覺へたり、新十郎は困りきつて控へてく、弓矢を……」とあつたる事ゆへ、新十郎は困りきつて控へて

地獄太夫

居ります、時々斯く熱にうかされてお在でになりましたが、其の度毎に餘程身体もお疲れになると見へ、今殆んど眠むるが如く既に往生を爲されんとする、一同の者は稱名などを唱へて居る、又もスツクリ起き上つた新左衛門、新御出迎へ申さぬか、禪師がお出でになつたぞ、大徳寺の一体大禪師がお出でになつたぞ、悴早やくお出迎へ申しあげぬか、とハツキリと云ひました、偕てはと思ひましたが、各々半信半疑でウロウロして居る所へ、破れたる法衣を身に纏ひ「休新左衛門死んでは往かんぞ今一休が其處へ參つて、汝に引導を授け遣はす」と案内もなく其處へ歩つて參りられました、一休禪師、夫れと見るより一同の者も驚いて居る、禪師のお出でを知つた新左衛門も剛いが、最早や鬼藉に入るの場合を御存じと見へる一休禪師に、皆の者は敬服いたしました、新左衛門は三拜をいたして居ります、一休禪師は「休新左久し振りぢやな、悟道堅固の其の方も、定業

地獄太夫

限りあり、玉の緒の今切れんとする時、能く心を鎮められよ、新お久し振りぢやないます、禪師お出で下され、新左衛門喜ばしう存じます、其のあかつきに死ぬるなり、今日夕は秋風ぞふく、と新左衛門は聲を張り上げて仰しやいました「休ア、新左衛門能く辭世を詠んだな、流石は學識あり、禪學に心を入れ、修業した其の方、能く詠んだ」と禪師は持つたる如意を持つて、新左衛門の背中をトンと二つお打ちあそばし「休自業自得、只今より彌陀の淨土へ案内して遣はす」と禪師のお言葉の切れざるうちに、新左衛門は「一人来て一人で歸る我れなれば、道教へんといふぞおかしき」「休アハ、ハ、ハ、新左衛門思ひ出したか、まだ健かぢやな、一人来て一人で行くも迷ひなり、來たらす去らぬ道を教へん」

そらでございませうから何うぞ此方へ使然らば御免と兩名客
室へ通つて待つて居りましたか何日まで経つても禪師はお立
ち出でがなさい使御坊禪師は未だに御對面下されませぬか
左様でございませう只今下草へ水を沃いて居られますから
ウ直きに御對面あらせられようと思ひます使そんな事は後で
もゆつくりと出来る事假りにも拙者等は將軍家の御命令によ
つて罷り越したる者其の拙者への御無禮は取りも直さず將軍
家へ御無禮に當りませうかと思はれるよつて早々是れへ御出
で御對面下さる様御取り次ぎが願ひたい昔ハイ畏まりました
た、左様に申し上げることございませうと昔龍は再びお庭に出
て参りまして昔禪師様御使者が大層怒つて居りますお早
や、お出で程を願ひます一休フム……何んだつて……昔將
軍家の御命令によつて参つたのに、病氣か何にかならば仕方
無いが庭歩きをして居ながら對面をしないのは何う云ふ譯だ

と之れを聞いて新左衛門は新ハ、ッ御引導有難く御受け仕ま
つりませうと其の後は笑ふが如く六十八歳にして、冥途黄泉
の旅立ちをなされました此の時側に居合はす人々も、一休禪
師の引導と云ひ、新左衛門の覺悟と云ひ、賞めざる者はござい
ません、扱て一休程のお方でも親友と思召した蟻川新左衛門病
死をいたしましたる後は、何んもなくお心も勝れず、眞珠庵に
於いて佛事供養などを遊ばし、友を失なつた當座は淋しいもの
でございませう、或る日の事禪師はお庭先へお立ち出でに相な
り、頻りに下草へ水を沃いて居られます、處へ弟子の哲龍罷
り出で兩手を支へ、哲お師匠様、申し上げます一休禪師は振
り向かれて一休何んぢや、哲只今將軍家より御使者が兩名参り
お師匠様に拜顔をいたしたいと申し居ります、如何取り
計らひませうか一休ア、左様か、其處等邊へ通して置け、今對
面をするから哲龍は早速引き返して、哲只今御對面をなさる

一休アツハ、左様か、宜しく云つて呉れ、今庭の池に居る
金魚、鯉、鱒、の、子、な、ど、に、餌、を、遣、つ、て、居、る、之、れ、は、口、を、利、か、な
い、も、の、で、腹、が、減、つ、て、は、可、愛、想、で、あ、る、か、ら、之、れ、を、皆、遣、つ、て、仕
舞、つ、て、か、ら、逢、ふ、と、然、う、申、し、て、呉、れ、若、し、急、の、用、で、も、あ、る、な、ら
ば、庭、へ、廻、は、れ、と、申、せ、ッ、哲、ヘ、エ、ッ、と、再、び、引、き、返、し、て、哲、御、使
者、へ、申、し、入、れ、ま、す、使、ハ、ッ、哲、一、休、禪、師、の、お、答、へ、と、し、て、面、會、は
仕、度、い、が、今、池、の、中、に、居、る、金、魚、や、鯉、鱒、の、子、な、ど、に、餌、を、遣
つ、て、居、る、夫、れ、故、師、を、遣、つ、て、仕、舞、つ、て、か、ら、面、會、す、も、若、し、も、た
つ、て、至、急、面、會、し、た、い、の、な、ら、ば、庭、先、き、へ、廻、は、つ、て、來、て、貰、ひ
たい、と、の、事、如、何、な、さ、れ、ま、す、か、使、無、禮、だ、な、何、う、も、使、さ、れ、ば、此、處
に、待、つ、て、居、る、事、を、言、は、れ、御、同、役、如、何、い、た、さ、う、使、さ、れ、ば、此、處
左、様、い、た、そ、う、か、然、ら、ば、庭、前、へ、参、つ、て、面、會、し、た、さ、う、で、は、な、い、か、使、
れ、は、何、う、も、御、大、儀、様、で、ご、さ、い、ま、す、と、其、處、で、哲、龍、は、兩、人、を、應、

れ、ま、し、て、御、庭、前、へ、廻、は、る、と、庭、前、に、大、き、な、池、が、あ、り、ま、す、
夫、れ、ま、で、來、る、と、池、の、側、に、大、き、な、石、が、あ、る、禪、師、は、其、の、石、の、上、に
腰、を、か、け、て、前、に、在、る、所、の、杖、の、中、か、ら、燒、鉄、を、取、り、出、し、池、の、中
へ、類、が、投、げ、込、ん、で、居、ら、れ、た、が、一、休、イ、ヤ、是、れ、は、折、角、各、々
お、出、で、に、な、り、し、に、暫、ら、く、御、待、た、せ、申、じ、て、誠、に、相、濟、ま、ん、今、丁
度、餌、を、遣、り、掛、け、て、居、る、の、で、何、う、も、旨、が、つ、て、喰、べ、て、居、る、や、う、な
や、か、ら、何、分、是、れ、を、遣、つ、て、仕、舞、は、な、い、と、何、か、と、又、氣、が、か、り、で
な、な、シ、テ、用、事、と、云、ふ、の、は、何、ん、で、ご、さ、る、な、兩、人、の、使、者、は、如、何
に、も、無、禮、な、坊、主、だ、と、思、つ、た、が、相、手、が、何、に、し、ろ、一、休、禪、師、で、す、か
ら、仕、方、が、な、い、怒、る、譯、に、も、往、か、す、使、ハ、ッ、恐、れ、入、り、ま、す、將、軍
家、に、は、此、の、度、禪、師、久、々、に、て、御、歸、京、の、由、を、聞、し、め、さ、れ、明、日、は、久
し、振、り、に、て、茶、を、參、ら、せ、た、い、か、ら、晴、雨、に、拘、は、ら、ず、是、非、も、登、壇
あ、ら、ん、事、を、仰、せ、ら、れ、ま、し、て、ご、さ、い、ま、す、一、休、大、將、軍、家、が、一、休、に
茶、を、飲、ま、せ、る、か、ら、來、い、と、仰、せ、ら、る、の、か、使、左、様、で、ご、さ、い、ま、す

地獄太夫

「休」委細承知仕つた、然らば明日は將軍家のお側にて何にか茶道の話しでもいたそうかな、使何に分にもお願ひ申します「休」ハ、アお身等はたゞ夫れ丈の事でお出でか、何うもお氣の毒であつたな、茶でも参らせたいけれども、庭先きで然う云ふ事も出来ず、華々とお前方も焼鉄でも食べないかな、使「へエ私しは焼鉄は食べません「休」ア、嫌ひかな、夫りア悪い事を申した、何うだ其方も一つ手と足を動かして呉れないか」人を龜の子かなんかと思つて居る、二人は遣々の体で逃げ歸つた、哲龍は之れを聞いて「哲」お師匠様、明日は東山殿に御登營に相成りまするか「休」ア、往つて来るよ、將軍が茶を飲ませるさうだから、つ御馳走になつて来やう」其處で其の日は何んのお話しもなく其翌日に相成りますと「休」禪師は、將軍のお側へ出るのだから、居でかと思ひますと、矢張り例の通りのお召物に麻の法衣、少

地獄太夫

しも外形などを飾るお方ではございませぬ、三衣袋を首にかけ、白の手甲脚絆、旅行をするのも將軍家のお側へ出るのも同じ事、杖を曳いて禪師は御登營いたされしました、然る所大手へ参りますると、眞珠庵「休」禪師御登營と云ふ觸れでございませぬ、案内の者に連れられて一ト間へ通る、稍あつて正面の襖を開き、足利義持公は悠然としてお着座に相なり、後ろの方に御刀を守り、護し、左右には細川山名を始めとし、足利家の重臣、綺羅星の如く居流れて居ります、此の時義持公は「義」禪師久々であるな、「休」是れは「休」將軍家には何日もながら御機嫌はしく大慶に存じます、又今日は拙僧へお茶を下さるとの事、有難く心得罷り出でました、義「ウム聞けば其方はナカク」の茶人と承はるか、何にか茶道の心得にもなる話しがあらば聞かせて呉れまいか「休」ハイ左様で……拙僧も茶を好み、随分古物を集めました、將軍家などは近來大いに種々の古器を御取り寄せに相なる

由、一つ拜見の程が願ひ度う存じます。然らば案内いたさん」と禪師一人を茶室へ案内をする。一客一亭のお茶でござります。處が義持公一休禪師を驚ろかして遣らうと云ふ思召して、無類の珍物を一つのお座敷に並び切れない程並べ立てました。義「何うちやな、禪師一休左様でござります。見うけますところ、アハ、ハ、詰まらんものばかりでござります。義「ナニ是れは何の位い年敷の経過たものと思ふ。一休左様です。先づ四五年位いな物と思はれます。義「夫れは禪師、目遠ひであらうかな。是れは何れも千年より近くの物はな。一休「ア然う古いのが宜ければ如何でござります。清水観世音の側にある石地藏な。義「其の方は往かん。茶道に石の地蔵が何うなるものか。一休「總じて茶といふものは欠けたる茶碗に茶を點てましても、是れが即ち風流にして、御身分柄故古物をお集めなさるは宜しいが、何うせお集めなさるなれば、天下

一品此の上もないと云ふ品を、お集めなされたら如何でござります。義「イヤ是れにあらのは、何れも天下一品とでも申す様な品ばかりや。然し只今禪師の言葉では外に未だ一品とでも云ふ様な品がある。云はれるが、禪師は所持いたすのが、或ひは何れにでも在ると云はれる。一休「イヤ左様……拙僧が所持して居ります。義「ア、禪師が所持いたすとか、一休「ハッ手前の自慢にいたします。小松院より先年拜領いたしました。天智天皇月見の慈、老子杖、周光坊の茶碗、先づ是れ等の品は天下無二の品でござります。義「ウ、天智天皇月見の慈、老子の杖、周光坊の茶碗を所持いたすと申すか。一休「イヤ……義「それは珍らしいものを禪師は所持いたすな、手も二通り見たと思ふが、何うちや見せては呉れまいか。一休「夫れはイヤ易い事ではござります。然し御覽に入れなれば御好みと有りますれば是れ等の品は献上いたしませう。義「夫れでは禪師、其れ等天下

地獄太夫

無二の品を献上すると云はれるか。一休「左様でございます。然し拙僧の如き賤しい貧乏人より足利將軍家へ献上するとは、チト出過ぎた様に考へられますれば、唯だホンの聊かの金で御買ひ上げの程が願ひ度う存じます。義「イヤ夫れは尙々易い事、早速に取扱つて呉りやれ。一休「ハイ明日にも品物は御渡しいたします、夫れは金子と引替に願ひたい。義「フム、して其れは何の位いの金高であるかな。一休「ハッ、只今も申しあげます通り、一休「ならば献上をする位いの品で、夫れを賣拂ひますのですから、誠に聊かです。義「何の位いと云はれるか。一休「三品三千兩……誠に聊かです。義「ナニ三千兩とな……一休「ハイ左様で……と濟ました顔をして居る、將軍家も驚いたが、側に居合はした仁木、細川、山名等の人も皆々「禪師も此の頃は大きいに商法氣が出たわい、聊か云ふのが三千兩……何うも三千兩もする寶物が禪師の御手許に在るとは思へない。イヤ、一休「然うでないかも。

地獄太夫

知れぬ、天智天皇月見の筵、若子の杖、周光坊の茶碗など、一休「珍品、小松院から拜領なされたと云ふのだから……と一休「の者取り、然らば禪師明日使者に三千兩の金子を持参いたさせるに、よつて、其の者へ件品の品々を渡して呉れる様に……一休「ハイ承知いたしました、天下の一品でございます。件品の品々をお渡し申します、然し何しろ天下の一品でございます。件品の品々をお渡し申します、……義「イヤ其の邊は能く心得て居る。後には種々御馳走を頂戴して、禪師は悠々とお歸りになつた。足利義持公は大いにお喜びになりまして、翌日早速三千兩の金子に添わて、受取りの役人二十餘名を眞珠庵一休禪師の許へ遣はさると云ふ、ナア是れから如何に相なりまするか、一寸休息。

第十二席

地獄未

借て其の當時天下は泰平と云ふにあらねども、諸人競ふて茶事を好むと云ふ有様、従がつて古物が大分流行いたしまするが、古物と云へば何れも安い物はございませぬ、將軍義持公も非常に斯道に御熱心で、種々天下の珍寶古器を金銀に飽かしてお集めになる、其處で、休禪師が小松院から拜領になつたる天智天皇の御見の趣、老子の杖、周光坊の茶碗を金子三千兩にて買拂ふ約束をなされて、大いに喜び遊ばし、翌日早速仁木左門次郎安達三右衛門を頭領に、二十五人の家來を受取、大徳寺の門内真珠命を帯びて仁木左門次郎へ安達三右衛門等は出で来た哲龍の玄關に差しかかり、頼まう、哲龍は仁木等を出で来た哲龍の何處からお越しでございますか、仁木等は將軍家より昨日御約束の品々を受け取りに参つた者、禪師御在座なれば、何うか此の由お傳へ下されたい、哲龍は相變らば庭にお入り居る奥の間に來て見れば、此方禪師は相變らば庭にお入り居る

地獄未

でなまる哲龍は、哲師匠様、只今御玄關に將軍家より御使者が見えまして、昨日御約束の品々を受取りに参つたを申し傳へて呉れどの事でございますか、二休が参つたが、取つて置け、哲へ、何ぞでございますか、二休が参つたが、取つて置け、拙僧も小遣ひ錢が無いから大いに困つて居る所、三千兩あれば、茶葉や芋は十分買へるだらう、アツパ、哲へ、居るもので、哲龍は驚いて居る、三千兩芋や茶葉を買はれて堪まるもので、はありませぬ、哲では何んと申しませうか、二休が、今拙僧が逢つて道る、待たして置け、哲ハツ、と答へて哲龍は玄關へ出て來たり、哲只今直ぐに御面會致します、何うかお通りなすつて、師匠様、將軍家より此度當山へ三千兩下される、云ふのでございませぬ、二休何うして答へたから三千兩はさて置き、一兩の金子も六列敷い、哲左様でございますか、其の中に禪師は扮装を改め

地獄太夫

て出るなど云ふ事はない、鼠の着物に丸筋をしめて、泥だらけの手の儘此方へ歩つて参られて、一休「イヤ大きに御苦勞〜」
 兩人は飛び退つて頭を下げ、仁「是れは〜禪師様には何日もなから御壯健で大慶に存じ奉ります、就きましては今日兩人三千兩の幸領をして参りました、何にか禪師様よりお買ひ取りに相成つた三品檢めて持参いたせとの事でございませう、一休「ア、然うかい、何んだつけな夫れは〜」
 仁「ハイ拙者承はりましたるは天智天皇月見の薙、老子の杖〜」
 一休「ア、左様〜周光坊の茶碗か、然うだつたな、仁「左様でございませう、一休「時に金子は持つて参つたらうな、仁「ハイ確かに〜」と云ひながら家來に申し付け三兩の金子を禪師の前に置いた、一休「哲龍〜」
 哲「何にか御用事で〜」
 一休「ウム此の三千兩の金子能く檢めて彼方へ持ち行け」と是れから哲龍は外のお弟子共と三千兩の金子を奥の間へ運びました、一休「さて御使者の方々、三千兩の金子は一休「確

地獄太夫

かに受取つた、今其の品々を出して遣るから、能く檢めて持つて行きなさい〜」
 コリヤ〜
 哲龍「ハイ、一休「月見の薙を此處へ持つて來なされ、哲「見月の薙〜」
 禪師様、夫れは何處に御在います、一休「ハテさて、何處に在るとは怪しからん、眞珠庵に居て、月見の薙を知らんとは不都合な話し、哲「でもございませうが、一休「庵の裏に掛つて居るだらう、あの薙を持つて來い、哲「恐れ入りしましたが〜」
 一休「あの薙を何うも〜」
 一休「あれを持つて呉れば宜いのぢや、哲「ヘエ〜」
 一休「是れが天智天皇月見の薙ですと云へば夫れで宜いのぢや、物へは餘り深く考へると大きに困る事がある、是れを月見の薙と思へば夫れで宜しい、哲「ヘエ〜」
 夫れから跡は何んで〜」
 一休「跡は其處らに何にかあるだらう〜」
 一休「ウム、垣根の竹を一本、泥の附いた儘で宜しいから〜」
 哲「何の茶碗と〜」
 一休「周光坊の茶碗は、何處か其の邊に猫の糞が

あるだらう、那れを持つて来なさい、那れで澤山ぢや、
 ……と若龍は言はれる儘に夫れ等を禪師の前へ持つて来
 禪師は「休」コト、御使者、大切なる品ぢやによつて能く檢
 め、大事に持つて歸られよ、と云はれて、仁木左門次郎、安達
 三右衛門の兩人は之れを眺めて驚ろいた、仁木は恐れ入りました
 たが禪師様、お戯れも時に寄ります、斯様なものを持つて拙者
 共は歸る譯にも相成りません、何うぞ眞實の品をお出しなされ
 て下さりませ、休、眞實のものもない、夫れが即ち只今申した
 品ぢや、夫れを持つて歸れば宜いのぢや、今拙僧が後から行つ
 て將軍家に目通りをして、月見の薙、老子の杖の謂れを殘らす
 御前に於いて申し入れるによつて、其方等は是れ等を釣臺へ乗
 せて、上へ油籠を掛けて氣を附けて大事に持つて行きなさい、
 と云はれて益々兩人は驚ろいた、百兩の型に編笠一つと申すこと
 もありませんが、之れは夫れよりも尙ほ酷い事で、當時ならば刑

法第何條、依偽取財、か何んとか申す所でございませう、使者
 の人々等も禪師が跡から来る、と云ふものですから仕方がない、
 仁木の安達の兩人に於いても釣臺を、右の裏口の掛薙、當日に
 垣根の竹、夫れを乗せて御殿を差して歸つて行、處が當日に
 於いては、諸侯一同、老子の杖、門周光坊の茶碗、云ふ珍品は
 傾の天智天皇、月見の薙、老子の杖、門周光坊の茶碗、云ふ珍品は
 拜見いたさんぞ、義持公始め一同も御使者の歸るのを今か
 と待つて居る、處へ御使者が歸つて来た、と云ふ報知、義持公も
 小松院は、義使者の者が歸つたら早速是れへ申せ、
 思召し、義使者の者が歸つたら早速是れへ申せ、
 釣臺へ是れへ持つて来なさい、珍らしき品であるか、如何
 な物かと將軍家はお待ち兼ねでございませう、御上段の此方へ
 て油籠をお拂ひ除けになる、と云ふ、珍らしき品であるか、如何

ますから「義」コリヤ何んの匂いなるか」と仰せられた、御使者
に参つた仁木左門次郎、安達三右衛門の兩人は、何んとお答へ
申して宜いやら解りませんから兩人「ハッ」と云つて其の儘平伏
して仕舞つた、居合はす諸大名の方々も何んなものであらうと
ヒヨイツと見て驚いた、何にしる、猫の腕が乗つかつて居る
夫れに垣根の竹に破れた薙、一枚、皆々呆氣に取られ、黙つて控
へて居る、將軍家は此の様を御覽に相成つて「如何に天智天
皇月見の薙、老子の杖、周光坊の茶碗は何處に在る、仁へイ夫
れが則ち此の品で……」義「黙れ左門次郎、汝何んの爲めに使者
に参つた」と將軍家は烈火の如く御憤怒遊ばした、仁「ハッ」恐れ
入り申するが、只今禪師お出でになりまして、巨細に事柄をお
話し申し上げます、拙者に於いても斯様なる品々受取るまい
とは心得ました、何分にも禪師様の御見識でございまして、
是れで宜しい持つて歸れと仰しやいましてから……」義「ナニッ

是れで宜しいと、何にか是れで宜しいのか」と將軍家は益々御
立腹に相なり、今にも御使者の者等を手討ちに遊ばされんと爲
さる所へ、家來の一人、遙かに兩手を支へ「家、只今眞珠庵一休
禪師御登りでございます、入れ違ひに一休禪師、悠々と御前近く
答へて御前を退ると、義「ウム、是れへと申せ、家「ハッ」と
お進みに相成り「休、昨日御約束申し上げました品々、今
日只今納め奉りました、如何でございませるか、御意に叶ひま
したるか、彼の天智天皇月見の薙、老子の……」と云ふより義
持公は癩瘵ムラツと「義「黙れ、其の方は發狂いたしたと
見ねるな、月見の薙など云つて斯様なる破れ薙を持参いたし
たが、何に周光坊の茶碗ぢや、一休「イヤ、發狂も仕りませんが
周光坊の茶碗も暫らくの間猫の飯椀になつて居りました品で
老子の杖も垣根の錆竹で事足りて居ります、顔の色を變へたる事
將軍家の御立腹は一通ではございません、顔の色を變へたる事

にいたしまして、義餘人なれば捨て置くにあらねども、其の方
も尊とさき御方に由縁ある者ゆゑ、今日は一命を助け遣はす、重
ねて登營する事は相ならん」と非常に御立腹遊ばし、其の儘席
を蹴つて今しも奥へ遁入られんとなされた其の時、一休禪師は
席を御進み出でに相なり、一休一寸暫らくお待ち下されまし、御
喜びと思ひきや、御怒りの跡を拜し、此の一休も甚だ當惑をい
たす、未だ見た事もございませぬ、老子の杖とてもあるものやら
で、ないものやら、又周光坊の茶碗などは聞いた事もない、上は
茶器古物にお遊り遊ばし、古物を悉く愛すると云ふ處から、世
には奸物の徒が多きが爲めに様々の造り事をいたし、是れは老
子の杖でござる、是れは周光坊の茶碗だなど、申して、人々を
欺むき、上も真大なる金子を抛つて要らざる物をお求めに相な
り、其上、足利將軍家は眼ありと雖も節穴同様、下々に於い

て賤作いたしたる物を喜んで御手許にお置になるなど、申し居
るに、上萬金を投じて夫れ等の品々をお買ひあげになり、何の
お役に立つべきか、總じて茶事と申しますものは、貴賤貧富
を問はず、又其の時に用ひます茶器は、夫れこそ有り合はし
たる皿小鉢にても相濟みまする、然るに夫れ等の古物が何んの
お役に立ちまするか承知仕り度く、先刻頂戴いたしたる三千兩
の金子は斯く申す一休使用いたせしにはあらず、近頃山城の國
大いに凶作の場所多く、夫れが爲め農民共大きに苦しむ、然れ
ば今にも一揆でも起さんとする舉動の相見へましたるによつて
此の度將軍家より深き思召しを以つて、金子三千兩農民共によつて
し置かれると沙汰いたし、先刻庄屋共を呼び出し、三千兩の金
子を遣はしました、よつて何れも喜び勇んで歸り、一度は一揆
でもいたさんとしたる者共も、お上の徳を喜び、其の仁政に懐
み、何れも鎮まつて家に歸りしとの事、三千兩の金子を以つて

善根を買ひましたる様なもの、陰徳は古物を以つて購ひまする
 譯には相なりません、將軍家にも御代々の先祖、子孫等の事を
 思召し、御賢慮あつて然るべくと存じまする、夫れども此の一
 休の爲したる事、御心に叶はずとあれば御遠慮には及ばず、此
 の場に於いて御手討ちになされませ、生きたる甲斐なき一休、最
 早八十餘歳の長壽を保ち居りますれば、何時落命いたすと雖ど
 も、惜しからず恨みと思ふ事は少しもございません、立板に水
 を流すが如く滔々と述べ立てた、並び居る諸大名も感心なされ
 成る程、三千兩の金子を禪師が詐取した様では甚だ相濟まん事
 然うではなく、御領分山城國が大分凶作が續いて、今にも一揆
 でも起そうと云ふ處を、禪師はお旅びをなされて御承知になり
 三千兩の金子を以つて農民共を宥めたのだと聞いて、將軍家を
 始めとし、仁木、細川、山名等の諸大名も、何れも禪師の思召
 しに恐れ入りました、將軍家は其の時、義然らば其の金子を以

つて、今日難澁いたして居る農民共を助け遣はしたとあるか、
 一休「御意にございます、義ア、能くいたして呉れた、禪師、此
 の上どもに何にか政治上に不都合なる事でもあつたならば、遠
 慮なく沙汰いたして呉れよ」といふ町噂に仰せられた一休「ハ、
 ア、恐れ入り奉ります、夫れでこそ聰明英智の公、お家は萬
 々代まで……持参いたしましたる周光坊の茶碗は……義「夫れ
 はモウ入用はない、一休「デハございまするが、切めて老子の杖だ
 けでも……」と何處までも馬鹿にして居る、禪師は其の儘にし
 て御歸庵に相なりました、將軍は一休禪師が云ふ一揆などは
 全くの事であるか、夫れども禪師の策であるかと思召し、段々
 役人を地方に遣はし、夫れく取り調べて見ますと、存外の
 一揆になりかけ様といたしたる所、三千兩と云ふ金子を遣はし
 たるによつて、百姓共も大きに喜び、遂に大なる騒ぎに至らず
 事穩便に落着いたしたのが知れましたから、將軍も實に禪師の

思召しを喜んで居られました、扱て一休禪師も蜷川新左衛門に
 は死に別れ、牡丹花宵柏は其の後東國路へ旅び立ちをいたしま
 して、別に話し相手もなく、淋しく樂隠居を遊ばされてお出で
 になる、元來此のお方は大層小供をお愛し遊ばします、彼の布
 袋和尚は唐子を集めて心の樂しみとなされたそうでございます
 が、小供と云ふ者は前に無心無邪氣なもので、却つて面白い、
 禪師も五六人の子供のお弟子を相手にして、一休禪師御自身で
 茶を點て、召し上つて居る處へ、お弟子の周海が出て参り、周
 申しあげます「一休何んぢやな、周只今御玄關へ泉州堺の鍵屋か
 ら使者が参りました、禪師様には是非お目にかかりたいと申し
 居ります、一休「フ、ム堺の鍵屋から使者が参つたと申すのか、此
 方へと申せ、周「ハッ」と答へて立ち上がつたが、間もなく一人
 の男を連れて遁入つて参りました、男は遙かに兩手を支かへ、
 男「禪師様で在つしやいまするか、私しは鍵屋の若者でございます

第十三席

ます、先達より太夫病氣で、此の頃では最早や六ヶ敷いと申す
 位い、それゆゑ、住吉の小菜庵に上りましたが、最う彼處には
 御出でなく、此の頃承はりますれば、此方にお出での由、實は
 お迎ひに出ましたのでございませう、これは野晒の親分から、是
 れは小西屋の若旦那様からの御手紙でございませう」と二本の書
 面を差し出した、何れも御出でを願ふとの文書「一休ア、ヨシヨ
 シ直ぐ参らう」と急ぎ旅仕度をいたして、留守を頼み、彼の若
 者と同道して泉州堺乳守の遊廓、鍵屋長兵衛方に乗り込み、彼
 の有名なる地獄太夫に御引導をお渡しになる云ふ講談、一寸
 一息吐きまして、次席に於いて申しあげます……。

お話し一寸後へ戻りまするが、其の後泉州堺の遊廓、鍵屋長兵
 衛方抱え、彼の有名なる地獄太夫は、禪師のお蔭で兄妹不思議

にも名乗り合ふ事も出来たの喜び、大いに禪師のお徳を慕ひ
 禪師お歸庵の時に戴いたる拂子を以つて七日間座禪をしたが、
 八日目に至り遂に悟る所があると思ひ、小西屋の子息竹次郎
 に向ひ、あなたに立派な大家の若旦那、一心だけは貴郎様の妻に
 なりまするが、妾の如き卑しき穢れたる者は、何うを妻に持
 つなど云ふ事は止めて下さると頼みましたから、竹次郎も以
 前とは變り種々尋とき禪師様の御説教を聞いて、少しは悟る所
 があつたと見わまして、快よく承諾し、其の後は兄弟同様深切
 を盡して居りました、地獄太夫は禪師のお言葉の「女郎は五尺
 の躰を賣つて、一切衆生の煩惱を安す」と云ふ事に感心して、
 是れまでの頑固でなく、多く来る客人に肌を觸れ、並女郎と同
 じ如くに勤めました、サア其の評判が遠近に傳はり、一つには
 地獄太夫の往來は彼の大徳寺一休禪師がお書きなされた云ふ
 ので、我れもくゞと通ひます、其の全盛は實に比類なき程でこ

ざいましたが、然るに病魔は時を嫌はず、地獄太夫は不圖した
 病が原因となり、何卒禪師様に生前に御引導に預り度いと、若
 者を住吉小茶庵に尋ねさせましたが、最早旅立ちなされし後、
 近頃は太徳寺真珠庵にお歸庵になつたと聞いて、早速に使ひを
 遣つて兄悟助、竹次郎共々お出でを願つたのである、此方一休
 禪師は彼の健屋の若い者に案内せられて、漸やくの事に乳守の
 遊廓健屋長兵衛方に歩つて参られますると、平生は賑はしい健
 屋の店も、此家の娼頭の地獄太夫が大病と云ふので、何んとな
 く家中も濡り勝ち、禪師はズツとお這入りになると、主人長兵
 衛始め小西屋の竹次郎、悟助等もお出迎ひ申しあげ、長是れは
 禪師様には能ふこそ、サアお上り下されませ」と悟助は立
 つて草鞋の紐を解いて居る内に、自から先きに立つて禪師を地獄
 りました、其處で御足を洗ひ、自から先きに立つて禪師を地獄

太夫の部屋へと御案内申しあげた、流石玲瓏玉の如く、人目を驚かす程美しき地獄太夫も永の病に閉ぢ籠められ、今は瘦せ衰へて骨と皮ばかり、實に見る影もなき其の有様、禪師は一目見るとより「休」オ、太夫か、地「ア、禪師様、能くお入来下さいまし、最早や到底現世ではお顔を拜します事はあるまいと思ふ、て居りましたに、能うこそ……有難うございます、一休「イヤ、ア、氣を確かに持たつしやれ、久し振りで會ひましたのう、地「ハイ、何かから先に御禮申しあげてよいやら……圖らず兄に巡り會ひ名乗り合ふ事の出来ましたのも之れ皆禪師のお蔭、一休「イヤ、顔を見せて下され、地「ハイ、有難うはございます、此度は、は此れが永さお別れの様に思はれます、一休「ナニ馬鹿な、地「付いては過日暗の夜のお歌を有難うお禮申しあげます、一休「ウム、解つたかな、地「ハイ、松山や、その琴を此處へ」と禿に吩咐け

て、今にも死にかゝつて居ります病人が、起き上がつて瓜をさし、松山と火車が昇き参りました、琴に憑り、自から調子を合はせ掻き鳴らします、禿の松山は胡弓を携さへ、火車が三味線を取つて、先づ禪師の方に一體し、合奏を相始めました、地獄太夫は細やかなる聲にて、地「有漏地より室に養ふ早咲の、假りなる色の墓なさは、間眼まで見る夢なれや、寝仙の手枕酔ひ来て見れば花もなし、花をば春の空にもつ、雪や氷の下紐を、解くれば同じ谷川の、水に迷ひの月の影、有無の二つを離れては、心にかゝる雲もなく、來たらす去らす相々の、飽かぬ別れは、鐘と鳥、恨むる事を鳴く空の、何にか残りて、墨畫に書きし松の音も書かれぬ陸事は、教への外の傳へにて、墨畫に書きし松の音暗の夜に啼かぬ鳥の聲聞けば、外の傳へにて、墨畫に書きし松の音終るや、其の儘琴の上、涙をこぼされた、暗の夜に啼かぬ鳥と並び居る人々もホロリと涙をこぼされた、暗の夜に啼かぬ鳥と

云ふは、詰まり経巻或ひは書物を指して云ふた事で、生れぬ先
 きの父と云ふは、則ち佛法であらば釋尊を始めその祖師の事で
 ございます、物を言はない書物を読んで、その道が明るくなり
 ますれば、或ひは儒者が孔子を慕ひ、佛敎家が釋迦を尊とび慕
 ひまするのは、即ち生れぬ先の父の慕しき所であり、今
 年十九才、年端も往かぬ地獄太夫ではあるが、一を聞いて十を
 悟り、十を聞いて百を知る、實に天晴れなりと禪師も大層御賞
 美になり、ミツシリ御敎化をなすつたから、地獄太夫は忽ちに
 して悟道徹底に達し、此のお歌の意味を十分に悟られましたの
 で、地獄太夫も今は迷ひの雲も晴れ、誠に結構な往生を遂げま
 した、其處で死骸は生前鐵屋長兵衛が太夫の爲めに大層金子を
 儲けて居りますから、立派やかな葬式を營なまふと云ふ、小
 西屋竹次郎も出金を仕度いと云ふのを禪師はお聞きなされて、
 一休「イヤ、一寸待たつしや、其の志しは結構なれど、此處

に斯うして兄悟助も居る事なれば……悟「イヤ、禪師様、私し等
 兄妹は二人共誠に變つた人間、夫れに今までは兄妹とも禪師様
 のお弟子、何卒禪師様の宜しき様に御願ひ申します、一休「夫れで
 は悟助の云ふ通り、拙僧に任して果れりや此の死骸は生前遺言
 の如く、そんな事をしては當人の爲めにもなるまいから、是れ
 は早々死骸を捨て、仕舞つた方が宜い」居合はす人々も驚きま
 した、禪師のお言葉、遂に地獄太夫の死骸は經帷子、桶に入
 れて禪師と悟助と兩人で差し擔ひ、野邊へ持つて参り、棺桶が
 ら引き出して草原へ死骸を捨て、一寸往來に塵芥があつても直に查公が
 變な騒ぎでございます、一休「一寸往來に塵芥があつても直に查公が
 参つて八釜敷云ふ位、人間の死骸でも捨て、置けば夫れは夫
 れは大變な騒ぎ、其の當時は別にそんな嚴しい御法もございま
 せん、と見なしまして、往來の人はアレ地獄太夫が捨て、ある、ア
 、綺麗なものぢや、美しいものぢやと、多くの見物人が寄つて

築かつて見て居りましたが、最う二三日も経過すると、鳥が
 啄く野犬が足を噛り始め、それ／＼腐敗して参ります。うち
 に、皮破れ肉取れ、七日／＼の忌日も過ぎ、七七四十九日間雨
 に曝され風に吹かれ、皮肉は取れて骨ばかり残つて居る。處が
 不思議にも鎖で繋いだやうに手も足も満足に骨が繋がつて居た
 之れが一つの不思議、禪師は其の後は小西屋利兵衛の宅や、野
 晒悟助の宅に遊んで居られました。今日は地獄の四十九日だ
 と云ふので、悟助を連れて歩つてお出でになり、地獄太夫の死
 骸を見て「休ア、地獄は能く悟つたものぢやな、此の醜ひ姿を
 見せて色に迷ふ者を戒しめ様と云ふ彼女の心、頗る佛法の奥
 儀を悟つたもの、如何にも感服した、是れはナカ／＼凡人では
 ない、手も足も骨がチャンと鎖で繋いだやうになつて居る、之
 れを鎖骨と云ふ、女ながら天晴な者である」と其處で骨を奇
 麗に洗ひ清め、元の棺桶へ入れ、之れを持ち歸り、長兵衛被起

となつてイト立派やかな葬式を営みました。然れば今以つて泉
 州堺に女郎塚といつて古蹟を残しましたのは此の事でございます
 す、始め一休禪師が地獄太夫の死骸を野に捨てると仰しやるの
 を聞いて、何んば大徳寺の禪師様ちやとて餘り憐いなされ方だ
 と云つたが、其の後地獄太夫の居間を片付けると、一首の辭世
 が出た、
 我死なば焼くな埋むな野に捨てよ
 瘦せたる犬の腹を肥さむ
 實に悟つたもので、之れを知つて死骸を捨てると仰しやつた一
 休禪師様は剛い者だと感心し、衆人は地獄太夫の墓へ參詣をし
 て、感心な者ちやと賞めて居りました、此方は禪師、小西屋利
 兵衛宅に御在でになると、山城國綴喜郡新村の名主から、豫て
 新築中であつた、彼の瑞龍山妙勝寺内酬恩庵が立派に出来上
 つたら、是非とも御越しが願ひ度いと云ふ書面が来た、其處で

集かつて見て居りましたが、最う二三日も経過すると、鳥が啄く野犬が足を噛り始める。それく腐敗して参ります。うち皮破れ肉取れ、七日の忌日も過ぎ、七七四十九日間雨に晒され風に吹かれ、皮肉は取れて骨ばかり残つて居る。處が不思議にも鎖で繋いだやうに手も足も満足に骨が繋がつて居た。之れが一つの不思議、禪師は其の後は小西屋利兵衛の宅や、野晒悟助の宅に遊んで居られました。今日は地獄の四十九日だと云ふので、悟助を連れて歩いてお出でになり、地獄太夫の死骸を見て一休ア、地獄は能く悟つたものぢやな、此の醜ひ姿を見せして色に迷ふ者を戒しめ機と云ふ彼女の心、願ふる佛法の奥儀を悟つたもの、如何にも感服した、是れはナカク凡人ではない、手も足も骨がチャンと鎖で繋いだやうになつて居る、之れを鎖骨と云ふ、女ながら天晴な者である」と其處で骨を奇麗に洗ひ清め、元の棺桶へ入れ、之れを持ち歸り、長兵衛發起

となつてイト立派やかな葬式を営みました。然れば今以つて泉州堺に女郎塚といつて古蹟を残しましたのは此の事でございます。す、始め一休禪師が地獄太夫の死骸を野に捨てると仰しやるのを聞いて、何んは大徳寺の禪師様ちやとて餘り惨いなされ方だと云つたが、其の後地獄太夫の居間を片付けると、一首の辭世が出た、

我死なば焼くな埋むな野に捨てよ
瘦せたる犬の眼を肥さむ

實に悟つたもので、之れを知つて死骸を捨てると仰しやつた一休禪師様は剛い者だと感心し、衆人は地獄太夫の墓へ參詣をして、感心な者ちやと賞めて居りました。此方は禪師、小西屋利兵衛宅に御在でになると、山城國綴喜郡薪村の名主から豫て新築中であつた、彼の瑞龍山妙勝寺内朝恩庵が立派に出来上がつたら、是非とも御越しが願ひ度いと云ふ書面が来た、其處で

一休禪師は「一休悟助、永らくの間厄介になつて居つたが、最早
 や幸ひ其方の妹地獄太夫の四十九日も過ぎた事なれば、又拙僧
 の死に場所が此度出来たから、其處へ参らうと思ふ。悟禪師様
 には種々御世話になり、何んとお禮を申してよいやら……一休
 イヤ、禮には及ばぬ。悟就さましては禪師様、山城へ御
 出での由、何卒私し奴をお供にお連れ下されまし。一休「ヨシ、
 然らば是れから出掛けやうかな。悟「お供をいたしまするでござ
 いませう。」と是れから施仕度をして、鍵屋長兵衛、小西屋利兵
 衛、息子の竹次郎等に別れを告げ、堺の地を出立なされやうと
 する、處へ年の頃七十ばかりになり、老婆「老ハ、貴僧
 が一休様でございまするか。」禪師は打見て物優しく「一休然うぢ
 や、拙僧は一休ぢやが、拙僧に何にか用でもあるのかな。老
 ハ、い、妾しは現世の因果者でございます、前世に何う云ふ罪を
 犯したものは存じませねと、三人子供がありました。皆死ん

で仕舞ひ、又二人の孫までも此頃揃つて亡なつて仕舞ひました
 七十からの婆アになつて便りに思ひます者もなく、此の先き何
 うせ死んだからとて、極樂へ行ける氣遣ひはなからうと思ひま
 すと、賊に「情けなく、何うか禪師様のお徳によつて、妾し
 が地獄へ行つても鬼や閻魔に責められませんか様に仕て戴き度う
 ございます。」禪師を始め一同の者も思はず笑ひを催した。一休「ハ
 、ア、何にか鬼や閻魔に責められるのが辛いから、責められな
 い様にして呉れと云ふのかな。老「ヘエ、左様でございます、此
 の世で難儀をいたしましたして、又冥土とやらへ参つてお閻魔様に
 責められましたり、赤鬼青鬼共が澤山居るそうですから、其の
 鬼共を責められ、浄破璃の鏡に照されて是れまでの罪が解り、
 針の山へ登れどか、血の池へ這入れどか云はれますと、大さ
 に難儀をいたしますから、貴僧は大層参らうお方だそうでござ
 います故、何うぞ其の難儀のないやうに、仕て下されます様

に…… 一休「ヨシ、夫れでは拙僧が閻魔様へ手紙を書いて遣らう。老有難うございます、其の手紙を持つて参りますと、鬼共に責められはいたしませぬか。一休「ウム、然うだ…… 悟助、紙を持つて来い。悟「ハッ」と悟助が差し出したる紙へ墨斗の筆を取つて、サラ／＼とッとお認めなすつたのは、造り置く罪は死ぬ程あるなれば、閻魔の帳へ附けどころなし。

閻魔大王へ

一休

一休「サア老婆、是れをお前に渡して置く故、死ぬ時にシツカリ左の手に纏んで居なさい、スルと地獄へ行つて閻魔の調へに、此の手紙を出せば責められる氣遣ひはない。老「ハイ、有難う存じます」と老婆は押し戴いた。側居た人々等も驚いた。禪師様も詰らぬ御冗談を遊ばすと、其れ位いなら、老婆に手紙を持たして遣るよりも、寧ろ先さへ電信でも知らせるか、郵便で

も出した方が便利だらうと…… 眞逆其様な事も云ひますまいが…… 其處で禪師は野晒悟助をお連れになり、泉州堺を出立、山城國瑞龍山妙勝寺酬恩庵を差してお出かけに相なり、今しも河内と山城の國境まで歩つて参りますと、丁度日の暮れ方でございまして、此處し圖らずも山城の住居へ泊り込まれまして、山賊の爲めに捕はれし娘をお助けに相なり、山賊を改心さすこと云ふ講談、一寸息入れて次席に於いて委しふ講じあげます。

第十四席

一休禪師は野晒悟助をお連れになつて、河内山城の國境或る山の裾に飛々に五六軒の農家の散在せる小村を目差して進んで行かれましたが、最早や日も暮れて人の顔も十分確と見ぬ頃でございまして、一休「悟助、悟「ハイ、一休「此の邊は山家の事ゆゑ、到底も寢道具などの用意はあるまいが、歸さへ避れば其れにて澤

地獄太夫

山、其方一つ宿を探して来て呉れまいか。悟「ハイ心得ました、では禪師は此處で暫しお待ち遊ばされて下されませ」と悟助は遙か向ふの方に見ゆる一軒の小屋の様な家を見かけて、足早やに進んで参る、禪師は道路の片側の立木の根元に腰を卸して、暮れ行く四方の景色を眺めてお在でなされた、處が此方宿に探ねに参つた悟助は、待て暮せど、モウ一刻ばかりも経過するが一向に歸つて来る様子がございませぬ、如何した事かと餘り悟助の歸りが遅いので、禪師は立上がつて悟助が行つた方を御覽になると、朦朧ながら向ふから人影が見えまするので、禪師は悟助が歸つて来たのだなと思つて居ると、件の人影が段々近寄つて参りました、禪師もテツキリ悟助に違ひないと思つて在らつしやいますから、一休「御苦勞、宿は借りられたか」と云ふ女「あなたがお連れさんかな」と云ふ女の聲「一休では悟助でなく、人違ひか」朦朧に透してキツと見ると四十五六と覺し

地獄太夫

き山家育ちの荒くれ女が、鑑みたいな衣服を着て立つて居るの、一休「其方は何誰ぢやな」と先づ尋ねた、女「妾は、アノ麓の山家に住つて居るもの、今老爺一人の處へ旅の衆が飛び込んで来て、二人連れだが宿を貸して呉れどのお言葉、老爺さんの言ふには、暫らく待つしやい、今婆が歸つて来れば相談の上返事すると云ふて居る所へ、妾しが山から歸つて来たので、如何したものだらうと老爺さんの相談、宿が無く今時分から此の山越しをする譯に往くまい、泊めて遣らつしやいと云ふて居る内に日はドツブリと暮れ、馴れぬ山家の暮れ道は、お困りだらう程に、其のお連れさんは妾しが呼んで来て進せやうと、待せて置いて迎ひに来たのだ、貴僧より外に人氣もなし、定めてお連れであらう、狭き山家の不自由を厭ひなければ、不潔しけれども一所に来さつしやい」と優しく云へど、愛嬌なき山家育ちの無作法さ、會釋もなさで禪師の姿を穴のあく程眺めて居りました

地獄太夫

一休「オ、左様か、其れは親切に辱けない、斯様な山家へ参つて一人ならず、二人まで厄介になるのは氣の毒、何うか一夜の泊り頼みます、女「夫れぢや斯うお出でなさいまし」と婆は先きになつて禪師を案内した、應て一二丁程行く道は俄かに細くなつて、追ひ／＼襦袢先き上りになる、日はズツプリと暮れて、利鎌の如き三日ばかりの月は只さへ光の薄さに、憎や折から出でし浮雲に覆はれて一寸先きは闇の眞暗さ、案内者でもなかつたら一寸も先きへ歩かれませんが、先きに立ちたる老婆は「婆道が狭くて危ふございますぞ、妾の後から確かり尾いてござれよ」と云ひつゝ又二丁程行つた頃に、道は右へ曲つて、角に小さい小屋がある、中にはボンヤリと灯が點いてございますのが、戸の隙間よりポーツと道へ射して居る、婆「此處です、前に溝があるから、氣を附けてお飛びなさいよ」と云つて、自分が先きへ飛び越して、戸をガラリ開けると、中からバツと火が射したの

地獄太夫

で、禪師は漸やく飛び越して内へ這入ると、悟助は「悟お待ち申して居りました」と庭へ飛び下りて、禪師の御足を洗つた、禪師は家内の様子を見ると、三間程ある小廣い住居で、斯かる山家に一寸珍らしい道具が置いてある、圍爐裡に小柴を燃いて居るのは、五十恰好の一癖ありげな男、大胡座をかき乍ら、禪師の姿をジロ／＼と眺めて居る、禪師は心の内に「休ハ、ア、是れが此の家の主人だな」と思つたが老婆に向ひ「休、何うも御苦勞ぢやつたな」と會釋すると彼の男は「男此の御出家さんがお連れですか、不潔しい住居なれど、二人や三人は寝られます、サアズツと此方へ上らつしやれ、一休ハツ、御主人か、今夜は厄介になりますの、主「イヤ、禮を言はれては却つて困る、美味いものはないが、マア一つ濁酒でも飲つて下さい、一休「イヤ、決してお構ひなく、拙僧達は諸國を廻つて歩くもの、不自由は決して厭ひませぬ、何うか構ふて下さるな、主「時に一寸聞きまする

地獄太夫

が、貴僧たちは是れから何方へお出ですか。一休「何處と云ふて、是れから京都近くへ参るもの……」主「エ、然うですか、山家で何んにもありませんが、用意の濁酒、お疲れ休めに飲がつてお呉んなさい」と其處へ出した。悟「イヤモウ構ふて下さるな」と禮を述べ、禪師も悟助も餘り往ける口ではなく、主人を話し相手にして、一ト口二タ口と過し、近邊の土地の話などをして居る中に、夜は更けて参りましたから、主人に禮を言ふて次ぎの間で禪師と悟助はゴロリと横になつたが、晝の疲勞が出てスヤ／＼と其の儘眠つて仕舞つた、すると此方主人は何やら女房とヒソ／＼話をして居たが、主「それちや出かけ様か、女然うだね、奥の奴等もよく寝た様だからソロ／＼出かけやう」と其の儘打ち連れ立つて出て行きました、纏て夜は深く更け渡り初更の鐘も早や過ぎて、二更三更と相成ると、只さへ静かな山家、開ゆる者は二人の寝いびき計り、折しも寂寥を破つて

地獄太夫

モ一シ旅のお方……モ一シ旅のお方」最とも哀れに幽かに呼ぶ聲がする、寢入つてから暫らく經過て此方の二人、目覺き悟助は悟「ハテナ、怪しい聲がする、何んたらう」と耳を聳立て、聞いて居ると、又も「モ一シ旅のお方……モ一シ旅のお方」と云ふ聲が聞ゆるので、流石は氣の野晒悟助、ガパツとばかりに立ち上つた。一休「悟助何處へ行く。悟「ハッ禪師お目覺めでございますか、今お聞きでございませうが、怪しい聲がいたしますから……」一休「ウム、何うも怪しい、何んぞ仔細があるに違ひない、悟助、助けて遣はせ。悟「ハッ」と答へて悟助は其のまゝ奥の間の界の破れ葦戸を開けて見ると二疊程の間で荒蕙が敷いてある、其の隅の處に十八九と覺しき娘が、後手にブン縛られて、片側の柱に縛り付けられて居るので、驚いた悟助は禪師と顔打ち見合はせ。悟「ヤ、ッ」と打ち驚いたが、悟助は手早やく繩を解き、娘を禪師の側へ連れて参りました、娘はサメ／＼

と泣いて居る。一休「コリヤ娘。何うしたのぢや、見れば鄙しからぬ風体の其方が、斯様な人里離れし山家に居るとは……定めし深き仔細のある事ならん。悟「今禪師が云はれる通り仔細あらば語つて聞かせなさい、随分力になつて遣るから」と痛はり乍ら優しく云はれて娘は「娘「ハイ、有難う存じまする」と云ふも口の中、落る涙を双の袖にて拭ひつゝ「娘「委細のお話しは後に申しあげまする、一時も早く此處をお立ち退きあそばせ、鬼の夫婦の歸らぬ中……」足許より鳥の立ちまする様にせき立てまするから、さては此家は山賊か何にか良からぬものゝ住家なるかど、禪師も悟助もお覺りになり「一休「それでは此處の老夫婦は山賊の類であるか。娘「ハイ左様でございます、妾しは昨夜誘拐されましたもの、先刻鬼夫婦が出て行きましたのは、キツと手下を呼びに行つたに相違ございませぬ故、グツ／＼しておいでなつたら、貴方がたの御身の上も危ふございますから早や

くお逃げなさい」とせき立てました。然れども浪華の俠客野晒を扶ける男伊達、それしきの事には驚かす。悟「ア、然うですか山賊であらうが、何んであらうが、其様な事は心配しなさんな必らず助けてあげますから、安心しなさい」と娘のビク／＼して居るに引きかへて落着いて居ります。此の娘は此の近邊の豪農の娘。豫てより仲間の者等に附け狙はれて居たが、昨夜一寸夕景使ひに出た所を、三十二三になる荒くれ男二人にとり圍まれ、其の儘此處へ脊負つて來られたのでございます、一休禪師は先きの程より念珠を片手に布團の上に座禪をくみて聞いて居られた。一休「オ、それは氣の毒な事であつた、なれど拙僧等が此處へ泊り合はせたまは、其方にとつては佛の御加護、必らず心配さつしやるな、時に悟助、旅人を憐ます山賊とあつては、此の儘に見逃す譯にも行くまじ。悟「へい、左様でございます、私し

が一つ……ナニ山賊の五人や十人何程の事やららん、イヤ久し
 振り腕だめしを遣つて見やうと存じます「休夫れも宜いが、
 然し法の道は能く守り、無暗に殺生戒を犯してはならぬぞよ、
 悟「ハイ、畏まりました」と今にも賊共の歸るかど待つて居り
 ました、神ならぬ身の知る由しもなき山賊ども、全く好き鳥が
 かゝつた事と、喜び勇んで老人夫婦は腕も屈強の手下共七八人
 を従がへ歸つて参りました山賊「オイ一人は坊主で、一人は町人
 其の町人は大分腕に筋金が入つて居るらしいから、氣を付け
 て遣んねエ。○宜しうございます、何んの一人や二人……」と
 抜き足さし足で、我が家の入口まで窺ひより、戸に耳をあて
 内の様子を聞く。○頭「何んだか家の中は起きて話しをして
 居る様ですせ。頭「そんな事があるものか、先刻乃公達出て行く
 時、能く寝込んで居るやアがつたんだから……」
 ぞ、女の聲がして居るぞ。頭「ナニく」女の聲……」と云つて老

爺は戸の側に窺ひより耳を敏立て、聞いて見ると、いかさま女
 の聲がする。頭「ハ、ア、ぢやあの女郎奴、乃公達が山賊だと云
 ふ事を彼奴等に残らす……」○頭「然うかも知れませんが、頭
 シツ、此の上は荒療治をするより外に仕方がねエ、皆な其の積
 りで働け……」賊「合點でござんす」と號令の掛るや否や、悟助
 は早やくも表の容子を悟つて、悟「禪師、歸つて来ましたぞ」と
 悟助は立ち上がつて戸口の處まで進みよつた其の途端に、ガラ
 リツと先きに立つたる頭が、戸を開けて来る奴を、一泡ふかし
 て遣らんと、傍に在つたる三四尺もあらうと云ふ棒を持つて、
 今しも一足内へ踏み込んだる頭の右の足をバツと力に任せて拂
 つた。頭「アッ……痛てい……ッ」と叫んでバツタリと其處へ轉
 げた、其の時悟助は一刀スラリと抜き放ち、悟「ヤイ山賊奴等、
 落付いて乃公の云ふ事を能く聞いて、改心すればよし、若しも
 改心しなければ、片ツ端からなで斬りにいたすぞ。賊「何にを吐

しやアがる、相手はたゞ一人、何程の事やあらんと、山刀引き
 抜き、賊文句を並べず、有金残らず置いて行け、生命だけは助
 けて遣る、グヅグヅ吐かすたゞは置かぬぞ』と先に立つた奴
 が、斬つてかゝつて来た、悟助も、悟仕方がねエ、片ッ端から
 撫で斬りにしてやる』と云ひつゝ、ハツタと睨み付けた、其の
 權幕に避易するかと思ひの外、多勢を頼んで山賊ども、何を小
 癪など一同が抜き連れて斬り込んで来た奴を、猪口才なりと悟
 助はヒラリと体を變して、空を拂はせてその利腕を確と握り、
 エイツと掛け聲かけて、庭の柱へ投げ付けた、この手練の早業
 を見た奴原、荒腔を挫かれ呆れ返つて思はず知らず一歩退つた
 此の有様を御覽になつた一休禪師は、一休アハ、』とお笑ひな
 されて

向ふ見ずかぶせられたる紙袋
 猫ならなくに後ささりせり

斯かる一生懸命の場合にも誠に氣樂なもので、こんな狂歌をお
 詠みなされた、悟助は向つて来る奴を取つては投げ、或ひは刀
 脊打ちを喰はした、此の勢ひに賊輩も避易して仕舞ひ、悟助は
 此の体を見て、悟サア何うだ、手向ひするか、此の上手向ひを
 すれば、片ッ端から、打ち殺して遣らう』と云つて一刀を振り
 かぶつた。○下、何うか、命だけは助けを願ひます、悟夫れ
 では以後は改心するか。○へい、改心いたしました、何うか生
 命だけは……』と一同がバタ／＼と申し合せて様々に座りまして
 兩手をついた、此の有様を見て切齒をして口惜しがつたのは頭
 の老爺でございませう、何にしる向ふ脛を三尺棒でイヤと云ふ程
 力づくめに打たれたので、其處へ轉げたまゝ起き上ることも出
 来ず、張古で拵らへた虎も同然で、首ばかり振つて居ります、
 悟ヨシ、改心すると云ふのならば、命だけは助けて遣る、
 以後はキツと慎しめ、悪い事をして無事に遇せると思ふか、必